

語彙概念構造と進行相

2010 年 3 月

新潟大学大学院現代社会文化研究科

氏 名 星 野 真 博

この論文を大石強先生に捧げる。

目 次

目 次	i
序章 認知と統語のインターフェースとしての語彙概念構造	1
0.1 プラトンの問題から	3
0.2 語彙習得と構造	6
0.2.1 形態論	7
0.2.2 被動作主項の項具現	8
0.2.3 相インターフェース仮説	10
0.2.4 使役連鎖	11
0.2.5 非能格・非対格	12
0.2.6 まとめ	14
0.3 非構造的・特異的要素の特質	15
0.3.1 持続時間の取り方	15
0.3.2 選択制限の違い	17
0.3.3 時間的推移・文化の違いなどによる共通理解の差	19
第1章 構造的要素と特異的要素を併せ持つ語彙概念構造	25
1.1 語彙意味論における語彙概念構造表記とその問題点	25
1.1.1 統率束縛理論(Chomsky 1981)	25
1.1.2 語彙分解(Jackendoff 1990)	29
1.1.3 アスペクト研究・事象構造からのアプローチ	32
1.1.4 測定と相構造(Tenny 1994)	37
1.2 相インターフェース仮説に基づいた語彙概念構造	45
1.2.1 相構造と事象構造の類似性	45
1.2.2 構造的要素と特異的要素を区別した語彙概念構造 (RH&L 1998)	46

1.2.3	相構造と<ROOT>表示を用いた語彙概念構造	50
1.2.4	二つのタイプの BECOME	54
1.2.5	<ROOT>表示	61
1.2.6	CAUSE	68
1.2.7	事象構造鑄型	79
1.3	まとめ	82
1.4	追記：新語形成プロセス 動詞 <i>Michael Jackson</i> の変異から……	82
第2章	英語進行形の意味によるグループ分け	85
2.1	進行形の解釈	85
2.2	進行形の基本的意味	94
2.3	分類の基準	95
2.4	進行形の意味的グループ分け	97
第3章	グループ I の解釈	101
3.1	グループ I 解釈 まとめ	101
3.2	複数の意味を持ちうる進行形と単独の意味しか持たない進行形	102
3.3	グループ I の解釈を妨げる共通素性「瞬間 (punctual)」	107
3.4	状態を表す<ROOT>の相的特徴	113
3.4.1	Quirk et al. (1985) の分析	113
3.4.2	Carlson (1980) の分析	115
3.4.3	米山・加賀 (2001) の分類	117
3.4.4	段階性と非段階性	118
3.5	「結果状態の持続」用法と<ROOT>の相的素性	120
3.6	状態動詞の「一時的状態」を表す用法	126
3.7	特異的要素としての相的素性	132
3.8	まとめ	135

第4章	グループⅡの解釈	137
4.1	繰り返し解釈について	137
4.2	反復用法	139
4.3	副詞などの表現を用いる習慣用法 (habitual interpretation)	143
4.4	複数発生の場合	152
4.5	まとめ	157
第5章	グループⅢの解釈	159
5.1	動詞分類による説明の是非	159
5.2	限定的持続はどこにあるのか	162
終章	進行形から見える言語観	169
6.1	進行形の「限定的持続」	169
6.2	構造的要素から見える言語進化	169
6.3	サピア・ウォーフ仮説との関連	171
6.4	最後に	173
あとがき	175
References	177
索引	185

序章

認知と統語のインターフェースとしての語彙概念構造

ヒトは幼児期に個別言語を習得する際、刺激となる言語経験は不完全であるにもかかわらず、短期間で複雑な言語知識を習得する。Chomsky(1986a, 1988)は不完全な刺激でも母語話者が複雑な言語知識を獲得する謎をプラトンの問題(Plato's problem)と呼んでいるが、この問題は言語習得理論では大きな課題の一つである。従来、この問題は生成文法、特に統語面で検討されることが多かったが、この問題をもう一度、統語論の視点と、意味論の視点の両方から見てみよう。

プラトンの問題に対する Chomsky をはじめとした生成文法の研究家たちの答えは、ヒトが生得的に共通の言語獲得装置を持って生まれてくるというものである。この考えに従えば各個別言語文法はこの共通の言語獲得装置、普遍文法原理を元に言語刺激によってパラメータを設定していくことで獲得されることになる。生成文法が目指す普遍文法原理の追求とは言い換えればヒトが種として共通して個体差なしに持つ能力の研究である。よって研究対象は使用される場面によって変わりうる「具体的な状況における言語の実際の使用」である言語運用(performance)ではなく、常に真であるべき「母語使用者の母語についての知識」である言語能力(competence)となる。統語論は特に言語能力と関連のある分野であり、その研究はあくまで客観的、論理的に進められている。しかし、言語能力があれば、意味の細かい差異やメタファー、皮肉などの実際の言語運用が保証されるといえるだろうか？ これらも初めて聞く文だとしても理解されるという点ではプラトンの問題に関わりがあるといえるが、純粋に言語能力の観点からは解決できない可能性がある。

一方、語彙の意味は主観的、認知的な要因を抜きにしては考えられない領域である。実際、認知言語学者が重視するのは人間の身体性や感性、個人が持つ百科事典的世界知識や主観といったむしろ言語運用に関わる領域である。つまり、経験などの後天的要素が多分に含まれていることになる。また、語彙音声とその意味の間には恣意的な関係しかないため、音声と意味の関連の習得は生得的ではあり得ない。必ず後天的に習得するのである。しかし、語彙意味習得の全てが後天的で、全てが主観的だとしたら、今度はプラトンの問題を解決できるだろうか？ 何らかの基準なしに全て後天的・主観的に語彙意味が記憶されるとしたらそれは膨大な記憶の負担となるはずである。

言語はすべからく先天的で構造的な側面と、後天的で非構造的な側面を併せ持っている。そして統語は特に前者に、意味は後者に特化しているといえる。しかしこの二つは完全に分離しているわけではないと本論文は主張する。この二つの領域には橋渡しとなるべきインターフェースの領域がある。そしてそれが本論で提案する語彙概念構造なのである。

語彙概念構造という用語と概念自体は新しいものではない。述部の持つ意味とその統語特性との相関関係を表す方法として、述部の意味をさらに基本的意味成分に分解し表示したもので、Jackendoff(1972, 1983, 1990)や Rappaport Hovav and Levin(1996, 1998 : 以後 RH&L と略記する)などで用いられている。述部がどのような意味内容を表すか記述している点では認知的要素も含まれ、また述部がどのような統語特性と関連するかという点では統語的要素も含まれている研究領域であるといえよう。しかし、既存の分析では認知的要素と統語的要素の間に明確な線引きがなされてこなかった。本論文では Tenny(1994)の測定(Measuring out)の概念を用いて、この二つの間に明確な区別をつけている。

表示方法については、RH&L で提案されている方式を、一部修正を加えて採用している。RH&L では統語と密接に結びついている基本述語(primitive predicate)を構造的要素(structural elements)とし、意味内容を表す定項(constant)を特異的要素(idiosyncratic elements)として区別している。統語的な要素とそうでないものを区別した点で RH&L の語彙概念構造は画期的なものであるが、基本述語と定項の定義に不十分なところがあるため、本論文では第 1 章でいくつかの訂正を加えている。基本述語については Vendler(1967)や Dowty(1979)で言及されていた相分類の基準を破棄し、Tenny(1994)の提案する相構造に準ずることにした。こうすることでどの基本述語を用いるのかが明確になることになり、統語との連結の点で望ましくなる。また、定項の表示を<ROOT>という表記に変えた。このことによってこれまでの定項の表示では説明できなかった意味拡張が容易に説明できるばかりでなく、認知言語学的なアプローチにも配慮できる形式になっている。<ROOT>の表す内容は認知的であるが、構造的な基本述語との組み合わせることで、意味拡張性や選択制限などに構造的制約を課すことができるようになり、無秩序に主観的になることを防いでいる。つまり前述した、意味についてのプラトンの問題も解消されることになる。

本論文で提案するこの語彙概念構造の利点は進行相の多義性を説明する際に最も明確にあらわれてくる。Tenny(1994)が測定 of の概念を提案したのは主に限定(delimitedness)、または完了(telicity)といったアスペクトと統語との関連性を指摘するためであった。完了を表す語彙アスペクトと対格との間には密接な関連性があり、完了の語彙アスペクトは統語の点

からも説明できる可能性が高いが、進行相については、これを表す表現を持たない言語もあることからわかるように、必ずしも統語と影響が高いとはいえない。また、進行相の表す事象の持続性については話者の主観が相当含まれ、統語的なアプローチだけで多義的な意味の説明はできない。本論の語彙概念構造では完了の表示ができるばかりでなく、主観が大きく関与する進行相についても明確に表示が可能になっている。

本論文では(Hoshino 2007a, 2007b, 2008, 星野 2008a, 2009a)に言及しながら、論文執筆後に修正を加えた点、理論的に補足した点も含めて説明していく(第2章～第5章)。

この章では直接的な語彙概念構造の話題ではなく、この論文が明らかにしようとしている語彙概念構造の考えが言語全体の理論のどのあたりに位置づけられるのかを言及する。まずはプラトンの問題との関連から構造的要素と特異的要素の違いを明らかにし、同時に本論文の全体像を概略していく。

0.1 プラトンの問題から

母語を獲得する能力は自転車の運転や水泳のような後天的に得られる能力ではなく、遺伝的に伝えられた内在的な能力であるという考え方は Chomsky の理論では初期の段階から主張されている。自転車の運転や水泳は訓練なしには獲得できない技能だが、訓練すれば成人で始めても獲得できる技能である。一方言語は、「教えようと特別に配慮せずとも、その進歩を特別に注視せずとも(Chomsky 1965, pp. 200-1)」獲得される。ヒトが母語を獲得する際、出身に関わらずどの言語でも獲得が可能である。両親が日本人でも英語しか使われない環境で育てられれば子供たちは英語を母語として獲得するし、両親が英語圏の人間であっても、日本語しか使われない環境で育てられれば子供たちは日本語を母語として獲得する。しかし、成長してある時期を過ぎると、言語を「特別な配慮」と「進歩に対する特別な注視」なしで獲得することは困難になる。他にも、言語を獲得する過程が他の技能の獲得過程と大きく異なることはさまざまなところで指摘されている。

ではその内在的な能力とはどのようなものなのだろう。Pullum and Scholz(2002)は言語生得説に批判的視点から言語獲得に関わる議論で再三再四取り上げられる前提を次のようにまとめている。

- (1) 子供の言語獲得における特質
- a. 速さ(SPEED)
子供は言語をかなりの速さで獲得する
 - b. 信頼性(RELIABILITY)
子供は常に言語の獲得に成功する
 - c. 生産性(PRODUCTIVITY)
子供は本質的に無限の数の文を作り出し、理解できる
 - d. 選択性(SELECTIVITY)
子供は膨大な数の不正確な文法の中から正しい文法を選択する
 - e. 低証拠性(UNDERDETERMINATION)
子供はかなり不十分なデータに基づいて理論(文法)に到達する
 - f. 収束性(CONVERGENCE)
子供は同じ言語共同体内の言語体系と非常に近い言語体系に行き着く
 - g. 普遍性(UNIVERSALITY)
子供は人間の全ての個別言語に通じる普遍的類似性を示す言語体系を獲得する
- (2) 子供の言語獲得時の環境の特質
- a. 無褒賞性(INGRATITUDE)
子供は言語習得における進歩に特に褒美を受けるわけではない
 - b. 有限性(FINITENESS)
子供が触れるデータの履歴は有限である
 - c. 特異性(IDIOSYNCRASY)
子供が触れるデータの履歴は相当多岐にわたる
 - d. 不完全性(INCOMPLETENESS)
子供が触れるデータの履歴は不完全である(一度も聞いたことがない文が多い)
 - e. 肯定性(POSITIVITY)
子供が触れるデータの履歴は単に肯定的なものである(非文法文のデータはない)
 - f. 欠陥性(DEGENERACY)
子供の触れるデータの履歴は数多くのエラーが含まれる(いい間違いなど)

(2)のような「不完全なデータ」に関する話題は「刺激の貧困の議論(Arguments of poverty of the stimulus, 略称 APS)」と呼ばれている。生成文法の研究者がプラトンの問題の議論をするときはまず、(2)にある言語習得環境の不備を指摘した上で、(1)にある特質な言語獲得の事実を指摘し、その上でヒトの言語能力は経験と学習によって得られる物ではなく、遺伝的生得的にヒトがもつ内在的能力であると結論付けるのが普通である。

その一方、Pullum and Scholz(2002)は APS を唱える研究者が証拠として用いる文献に反証をあげて「刺激の貧困」の議論が安易に言語生得説の証拠として用いられていることに釘を刺している。Pullum らが反証を出しているものは N+V+-er 形の N が単数形であることに関する Gordon (1986)の調査、英語の助動詞の語順 Aux→T(M)(have+en)(be+ing)についての Kimball (1973)の考察、照応詞 *one* についての Baker(1978)の考察、Chomsky(1971)の助動詞倒置による Yes-No 疑問文の考察である。Pullum らのアプローチは下記の APS 明細図式(APS specification schema)を用いてそれぞれの命題の証明すべきポイントを明示し、それについて反証を挙げているもので、決して水掛け論的反証ではない。

(3) APS 明細図式

a. 獲得される知識(ACQUIRENDUM)の記述：

習得されると主張される知識の詳細

b. 獲得の際にキーとなるタイプの文例(LACUNA)の詳細：

もし学習者が、その文を入手する機会があるならば、ACQUIRENDUM が経験によって(data-driven)学ばれるという主張が支持されるような文例の素性特定

c. 必須性の議論：

もし学習が経験によってなされるものであるならば ACQUIRENDUM は LACUNA を入手する機会なしには習得できないと考える理由を与える

d. 入手不能性の証拠：

LACUNA の中にある文の証拠が言語獲得過程の期間中に入手できないという主張の証拠提示

e. 獲得の証拠

ACQUIRENDUM が実際に学習者が子供の時期に知るようになったと信じる理由を提示

Pullum らの主張は、APS の主張の多くが ACQUIRENDUM の設定方法に問題があったり、入手不可能性の証拠が希薄だったりしており、実証可能性に乏しいというものである。事実、コーパスの調査ができるようになった今ではそれらの論文がかかれた当時思われていたほど LACUNA の例が稀なケースでないことがわかっている。

Pullumらは、言語は全て経験によって得られるものである(data-driven learning)であると決して言っていないが、APSがきちんとした証拠に支えられたものではないことを指摘している。Pullum自身はPullum and Scholz(2002)に先立つPullum(1996)で、助動詞倒置によるYes-No疑問文生成の規則のような構造依存規則は経験に基づいて学習(hyperlearning)している可能性がある¹と指摘している。

言語獲得装置が鳥の翼やイルカのヒレやヒトの声帯などのように生まれながらに使用目的が備わった生物固有の生得的装置であるのか、Pullum の言うように学習によって到達可能なものなのかはこれ以上深入りしないことにする。だが、生得的装置としての普遍文法も、Pullum のような学習も、根底で共通して言えることは「構造依存」であることである。数学的にも有限の規則から無限の変種を生み出すことは可能であるから、言語が構造的であるということと発話される文が無限であることは理論的に全く矛盾しない。言い換えればプラトンの問題については言語が持つ「構造依存」という特性が大きな鍵を握っているといつてよい。

本論文では 0.2 節で、従来言われているような統語の構造依存だけでなく、語彙意味においても何らかの構造依存の部分があることを指摘する。0.3 節では逆に、構造では説明できない語彙意味の部分について言及し、語彙意味が統語に関係が深い構造的要素と認知に関係が深い非構造的な特異要素の二つを兼ね備えていることを主張する。

0.2 語彙習得と構造

Chomsky が「言語能力」または「言語の知識」と言った場合、文法操作を支配する原理を指し、語彙習得は含まれないのが通例である。言語を獲得したばかりの幼児は、語彙の数が限られているので、たとえ文法的に正しい文かどうか判断できても、聞いた文の内容

¹ このような学習を他の生物はできないと思われるので、少なくとも言語獲得はヒトが持つ生得的能力であることは間違いないと思われる。Chomsky の普遍文法との違いは Pullum の主張が一般的な学習能力で(実は貧困とはいえない)言語データを元に理論を組み立てていくものであるのに対し、Chomsky の普遍文法はすでに未入力のパラメータが用意されている形で(貧困であると考えられる)言語データによる入力を待っているものである、といえるであろう。言語データが適切に与えられているかどうかについては Pullum の言うとおり、今後の検証が必要であると思われるが、そのこと自体は言語獲得が生得的能力でないことの証拠にはならないだろう。

を全て理解ができるとは限らない。年齢的に十分な言語経験をつんだ大人でも、自分の興味関心のない分野の専門用語が並ぶ文章を読んで理解できるとは限らない。必然的に、語彙は経験的に習得されていくものであると結論付けることは容易である。しかし語彙習得の全てが経験であるといえるであろうか？ この節ではいくつかの証拠を元に語彙習得においても一部構造的な面が存在していることを明らかにしていく。

0.2.1 形態論

まず、語彙の研究でもっとも統語論に近い領域である形態論から始めてみよう。形態論では Williams(1981)の提案する次のような規則が存在する。

(4) 右主要部の規則(Righthanded Head Rule)

「形態論において、形態的に複雑な語の主要部は、その語の右側の要素である。」

この規則はヴェトナム語、フランス語など一部これに従わない言語もあるとはいえ、日本語、英語をはじめ、多くの言語に観察される一般化である(伊藤・杉岡 2002, p.4)。この規則があるので、初めて聞いた語であっても合成前の語義をもとに理解可能である。またこの規則を用いて新たな合成語を作り出すことも可能であり、形態論はきわめて統語に近い。しかしその一方で次のような現象も存在する(伊藤・杉岡 2002 pp.10-11)。

- (5) a. curious / curiosity
- b. gorgeous / *gorgeosity
- (6) a. free / *freeness
- b. true / *trueness

(* は非文法的であることを示す)

接尾辞-ity は主にラテン系の基体のみに付加するが、たとえラテン系の基体であっても(5b)が示すとおり *gorgeous* とは結びつかない。また、接尾辞-ness はラテン系、ゲルマン系に関わらず結びつくが、(6)にあげた *free* や *true* のように固有の名詞形 *freedom*、*truth* を持つ語については付加が阻止される。つまり、これらの語句については構造から導き出されるものではなく、後天的に習得するしかない語句といえる。*gorgeosity* や *freeness*, *trueness*

のような語は「構造的には可能であっても存在しないギャップ」と呼ばれる。本論文では進行形の意味の多義性について、このような「構造的には可能であっても非構造的な特異要素によって妨げられる」事例が数多くあげられることになる。

形態論でもう一つの大きな構造的特徴として挙げられるのが「二分岐構造制約」である。形態規則の特性として、語構造の枝分かれは二分岐までであり、一つの節点から三つ以上に枝分かれする語構造はない²。この二分岐の構造は統語論でもLarson(1988)が提案して以来Kayne(1994)の線形対応の公理(Linear Correspondence Axiom)を経てChomsky(1995)のミニマリストプログラムに至るまで引き継がれている。この意味で形態論も生得的であると考えられる統語同様の枠組みで説明される構造を持っているといつてよい。

語形成の段階でも構造のレベルで説明できる語形成と構造外レベルで説明されるべき語形成が存在する(伊藤・杉岡 2002)。その構造外レベルで説明されるべき語形成には語彙的ギャップが多いことも指摘されており、そのことからすでに形態論のレベルでも構造的要素と非構造的、特異要素の違いによる差がはっきり見られることが明らかであろう。

0.2.2 被動作主項の項具現

語彙意味論の点からまず指摘しておきたいのは Fillmore(1970)の *hit* と *break* の相違である。

- (7) a. The boy broke the window with a ball.
(少年はボールで窓を壊した)
- b. The boy hit the window with a ball.
(少年はボールで窓を叩いた)
- (8) a. The window broke.
(窓が壊れた)
- b. *The window hit.
(*窓が叩けた)

² ただし、日本語の「上中下」「松竹梅」「東西南北」「春夏秋冬」のような並列リストの語は除く。

- (9) a. I broke his leg. / *I broke him on the leg.
(私は彼の脚を折った)
- b. I hit his leg. / I hit him on the leg.
(私は彼の脚を叩いた)
- (10) a. Perry broke the fence with a stick.
(ペリーは棒でフェンスを壊した)
- b. Perry broke the stick against the fence.
(ペリーはフェンスにぶつけて棒を壊した)
- (11) a. Perry hit the fence with the stick.
(ペリーは棒でフェンスを叩いた)
- b. Perry hit the stick against the fence.
(ペリーは棒をフェンスに叩きつけた)

動詞 *hit* と *break* は(7)で表されるようにどちらも動作主(この場合は *the boy*)と対象となる被動作主(この場合は *the window*)、それと手段を表す道具(この場合は *with a ball*)の3つの項を取る。しかし、(8)のように *break* が被動作主を主語にした自動詞構文が取れる(この操作は使役起動交替と呼ばれる)のに対し、*hit* ではそれができない。また、(9)のように *break* は体の部位の所有格が目的格に昇格する交替(Body-Part Possessor Ascension Alternation: Levin 1993, p.71)を許さないが *hit* では可能である。(10)(11)の *with/against* 交替では *break* の場合、意味が変わるのに対し、*hit* では表す内容が変わらない。

Fillmoreは*break*と同様のパターンを取る動詞として*bend, fold, shatter*などをあげ、*hit*と同様のパターンを取る動詞として*slap, strike, bump*などをあげている。そして*break*型の動詞と*hit*型の動詞の意味上の相違点は被動作主の変化の有無であるとしている³。*break*型の動詞の被動作主は動詞が示す事象が完了すると*break*ならば「壊れた」状態に、*bend*ならば「曲がった」状態に変化してしまう。一方、*hit*型の動詞の被動作主は動詞が示す動詞が完了しても変化を伴わない。*hit*されても*slap*されても被動作主は物理的な変化をすることなくそのままである。Tsunoda(1985)の他動詞性に関する研究によれば数多くの言語で有生動作主と変化を受ける被動作主を項に取る動詞は主格—対格言語においては主格—対格パターン

³ 「被動作主」「物理的な変化」「非影響性」といった定義はその定義にあいまいさが残るため、本論文では最終的には採用しない。代わりに用いるものはTenny(1994)の「測定(measuring out)」の概念である。詳しくは第1章。

をとるという(能格－絶対格言語では能格－絶対格)。その一方で変化を伴わない項の統語上の具現は言語間で異なる。例えば英語では*help*は主格－対格パターンであるが、ドイツ語の*helfen*は主格－与格パターンを取る。また英語では支配や権威を表す動詞*govern*や*command*が主格－対格パターンを取るのに対し、ロシア語の*управлять, командовать*では主格－造格パターンを取る(Levin 2005, p.21)。Tsunoda以外にも言語間の被影響性(affectedness)に関する多くの研究成果から被動作主の変化の有無が統語具現に大きな影響を与えていることが指摘されている。このことから、被動作主の変化の有無というのはヒトの言語において共有されている概念であると考えられる。また、この概念が各個別文法上でそれぞれ重要な役割を果たしていることから、ヒトの言語に共通する構造的な性質とってよいだろう。

0.2.3 相インターフェース仮説

事象が時間的終点を持つかどうかと動詞の直接内項の意味内容の間に密接な関連があるのではないかという仮説が Tenny(1994)によって出されている。英語では、ある事象が完了(telic)、つまり時間的終点を持つのか、非完了(atelic)、つまり時間的終点を持たないのかは *in/for* テストをすることで調べることが可能である。

- (12) a. *John slept in an hour.
(*ジョンは一時間で眠っていた)
- b. John slept for an hour.
(ジョンは一時間眠っていた)
- (13) a. John consumed an orange in an hour.
(ジョンは一時間でオレンジを食べきった)
- b. *John consumed an orange for an hour.
(*ジョンは一時間オレンジを食べきった) (Tenny 1994: p.6)

(12)では動詞 *sleep* は *in* 句と共起できないことから、この事象は完了事象ではないことが示される。一方(13)では動詞 *consume* が *in* 句と共起でき、この事象は完了事象である。しかし、同じ動詞でもどのような項を取るかで事情が異なる場合がある。

- (14) a. Chuck ate an apple (*for an hour/in an hour).
 (チャックは{*一時間/一時間で}リンゴを一つ食べた)
- b. Chuck ate ice cream (for an hour/*in an hour)
 (チャックは{一時間/*一時間で}食べ放題アイスを食べた)
- c. Chuck ate apples (for an hour/*in an hour).
 (チャックは{一時間/*一時間で}食べ放題のリンゴを食べた)

このことは、事象が完了かどうかは動詞だけで決まるものではなく、項の限定性が関与していることを示している。Tenny は事象が時間的終点を持つかどうかの決定に関わる項に測定項(MEASURE)という相的役割を与えて説明している。この測定という概念については本論文の主張においてカギとなる概念であるため、詳細は第1章で詳しく説明し、ここでは本章の議論で大事な部分だけにとどめることにするが、Tenny はこの測定について「測定項は必ず直接内項である」という仮説を提案している。またさらに統語と意味との普遍的連結規則についても「主題構造のアスペクト的な部分だけが可視である」としている。つまり、どの言語であっても測定項が統語的に具現する形は変わらないと言い換えてよい。実際、英語の場合、測定項は対格ないし非対格動詞では主格の位置に具現する。

仮説ではあるが、真実であればヒトが生得的に持つ能力の一つとして共通に持つ能力ということになる。

0.2.4 使役連鎖

語彙事象概念を研究するアプローチのひとつに、Croft(1990, 1991, 1994)や Langacker (1991)などに代表される使役連鎖の点から捉えているものがある。この考え方の基本は事象の因果関係を力の伝達で捉えていることである。

- (15) a. ある単一事象 (simple event) は使役ネットワークの一部である
- b. 単一事象は非分岐型の使役連鎖になっている
- c. 単一事象は力の伝達を含む
- d. 力の伝達は起動主と終点という隔たる関与者を持ち非対照的である

(Croft 1991: p.173)

単一事象は力の伝達の連鎖として表される。例えば*John opened the door with a chisel.*(ジョンはノミでドアを開けた Fillmore 1968: p.27)のような場合、起動主の*John*は道具に当たる*a chisel*に力を伝達し、*a chisel*は対象である*the door*に力を伝達し、その結果*the door*は*open*の状態に到達する。この事象はまるでビリヤードのボールのように一つの出来事が連鎖的につながっていることからビリヤードモデル(billiard-ball model)と称されることがある。このような使役連鎖は必ずしも全体がそろっている必要はない。例えば*The door is open.*(ドアが開いている)のような結果状態だけの場合も、*The door opened.*(ドアが開いた)のような結果状態への変化の場合もありうるし、道具の関与を含まない*John opened the door.*(ジョンがドアを開けた)の場合もありうる。しかし、力の伝達が連続しない事象は単一事象として言語で表すことはできない。**The door opened Mary sneeze.*(ドアが開いてメアリーにくしゃみをさせた)のような結果構文が、たとえ対応する事実があったとしても作れないのはこのような連鎖ができていないからである(対応する日本語は単一事象ではなく、二つの事象で記述してある⁴)。

もしヒトの言語がこのように理論上ありうる出来事であっても単一の事象で記述できないという特徴を共通して持つとしたら、それは強力な構造上の制約ということになる。

0.2.5 非能格・非対格

動詞のうち単一の項のみを取る自動詞は、その項が外項になる非能格動詞とその項が内項になる非対格動詞にさらに下位分類される。この分類が初めて Perlmutter(1978)提案された時は関係文法(Relational Grammar)の枠組みで論じられているが、のちに Bruzio(1986)によって統率・束縛理論(Chomsky 1981)の枠組み内でも採用され、生成文法でも取り扱われている。この二つの自動詞の区分は広く言語全般に見られ、各々の言語で統語的な違いとなって表れている。例えばイタリア語では複合完了形を形成する際、英語の *be* に相当する助動詞 *essere* を用いる自動詞と *have* に相当する *avere* を用いる自動詞が存在し、ほぼ同様

⁴ 王(2005)は中国語の結果複合動詞の興味深い例を挙げている。

- i) 马拉松跑累了小明。
(マラソンは小明を走り疲れさせた)

複合動詞「跑累」を単一事象と取った場合、力の伝達は(15)の原則に従わないことになる。しかし、この文を含め、このような複合動詞には小明跑累了。(小明は走って疲れた)のような自動詞の用法が存在し、この文自体は(15)の原則に従っている。英語でも *The trainer jumped the horse over the fence.*(調教師が馬にフェンスを飛び越えさせた)のような非能格動詞に使役主を付加して他動詞化させることが可能であるが、**The trainer jumped the horse over the fence tired.*(調教師が馬にフェンスを飛び越させ疲れさせた)のようにさらに結果状態を付加することはできない。しかし複合動詞の他動詞は単一事象ではなく複合事象であると考えたと説明はつくと思われる。この件についてはさらにデータが集まってから検討することにする。

のことはフランス語やドイツ語などでも当てはまる。イタリア語の例でいえば、前者が非対格動詞に相当し、後者が非能格動詞に相当する。それぞれのグループに属する動詞の意味内容に共通性があることから、Perlmutter(1978)では非能格と非対格の分類は意味的に決定されるとしているが、次のようなさまざまな事実から統語的側面があることも否めない。まず、英語非対格動詞の場合、項を動詞の後ろにおいて主語の位置に **There** を挿入する構文が可能であるが(16)、他動詞(17)や非能格構文(18)では不可能である。

- (16) a. An accident occurred.
 b. There occurred an accident.
 (事故が起きた)

- (17) a. He ate bananas.
 b. *There ate he bananas.
 (彼はバナナを食べた)

- (18) a. She swam.
 b. *There swam she.
 (彼女が泳いだ)

また、名詞化構文における前置詞句の使われ方は非能格構文の主語相当句が動作主を表す **by** 句になるのに対し(=(19))、非対格構文の主語相当句は対象を表す **of** 句になる(=(20))。

- | | | | |
|------|----|---------------------------------|----------------|
| (19) | a. | dreaming by children | (子供が夢をみること) |
| | b. | meditation by experienced monks | (経験を積んだ僧による瞑想) |
| | c. | smiling by movie star | (映画スターの微笑み) |
| (20) | a. | sinking of/*by the ship | (船の沈没) |
| | b. | dripping of/*by the faucet | (蛇口の滴り) |
| | c. | the existence of/*by demons | (悪霊の存在) |
| | d. | rise of/*by the price of steak | (ステーキの価格の上昇) |

(影山 1996)。

さらに、ベルファスト英語の一方言には非対格動詞の命令文で主語が後置されることがあ

るという報告がある。しかし、この主語後置は(22a)の他動詞の場合や(22b)の非能格動詞の場合は発生しない(Radford 2004: p.256 イタリックの部分の主語)。

- (21) a. Leave *you* now!
(去りたまえ！)
- b. Arrive *you* before 6 o'clock!
(6 時前に到着しろ！)
- (22) a. *Read *you* that book!
(その本を読め！)
- b. *Eat *you* up!
(全部食べろ！)

これらに共通することは非対格動詞の主語に当たる項は目的語の位置に写像されることがありうるということである。これらの事実から非対格構文の主語となる項は基底の部分で目的語の位置に現れると考えられている。

Perlmutter(1978)、Levin and Rappaport Hovav(1995)では非対格構文は意味的に決定され、統語的に表されるとしており、本論文もこの考えを支持する。無秩序に分類されるのではなく、何らかの共通の意味基準をもとにどの言語でも非能格と非対格に相当する分類を持っている。そしてそれは統語的に異なる形で表される。このことはすなわち、ヒトの言語の意味には構造的に説明される部分があることを明確に示していると言えるのである。

0.2.6 まとめ

以上のことから、一般的に後天的に学習されると考えられている語彙意味でも構造的な（そしておそらく生得的な）要素が存在していることがわかる。特に本論文では 0.2.3 で挙げた相インターフェース仮説、0.2.4 で挙げた使役連鎖、0.2.5 で挙げた非能格・非対格の3つの要素が、事象の概念的意味を表すうえで重要であると考えている。これらは項の統語的具現と密接に関係があると考えられてきた概念であり、これまでも様々な研究がなされてきた。本論文では、これらの3つの要素に関わる構造的な要素は項の具現に関する部分についてのみに関与すると限定し、項具現に関わらない差異については構造的要素以外の要素が関与していると主張することになる。次節ではそのような非構造的要素の例を

挙げ、非構造的要素の持つ意味の大まかな全体像を提示する。

0.3 非構造的・特異的要素の特質

前節では語彙意味のうちの構造的な部分について述べた。文法的な枠組みを決める上で構造要素が重要な役割を果たすのは間違いない。しかし、実質の語彙意味の大半はそれぞれ個別で習得される後天的なものである。だが、ヒトが持つ膨大な数の語彙⁵が何の指針もなく習得されるということがありえようか。構造的要素はヒトが共通に持つ能力であるが、これから上げる要素は共通とは言い難い要素である。それらは時には場面依存であったり、背景知識を必要としたり、主観に基づくものだったりする。これらは集団内、個人内でも基準がまちまちでありうる。いわば生成文法論者が言語運用の領域として目をそむけてきた部分も含まれている。しかし、この領域が存在していることは明らかであり、本論文の目的はこれらの領域が言語能力の中でカバーしている範囲を設定することでもある。その設定についての詳細は第1章で扱うことにし、ここではどのような事柄が非構造的であるのかを見ていく。

0.3.1 持続時間の取り方

前節で触れたとおり、測定項が直接内項になるという Tenny(1994)の分析はヒトの言語の構造的な側面を現しているといえる。旧来の言い方であれば完了(*telic*)・不完了(*atelic*)の区別は構造的と読み替えてもほぼ差し支えない。では他の相ではどうだろう。本論文の後半では主に進行相について言及していくが、進行相は世界の諸言語を比べてみると完了・不完了の区別ほど文法中に明示されているわけではない。比較的進行相の表示がはっきりしている英語の *be* ~ *ing* の使用頻度も Quirk et al. (1985, p.198)によれば動詞句中の5%に満たない。フランス語などロマンス系言語では過去時制では半過去(フランス語、イタリア語などの用語)または線過去(スペイン語などの用語)で進行相と同様な意味を表すが⁶、現在時制では進行相は現在形で表わされている⁷(スペイン語は *estar*+現在分詞で、イタリア語では

⁵ 日本版 Wikipedia(<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E8%AA%9E%E5%BD%99>)によると日本人の20歳の理解語彙の総量はおおよそ4万5000~5万語(森岡 1951)、Wikipedia 英語版(<http://en.wikipedia.org/wiki/Vocabulary>)によれば大学一年生の語彙サイズは12,000語(Zechmeister, Chronis, Cull, D'Anna, and Healy 1995)である。これに固有名詞や読んだり聞いたすれればわかる受容語彙を含めればさらにそのサイズは大きいと思われる。

⁶ 厳密に言うフランス語の半過去は持続よりも未完了を強調している。持続を強調しているスペイン語の場合、*empezar*(始まる)などの瞬間を表す動詞は線過去形を持たない。

⁷ ただし、*en train de* を用いて同様の意味を表すことはできる

stare+現在分詞で進行相をあらわすことができるが、使用頻度は現在時制のほうが多いとおもわれる)。ドイツ語では現在時制でも過去時制でも進行相に相当する形はない⁸。このことから、進行相は完了・不完了などのように明白に構造的な要素ではなく、各言語それぞれに固有の文法事象であると考えてよいだろう⁹。よってその取り扱いも完了・不完了ほど厳密なものではない。

進行相で表されるような出来事の持続時間に関する扱いが厳密な概念でないのは同一の言語内であっても観察することができる。Tenny(1994)は状態変化動詞(Change-of-state verbs)の持続時間が相対的なものであるとしている。状態変化動詞は Vendler(1967)の相分類に従えば到達動詞(achievement verb)に当たり、従来では(23)で示すように瞬間的に発生する出来事を表すと考えられていた。

- (23) a. The baseball cracked the glass.
(野球のボールがガラスをパリッと割った)
- b. The terrorist exploded the bomb.
(テロリストが爆弾を爆発させた) (Tenny 1994, p.16)

しかし Tenny は *crack* や *explode* が示す事象が必ずしも瞬間的に起きるものとは限らないと指摘している。例えば木の太枝がパリッと音を立てて割れるには数分かかるし、超新星が爆発するには数百万年かかるのである。同様な例が動詞 *change* にも言える。*change* も状態変化動詞であるが、変化する対象を表す項が、変化前変化後の2つの状態しか持たない項(non-gradable)であるか、変化するまでに段階がある項(gradable)かで、瞬間の出来事なのか持続的な出来事なのかが異なる。

- (24) a. The traffic light changed.
(信号が変わった)
- b. #The traffic light is changing.
(*信号が変わって行く途中だ/ 信号がもうすぐ変わる)

⁸ ラインラント方言では *sein + am +* 動名詞,または *sein + beim +*動名詞を使って進行相を表す。

⁹ 進行相に関わる章では再三言及するが、日本語ではほぼ「テイル」形が進行相にあたる。中国語では進行相では「正在」、持続相では「着」と使う語句が異なる

は要求されている意味とは違う内容であることを示す。

- (25) a. The situation changed.
(状況は変わった)
- b. The situation is changing.
(状況は変わっていく途中だ)

また、状態変化動詞以外にもこのような事例は存在する。一般的に動詞 *breathe* は状態動詞であり進行形にする必要はない(26)。しかし、行動様式(manner)を表す副詞句と共に起すると活動動詞の意味が強まり進行形にしやすい(27)。

- (26) a. The monster breathes with gills.
(その怪物はエラ呼吸する)
- b. #The monster is breathing with gills.
(その怪物はエラ呼吸している) *普段肺呼吸しているなら可
- (27) a. The monster breathes rapidly.
(その怪物は呼吸が速い)
- b. The monster is breathing rapidly.
(その怪物は速く呼吸している)

以上のように同じ動詞であっても項の選択やその他の状況によって持続時間の扱いが異なる現象は多く見られる。その判断はヒト共通の規則で決まっているわけではなく、あくまでその発話が見られた時点での状況や主観によって決まるものである。

0.3.2 選択制限の違い

Ritter and Rosen(1996)は動詞の意味選択制限によって取りうる統語操作の幅が異なるという趣旨の提案をしている。まず、意味選択制限の緩い語彙(weak verb)は項の取りうる意味範囲が広いのに対し、選択制限の強い語彙(strong verb)はその項の取りうる意味範囲が限定的である。(28)の例では *kill* が最も選択制限の緩い動詞であり、*murder* は「人」が「人」を殺す行為にのみに用いられるという選択制限がかかっている。さらに *assassinate* は殺される対象や殺す方法などに追加の制限がかかることになる。

- (28) a. Somebody killed/murder/assassinated the senator.
(誰かが上院議員を{殺した/殺害した/暗殺した})
- b. Somebody killed/murdered/*assassinated our neighbor.
(誰かが隣人を{殺した/殺害した/*暗殺した})
- c. Somebody killed/*murdered/*assassinated the squirrel.
(誰かがリスを{殺した/*殺害した/*暗殺した})
- d. The shock killed/*murdered/*assassinated the senator.
(ショックが上院議員を{殺した/*殺害した/*暗殺した})

選択制限は動詞が指し示す意味内容の幅にも影響する。(29)では *copy* という動詞がその手段に関わらず写し取る行為に使えるのに対し、*Xerox* という動詞は機械を用いた光学的複写機(*Xerox* 社製もしくはその商標を持つものでなくてもかまわないが)を用いて写し取る行為のみに限定されることが示されている。

- (29) a. I can't copy/Xerox this paper; the machine is broken.
(このレポートは{写すこと/コピー}できないよ。機械が壊れているから)
- b. I can't copy/*Xerox this paper; I don't have a pencil.
(このレポートは{写すこと/*コピー}できないよ。鉛筆もってないし)

選択制限はさらに、とりうる項の数にも影響する。選択制限の強い動詞は項の数が固定されているが、逆に選択制限の緩い動詞はいくつかのバリエーションがありうる。動詞 *copy* や *kill* が単項の自動詞でも使えるのに対し、選択制限の強い動詞ではそれが許されない。

- (30) a. We copied the article.
(私たちはその記事を写した)
- b. We didn't copy.
(私たちはズルしていない)
- (31) a. We Xeroxed the article.
(私たちはその記事をコピーした)

- b. *We didn't Xerox.
- (32) a. The terrorists killed the pilot.
 (テロリストたちはパイロットを殺した)
- b. The movie star was dressed to kill.
 (その映画スターはハッとするような着こなした)
- (33) a. The terrorists murdered the pilot.
 (テロリストたちはパイロットを殺害した)
- b. *The terrorist was prepared to murder/assassinate.

Ritter らはその他にも事例を挙げているがここでは割愛する。彼女たちの主張は項の写像がレキシコンから統語への写像ではなく、イベント構造から統語への写像であって、レキシコンの情報は単に選択制限情報のチェック機能として仲介するだけであるというものである。実際、この流れを受けて Ritter and Rosen(1998)ではイベント構造を表す機能範疇を用いた統語モデルも提案している。本論文が提案するモデルでは機能範疇は採用しない。Ritter らは統語にイベント構造を導入しているが、形態論や項選択など統語前の段階でもイベントが関与していると考えられる部分があり、本論文では語彙の段階でイベント構造を切り離すことはできないと考えている。よって本論文では語彙レベルの段階でもイベント構造を反映させるために、イベント構造が深くかかわる項選択と項具現に関わる部分は構造的な要素によって語彙意味表示している。一方 Ritter らの指摘する選択制限の幅が統語に影響するという事実は、構造的な要素とはことなる特異的要素として語彙意味表示することで表している。

話を元に戻すが、この動詞の選択制限の強弱は個人差を伴う部分が多い。例えば(28b)の例で、もし隣人が VIP であれば *assassinate* を含む文も当然認められる文になる。(28c)も飼主がリスに対して強い感情を持っていれば、*murder* も認められる可能性がある。もちろん、それらの意味解釈は無秩序に認められるわけではないが、ヒトの言語に共通して認められるものではないのである。よってこれらの意味選択の強さも構造的な要素ではなく、非構造的な特異要素であると考えられる。

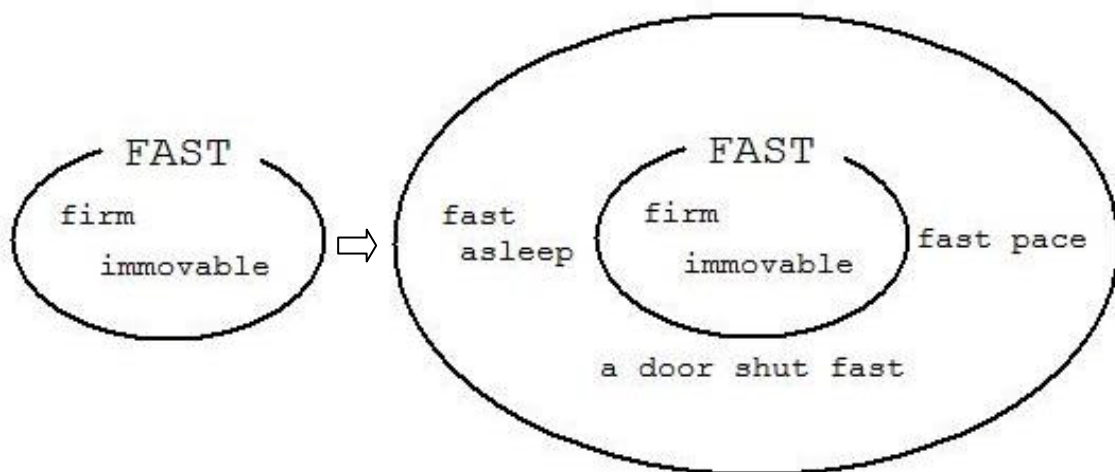
0.3.3 時間推移・文化の違いなどによる共通理解の差

歴史的に意味が変化してきた語彙の中には本来の意味から派生的に生じた意味が時間と

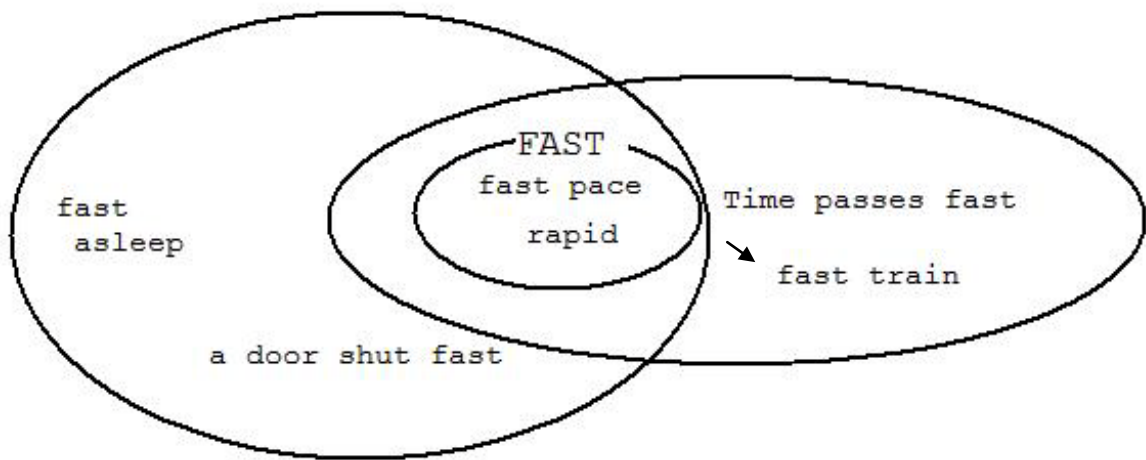
ともに中心的な意味に変異したものがいくつもある。Bradley and Portter(1967)によれば副詞 *fast* は本来、「しっかりした(*firm*)、動かせない(*immovable*)」の意味であった。この意味はやがて移動における力強さや一定のペースを変えずに保つ様を指すようになり「速く走る(=速度を落とすことなく走る)」の意味が可能になったのだという。そしてこの意味を獲得した後は現代の「速さ」を表す意味が普通に使われるようになった。

もし本来の意味が完全に固定しているのだとしたら、このように本来の意味とは正反対の意味が生じることはあり得ない。このような意味の変化があるのは、まず本来の意味の持つ境界が状況に応じて拡張できるフレキシブルさがあるからである。そして拡張された用法が本来の意味より使用頻度が高くなった場合はそちらの方が基本的な意味になる。現代でも *fast* には *fast asleep*(ぐっすり眠る)や *a door shut fast*(しっかりと閉じたドア)のように原義を残す用法もあるが、現代の意味がさらに拡張されることで原義の段階にはない *The time passes fast*.(時間は速く流れる/*時間は動かない)のような用法も登場している。(34)に示すように、意味の境界の曖昧さがあるからこそ時代による意味変化がありうるのである。

(34) 本来の FAST の意味の広がり

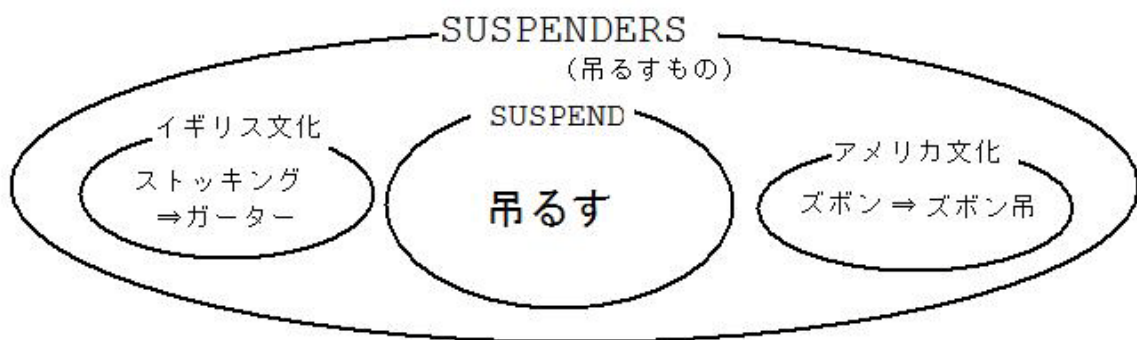


(35) 変化した FAST の意味



同じ音声列を持ち、同じ語源を持つ語が話されている地域によって意味が異なる場合もある。名詞 *suspenders* はアメリカ英語では「ズボン吊」であり、イギリス英語では「靴下留め」である。どちらも動詞 *suspend*(吊るす)からの派生であり、確かにどちらも衣類を上から吊るしていることは共通しているが、衣類の習慣の違いから吊るされる衣類が異なっているのである。

(36) イギリスとアメリカの SUSPENDER の意味の差

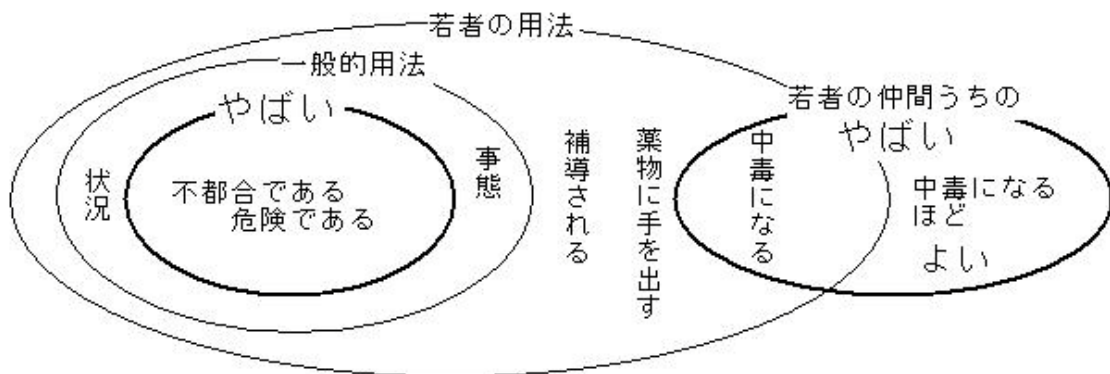


名詞 *rubber* も同様の違いがある。「ゴム」の意味ではイギリス英語もアメリカ英語も共通であるが、拡張した意味には差がある。つまり、イギリス英語では「消しゴム」を意味するがアメリカ英語では「コンドーム」の意味である。「消しゴム」も「コンドーム」もゴ

ムでできた製品であったことは変わらない(ただし、現在は純粋な意味ではどちらもゴムとは言いきれない。前者は現在、ほぼプラスチック製であり、後者はその他の樹脂で作られているものも多い)。しかし、ゴム製品から連想されるものが文化によって差があったためにこのような差異が生じているのである。

日本語でも世代間で同じ音声列でありながら意味が異なる例がある。形容詞「やばい」は広辞苑の記載では「不都合である。危険である」とある。もともと「危険なさまをいう隠語」の「やば」が語源であるという。ところが若者を中心に「やばい」という言葉は「(病みつきになりそうなほど) よい、おいしい」という肯定的な意味合いを持つようになっていく。これももともとある「危険」という意味が拡張され、さまざまな危険な状況が想起されていく中で、若者文化で身近な「危険」である「薬物中毒」が結びつき、そこから「中毒になる・病みつきになる」という用法が広がり、やがてこの過程を経ずに肯定的に使われるようになったと考えられる。

(37) 若者の「やばい」



語彙意味にはこのように文化や時代背景などを反映した推移が見られる。それはレキシコンの段階で非構造的で認知的な要因が含まれているからに他ならない。統語の段階で計算的とすら言えるほど構造的なシステムがある一方で、意味の段階は計算だけでは説明できないファジーな領域が存在している。このファジーな領域からシステムティックな領域への橋渡しは必ずどこかにあるはずである。この橋渡しの段階でファジーな要素は何らかの形で秩序だった体系に当てはめさせられることになる。中には創造的な組み合わせになるものもあるだろう。この創造的な要素があるからこそ、メタファーなどの創造的表現が生まれると考えられる。本論文ではこの橋渡しのプロセスが統語以前の段階、すなわちレ

キシコンの段階で行われており、レキシコンの段階で既に構造的な要素が含まれていると考えている。ここで提案する語彙概念構造は統語に情報を橋渡しするのに必要な構造的な要素と認知的情報や選択制限からなる非構造的な特異要素を組み合わせたものである。この語彙概念構造を提案することで、本論文はレキシコンに統語と認知のインターフェースがあるものと主張する。

第 1 章

構造的要素と特異的要素を併せ持つ語彙概念構造

1.1 語彙意味論における語彙概念構造表記とその問題点

語彙意味論の分野では、統語構造上の様々な現象（特に項の統語構造上での具現）は述語の語彙特性から派生しているという仮定の下で様々な研究がなされてきた。この分野の研究では述語の意味構造は認知的なアプローチではなく、統語的な面からのアプローチで行われてきた。すなわち、背景の違いや手段の違い、規模の違いといった意味上の差異などを問題にするのではなく、文型に与える影響や統語的な交替現象の可否といった違いが焦点であった。だが実際は、序章でも触れたように、意味には構造的な部分と非構造的な特異的部分があり、どちらかだけを取って全て説明することはできない。本論文では語彙概念構造と呼ばれる意味表示の新しい方法を提案するが、それは統語と密接に結びつく構造表示の部分と認知と密接に結びつく特異要素とを明確に分離して表示しているものである。このように記述することで様々な意味的制約が統語に関わる制約なのか、認知に関わる制約なのかを容易に見分けることが可能になる。本論文では具体例として第 3 章以降で進行形の多義性について見ていくことになる。

具体的な議論に入る前に、先行研究における語彙意味と統語の関係を表示する試みをいくつか検証してみる。それぞれのアプローチの特徴と問題点を指摘することで本論文の提案の妥当性を実証してみたい。

1.1.1 統率束縛理論(Chomsky 1981)

統語と意味をつなぐ語彙意味表示として 1980 年代まで多く用いられた方法に主題役割(Thematic roles または Semantic roles)の考えがある。これは Gruber(1965)、Jackendoff(1972)の主題関係(Thematic relation)、Stowell(1981)の θ -格子(Theta-grid)、Fillmore(1968)の格文法(Case Grammar)における格(Case)などに共通に見られる考えで、項と述語間の意味論上の関係を項の取りうる意味内容で表示するものである。例えば Gruber(1965)、Jackendoff(1972)では全ての文は「主題(Theme)」項になる名詞句を含み、どれが「主題」になるかは動詞の意味内容で決まるとしている。この「主題」も主題役割の一つである。移動を表す動詞ではその移動の対象になる名詞句が「主題」であり、位置を表す動詞ではその位置を占める

名詞句が「主題」である¹。このほかにも動詞によって表される行為を行う「動作主(Agent)」や「主題」が位置する場所を表す「場所(Location)」なども主題役割として提案されている。

Chomsky(1981)の統率束縛理論の枠組の中でもこの主題役割の考え方は θ 理論(θ -theory)の中で重要な役割を果たしている。 θ 理論では動詞の取る主題役割(θ -role)と動詞の取る項が一对一の対応関係にある。よって語彙目録(lexicon)に記載された項構造に従って項具現がなされることになる。例えば動詞 *put* の語彙目録中には以下のような項構造が記載されているとする。

(1) *put*: <Agent, Theme, Location>

(1)で記された項構造は動詞 *put* が「動作主」「主題」「場所」の3つの主題役割を要求し、下線の引かれた「動作主」の項は外項として具現する、ということを意味している。また、項構造に記載されているそれぞれの項がどの統語範疇として具現するかは規範的構造具現(Canonical Structural Realization, 略称 CSR)で決定される。上記の例であれば、無標の場合、主題は NP、場所は PP で具現する。実際、動詞 *put* の要求する3つの主題役割は(2)のように、動作主を表す語句が主語に、動作主による移動の対象、すなわち主題を表す語句が目的語に、主題が占めることになる場所を表す語句が前置詞句になってそれぞれ項具現する。

(2) Adam put his dictionary on the desk.

(アダムは辞書を机の上に置いた)

Chomsky はこのように主題役割と項具現との関係を表示したが、同時期に様々な研究者が、動詞が要求する意味内容と統語上具現する位置や具現形の間に関係性があるということを示し、次のような仮説も提案されている。

¹ Gruber らの考えではこの移動や位置の概念は具体的な物体の移動や位置にとどまらず、抽象的な意味にも拡大して解釈される。このような空間に占める位置・移動を全ての事象の解釈の中心に考えるアプローチを Levin and Rappaport Hovav では Localist(所在主義)と呼んでいる。Jackendoff(1972, 1976, 1983, 1987)は精力的にこのアプローチから主題関係を探っていたが、Jackendoff(1990)で状態変化と位置変化で異なる意味関数、INCH と GO を用いることで事実上この考えを放棄した。

(3) Universal Alignment Hypothesis (UAH)

There exist principles of UG which predict the initial relation borne by each nominal in a given clause from the meaning of the clause.

(普遍的配列仮説：特定の節中の名詞相当語句に担われる始発関係を節の意味から予測する UG の原則が存在する) (Perlmutter and Postal 1984)

(4) Uniformity of Theta Assignment Hypothesis (UTAH)

Identical thematic relationships between items are represented by identical structural relationships between those items at the level of D-Structure.

(主題役割付与統一性仮説：項目間の同一の主題関係は D 構造段階での当該項目間の同一の構造的関係によって表示される) (Baker 1988)

(3)は Perlmutter らが提唱する関係文法(Relational Grammar)の用語で書かれているが、一般的な用語で言い替えれば「UG のルールが節の意味から各項がどのように具現するかを決定する」ということある。具体的にどのようにとは明示していないが、意味と統語構造に対応関係があることが読み取れる。(4)は(3)よりもさらに強い仮説である。言いかえればどの動詞であっても、項の主題関係が例えば「動作主」であればその項は D 構造上で必ず「動作主」が来るべき位置を占めるということを示唆している。どちらの提案もまだ完全に証明されたわけではないが、経験的にはこれが正しいと思わせる事例が多くみられることも事実である。

しかし、動詞と項の意味関係を表示するという点では主題役割によるアプローチ自体にはいくつか問題点がある。第一に主題役割の定義の難しさがあげられる。主題役割は言い換えれば意味概念的に同じ性質・特性を持つ項の集合であり、その集合を決定するためにはその性質・特性を特定し、定義する必要がある。しかし、これまでのところ適切な定義はできていない。用法や意味の差があるごとに厳密に定義し細分化すれば主題役割の数が増えることだろう。しかしそうすれば逆に理論の一般性は薄れていく。Dowty(1991)はこのような問題を「主題役割の断片化(role fragmentation)」と呼んでいるが、現実には 1970 年代にはこのように主題役割を細分化する傾向がある研究者が多かったのは確かである。例えば Cruse(1973)は「動作主」をさらに volitive, effective, initiative, agentive に細分化している。確かに細分化すればそれだけ異なる現象を説明できるかもしれないが、

現実にはどちらにも当てはまる場合がある。Van Valin and D. Wilkins(1996)の *kill* の例と比べればこれらの細分化がそれほど意味を持たないことがわかるだろう。

- (5) a. Larry killed the deer.
 (ラリーは鹿を殺した・死なせた)
- b. Larry intentionally killed the deer.
 (ラリーは意図的に鹿を殺した)
- c. Larry accidentally killed the deer.
 (ラリーは誤って鹿を死なせた)
- d. The explosion killed the deer.
 (爆発で鹿が死んだ)

(Van Valin and D. Wilkins 1996: p.309)

動詞 *kill* の場合、主語は(5b)のように意図のある実体を取ることも、(5c)のように意図のない実体を取ることも、(5d)のように原因を表す項目を取ることもありえるため、(5a)は複数の解釈が可能になりうるのである。

逆に定義をゆるく設定する場合、今度は様々な事象の際を表すのが困難になる。例えば Gruber(1965)の定義どおりならば「主題」は抽象的な移動や位置も含めて全ての文中にあることになるが、多くの場合、抽象的な移動・位置を表す事象は明確に判断するのが難しい。その結果、他の主題役割を与えられないような項を「主題」と分析するような場合まであった²。

このように主題役割によるアプローチの場合、どのレベルに定義の規模を設定するか (grain-size) が常に問題になる。そもそも項がほぼ無限に近い様々な語を取りうるのに対し、その語の取りうる範囲を有限のキーワードで全てグループ分けしようという試みには不合理さがある。インターネットの検索サイトの例で考えるとわかりやすい。主題役割のアプローチは定義に当てはまる項を選択するという点で、かつての Yahoo! の様にカテゴリごとに登録するタイプのポータルサイトに似ている。カテゴリの定義の境界周辺にある内容を扱うサイトは複数のカテゴリに登録するか新たなカテゴリを作るしかない。ま

² Ritter and Rosen(1986: p.32)はこのように分析しづらい項を全て「主題」としてしまう研究者を揶揄して「主題は福袋(grab-bag)の主題役割になってしまった」とまで言っている。

た、膨大な語彙量を全て網羅するには全ての語彙につき語彙登録する必要が出てくる。これは言語習得上望ましくない。ほぼ無限の可能性を保証するならば、キーワードはグループ分けのためでなく、Google などの検索サイト同様、候補の絞込みのために使われるべきであろう。

Chomsky が提唱する現行のミニマリスト・プログラム(Chomsky 1995)ではそれまでの統率・束縛理論で提案されてきた前提が多く廃棄された。統率・束縛理論を支えているモジュールの一つである θ 理論も X バー理論などとともに廃棄されているが、動詞の要求する意味内容と項との間に基本的に一対一の関係があるという θ 理論の考えは完全に廃棄されたわけではない。ミニマリスト・プログラムの重要な点の一つに、「計算体系によって形成される構造はどれも数え上げ(numeration)N で選択された語彙項目にすでに存在する要素から作られ、計算の途中から新たな項目は追加されない(ibid. p.228)」という包括性条件(Condition of Inclusiveness または Inclusiveness Condition)がある。これに従えば、当然、最初に意図された項と述語の意味対応関係が計算途上で変わるようなことがあってはならないことになる。本論文ではミニマリスト・プログラムの枠組み内で議論を進めるが、語彙選択や項選択の上で動詞の意味が深く関わっているという θ 理論の考え自体は尊重していくことにする。ただし、定義上の問題から主題役割という概念は採用しないことにする。

1.1.2 語彙分解(Jackendoff 1990)

述語の項が持つ意味をグループ分けすることで項と述語の関係を表そうという試みとは逆に、動詞の意味自体をさらに基本的な意味要素に分解する語彙分解(lexical decomposition)と呼ばれる方法がある。この方法論自体は 1960 年代後半に隆盛した生成意味論(Generative Semantics)で盛んに提案されている(Lakoff 1966, McCawley 1968 など)。ただし当時の生成意味論は統語論的要素が強く、D 構造への語彙挿入以前の操作に言及するなど当時の生成文法の一般理論の枠組みからみて問題があり、批判を受けて一時期衰退していたことがあった³。生成意味論者の主張は全ての意味情報が D 構造で表示されるという Katz-Postal 仮説(Katz and Postal 1964)に基づく理論であるのに対し、Jackendoff(1972)は、意味表示が統語構造に依存し、意味理論の規則によって解釈を与えられるという解釈意味論の立場を取っている。意味部門には関数構造(functional structure)、法構造(modal structure)

³ Chomsky(1995)のミニマリスト・プログラムで Larson(1988)の二分岐型構造を採用した VP シェルが提案されてから、VP 内の主要部と語彙分解した基本述語を対応させる試みがいくつか提案されており(Arad 1998, Hale and Kaye 1992 など)、生成文法論者の中でも生成意味論の再評価をする動きがある。

と同一指示表(table of coreference),焦点と前提(focus and presupposition)が含まれており、Jackendoff(1972)の語彙分解はこの関数構造に関わる部分である。その後Jackendoff(1983)では、統語論に依存した解釈のための意味論ではなく、独自のモジュールとしての意味論を模索し、文法制約(Grammatical Constraint)、認知制約(Cognitive Constraint)を追加して、これが現行の語彙意味論・概念意味論の出発点となっている。

Jackendoff(1990)が提示している基本的意味関数－項構造(Basic Function-Argument Structures)は Chomsky(1981)の X-バー理論と同様の仕組みで説明される。

- (6)
- a. [PLACE] → [Place PLACE-FUNCTION ([THING])]
 - b. [PATH] → $\left[\begin{array}{c} \left\{ \begin{array}{c} \text{TO} \\ \text{FROM} \\ \text{TOWARD} \\ \text{AWAY-FROM} \\ \text{VIA} \end{array} \right\} \left(\left[\left\{ \begin{array}{c} \text{THING} \\ \text{PLACE} \end{array} \right\} \right] \right) \\ \text{Path} \end{array} \right]$
 - c. [EVENT] → $\left\{ \begin{array}{c} [\text{Event GO ([THING], [PATH])}] \\ [\text{Event STAY ([THING], [PLACE])}] \end{array} \right\}$
 - d. [STATE] → $\left\{ \begin{array}{c} [\text{State BE ([THING], [PLACE])}] \\ [\text{State ORIENT ([THING], [PATH])}] \\ [\text{State EXT ([THING], [PATH])}] \end{array} \right\}$
 - e. [EVENT] → $\left[\begin{array}{c} \text{CAUSE} \left(\left[\left\{ \begin{array}{c} \text{THING} \\ \text{EVENT} \end{array} \right\} \right] \right), [\text{EVENT}] \\ \text{Event} \end{array} \right]$

(Jackendoff 1990: p.43)

角括弧に囲まれた大文字は意味範疇(Category)を表す。例えば(6a)の左辺は、ある概念構成要素(conceptual constituent)が PLACE という意味範疇に属しているということを意味する。左辺の範疇はさらに右边に表される意味関数(function)と項の組み合わせで表示される。右边で角括弧、丸括弧なしの大文字で表されるものが意味関数、丸括弧内に表されるものが項である。(6a)であれば PLACE-FUNCTION が意味関数、丸括弧内の[THING]が項に当たる。中括弧で表される語群は選択要素であることを意味する。(6b)であれば、範疇[PATH]は意

意味関数 TO/FROM/TOWARD/AWAY FROM/VIA のいずれかと項[THING]もしくは[PLACE]で表されることを意味している。動詞と項の関係で言えば、(6c)(6d)(6e)が重要である。Jackendoff は動詞の表す事象を[EVENT]と[STATE]に分類し、事象を表す意味関数(Event function)として GO、STAY、CAUSE などの[EVENT]の関数や BE、ORIENT、EXT などの[STATE]の関数を設定している。

ここに上がっている関数についてはJackendoff(1983)の段階ですでに提案されていたものであるが、Jackendoff(1990)では様々な事象の説明のために更なる細分化が行われている。例えばJackendoff(1983)では空間移動、位置変化、状態変化、空間的延長を表す意味関数に GOを用いていたが、Jackendoff(1990)ではPathを項として取るGOとPathを項として取らないMOVEに分類している。また、変件事象についてはGOとは別にINCHOATIVEを導入している。また、使役事象についても意味関数CAUSEにCS^u、CS⁺、CS⁻などの下位変種を提案している。その他、概念構造と並行して作用者(Actor)と被作用者(Patient)の関係を表示する行動層 (Action tier) を提案するなど様々な追加提案がなされているが、初期の提案と比べ全体として複雑化していることは否めない。

特筆すべき点に変件事象に INCHOATIVE という別の関数を導入することによって、それまで Gruber(1965)などで提唱されていた移動・位置の概念を抽象的な事象まで拡大してとらえるローカリスト(Localist)の考えが事実上放棄されている点である。意味関数 GO によって表されていた変件事象を別の意味関数に分離したことで、全て移動・位置関係で主題関係を表すことができるというローカリストのアプローチは破綻したといえる。「主題」という概念で事象をとらえ、分類するやり方では全てを説明できないことがわかったのである。主題役割の考え方は基本的にこの「主題」関係に立脚したものであり、ローカリストのアプローチが破綻するのであれば主題役割によるアプローチもまた破綻するのである。

代わって脚光を浴びるのはアスペクト分析からのアプローチやイベント構造分析によるアプローチである。この分析の利点は定義が厳密で *in/for* テストのような比較的結果が明快な方法で分類できることにある。ローカリストによる「主題」分析の場合、特に抽象的な移動・位置では定義の明確さを欠き、それが主題役割分析のあいまいさの原因であった。

語彙分解による語彙概念構造の研究で Jackendoff(1972, 1983, 1990)が提起してきたことは語彙意味論の発展の上で欠かすことができない。また、意味論と統語論との接点としても示唆に富んだものである。しかし、観察された言語事実から分類学的(taxonomical)に意味関数を設定している観があり、また研究が進むにつれ、関数が細分化されるばかりか表

示が煩瑣になってきている。また Jackendoff(1990)の段階では近年になって明らかにされつつあるアスペクト研究の成果は十分に取り入れられているとは思えない。本論文でアスペクト研究の成果に基づき、より簡素な方法論でこの問題に取り組む。

1.1.3 アスペクト研究・事象構造からのアプローチ

Jackendoff の研究は語彙分解の研究に大きな影響を与えたが、方法論として分類学的手法を取ったことにより、問題が出るたびに新たな関数を提案することになり、結果として煩瑣な表示にならざるを得なくなってしまう。特に、Jackendoff の理論では分類の基準は主題の位置・移動という視点で行われている。そのため、アスペクト研究の成果による意味概念の相違を表すためには、主題の位置・移動とは別にさらなる要素を加える必要が出てきた。

1980 年代半ば以降、主流になっているアプローチは述部の示す事象の時間的組立てを項の統語的具現と関連づける手法である。動詞の相的特性が動詞の取りうる構文に關与しているという観察は古くから見られる(Vendler 1967, Dowty 1979)。Vendler によれば動詞句は「活動(activities)」、「達成(accomplishments)」、「到達(achievements)」、「状態(states)」の 4 つの相タイプに分類される。この 4 つの分類のうち、「活動」「達成」「到達」の 3 つと「状態」は何らかの変化を含むかどうかで分類される。変化を含む「活動」「達成」「到達」はさらに時間的終点を含むかどうかで分類される。時間的終点については、古くから「完了(telic)」「不完了(atelic)」と呼ばれてきた分類とほぼ同様に考えてよい。これらは研究者によって「有界(bounded)」「非有界(unbounded)」や、「限定(delimited)」などとも呼ばれているが、語の意味の中に行為の終了点が示されていることを意味する。動詞 *run* や *swim* などはどうなるとその行為が完了するのか明示されていない動詞であり、「活動」に分類される。一方、動詞句 *paint a picture* や *push a cart to the supermarket* などの「達成」や動詞 *die* や *recognize* などの「到達」はどの時点でその事象が完了するかが明確である。「達成」と「到達」の違いは、前者が時間的終点に達するまでに持続時間があるのに対し、後者は時間的終点にそのような持続時間を持たず、瞬間的、もしくはほぼ瞬間的に達することが意味されている。この分類は以下に示した Dowty(1979)のテストによって容易に分類できることから、事象の分類方法として広く用いられてきた。

(7)

基準	状態	活動	達成	到達
1. 非状態テストに合致する	no	yes	yes	?
2. 単純現在時制で 習慣の解釈が取れる	no	yes	yes	yes
3. <i>Φ</i> for an hour / <i>spend an hour Φ</i> ing	OK	OK	bad ⁴	bad
4. <i>Φ</i> in an our / <i>take an hour to Φ</i>	bad	bad	OK	OK
5. <i>Φ</i> for an hour はその 時間中ずっと <i>Φ</i> の意味	yes	yes	no	適用不能
6. <i>x is Φ</i> ing は <i>x has Φ</i> ed の意味を含む	適用不能	yes	no	適用不能
7. 動詞 <i>stop</i> の補部になる	OK	OK	OK	bad
8. 動詞 <i>finish</i> の補部になる	bad	bad	OK	bad
9. <i>almost</i> と共起すると 複数の解釈ができる	no	no	yes	no
10. <i>x Φ</i> -ed in an hour は <i>x was Φ</i> -ing during that hour の意味を含む	適用不能	適用不能	yes	no
11. <i>studiously</i> / <i>attentively</i> / <i>carefully</i> などと共起可	bad	yes	yes	yes

(Dowty 1979: p.60)

Dowty(1979)は上記のテストを元に、「到達」は「状態」と BECOME の組み合わせで、「達成」が「活動」と「到達」の二つの下位事象の組み合わせで定義できることを見出した。このように相的事象を複合的に分析する手法は様々な研究で採用され、Pustejovsky(1991)や Rappaport Hovav and Levin(1998:本章も以降 RH&L と略称する)、影山(1996)らの事象構造でもこの考え方が反映されている。

⁴ 岩本(2008)の指摘通り、この部分は bad に訂正しておく。

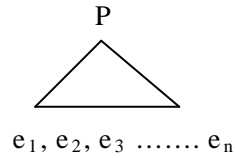
(8) Pustejovsky(1991)

a. 状態



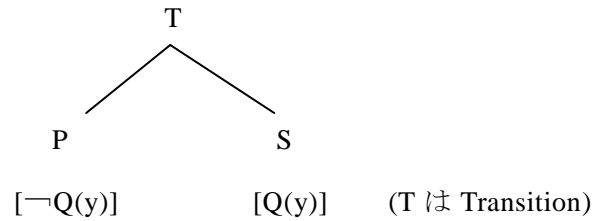
(S は State、e は event を指す)

b. 活動



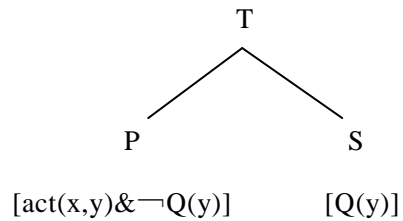
(PはProcessを指す)

c. 到達



(T は Transition)

d. 達成



Pustejovsky の表示では到達と達成がともに活動を表す P と状態を表す S の複合形として表示されている。到達の表示は Q(y)でない状態から Q(y)への推移を意味し、関与する項は y のみだが、達成の表示では Q(y)でない状態の際に x が y に働きかけている(act)ことが示されている。

(9) RH&L(1998)

a. 状態 : [x <STATE>]

b. 活動 : [x ACT<MANNER>]

c. 到達 : [BECOME [x <STATE>]]

d. 達成 : [[x ACT<MANNER>] CAUSE [BECOME [y <STATE>]]]

(または [x CAUSE [BECOME [y <STATE>]]])

RH&L の表示では到達が基本述語 **BECOME** と状態を表す **a.**の語彙概念構造が組み合わされていることが分かる。また、達成の表示では活動の語彙概念構造と到達の語彙概念構造が基本述語 **CAUSE** で結ばれている。

(10) 影山(1996)

- a. 状態 : [y BE AT-z]
- b. 活動 : [x ACT (ON y)]
- c. 到達 : [BECOME [y BE AT-z]
- d. 達成 : [x ACT (ON y)] CONTROL [BECOME [y BE AT-z]

影山の表示も到達が **BECOME** と状態の語彙概念構造の組み合わせで表示されている。また達成は活動の語彙概念構造と到達の語彙概念構造を意味関数の **CONTROL** で結びつけた形で表示されている。

PustejovskyとRH&Lの事象構造ではそのグループ分けの基準にVendlerの4分類が採用され、影山の事象構造ではそれに加えてPerlmutter(1978)などの非能格・非対格分析が加味されている⁵。それぞれ理論の背景になる部分に多少の差異はあるが、相特性から事象のタイプを分類することによって、主題を元にタイプ分類をおこなっていたローカリストの理論よりも汎用性が高く整然とした分析ができるようになったのである。

偶然ではあるが日本語でもこれとは別の議論で同様の分析が成り立っている。日本語で英語進行形に相当する「テイル」形の研究である。金田一(1950)は動詞を「テイル」形と共起できない第一種「状態動詞」、「テイル」形と共起すると動作の進行中を表す第二種「継続動詞」、「テイル」形と共起すると動作・作用の結果の残存を表す第三種「瞬間動詞」、常に「テイル」形で表される第四種動詞の四つに分類している。その後、奥田(1977)が「継続」と対立する相的概念は「瞬間」ではないと主張する。奥田の主張によれば対立軸は「主体動作」と「主体変化」であり内的アスペクトを持つ（すなわち非状態）の動詞は「主体動作」「主体変化」「主体動作・客体変化」に分類されるとしている。この分類は工藤(1995)でも採用されているが、期せずして上記の分類と一致していることが分かる。つまり「主体動作」は「活動」、「主体変化」は「到達」とほぼ同じことを指しており、「主体動作・客

⁵ 影山(1996)の用語では上位事象と下位事象の定義が異なっている。影山の上位事象は達成動詞の中の非能格要素(活動)に当たる部分を上位事象、非対格(到達)に当たる部分を下位事象と呼んでいる。

体変化」は「活動」と「到達」の組み合わせである「達成」とほぼ同じことなのである。これらの事実から相分析からの事象構造分析がローカリスト的分析と比べてより体系的で、より普遍性があることが見て取れる。

しかし、Vendler の分析は定義の点でいくつかの不備を指摘されてきた。*knock*、*kick*、*jump* などのいわゆる Semelfactive 動詞(Engelberg 1999、Smith 1991)はその一例である。これらの動詞は瞬間的に終わる事象でありながら繰り返し用法で用いられることで不完了(atelic)の解釈になる。これらの動詞は行為者を外項にとる項具現の点では「活動」動詞とほぼ同じであるが、「瞬間」で終わる事象という点では「到達」動詞と共通する部分も存在する。

break や *explode* のように自動詞の用法も他動詞の用法も持つ動詞も説明がつきにくい例である。自動詞の用法はどちらも瞬間で発生する事象であるので「到達」と考えられる。ここで Dowty の指摘する「達成」は「活動」と「到達」の複合事象であるという主張に従うと、他動詞では「到達」に至る主語の「活動」が事象に含まれることになり、必然的に「達成」と解釈されることになる。しかしこれらの動詞の他動詞用法はどちらも瞬間で時間的に終点に達する事象を表していて、Vendler のもともとの定義とは矛盾することになる。

動詞の *cool* や *warm* も問題の多い例である。この動詞はどちらも時間的終点を持ちうる。例えばぬるいビールを冷やす場合や、ミルクを温めるなどの場合、飲みごろになった時点で時間的終点となり「達成」もしくは「到達」と分類できる。しかし、冷蔵庫で冷やして保存しておく場合や暖房のように継続的に温める場合はいつまでも継続できるので「活動」とも分類できることになってしまう。

さらに問題なのは動詞だけでこれらのグループ进行分类できないことである。

- (11) a. Amy drew a circle in/*for an hour.
(エイミーは{1 時間で/*1 時間}円を一つ書いた)
- b. Amy drew circles *in/for an hour.
(エイミーは{*1 時間で/1 時間}円を書いた)
- (12) a. Bert pushed the cart *in/for an hour.
(バートは{*1 時間で/1 時間}カートを押した)
- b. Bert pushed the cart to Kansas City in/*for an hour.
(バートは{1 時間で/*1 時間}カートをカンザスシティまで押し届けた)

- (13) a. John wiped the desk *in/for an hour.
(ジョンは{*1 時間で/ 1 時間}その机を拭いた)
- b. John wiped desks *in/for an hour.
(ジョンは{* 1 時間で/ 1 時間}机を拭いた)

動詞 *draw* は(a)が示す通り数量など限定する項がある場合は時間的終点を持つが、(b)の不定形の項の場合はそうではない。動詞 *push* は場所的終点を持たない(a)では時間的終点を持たないが(b)が示す通り場所的終点が表示される場合はそうではない。一方、動詞 *wipe* は項が定形であっても不定形であっても時間的終点を持たない。これらの事実から述部だけで相的な関係を表すことはできないことが明らかとなった。

1.1.4 測定と相構造 (Tenny 1994)

Tenny(1994)はこの問題を解決するのに「測定」という概念を導入した。Tenny は事象が時間的終点を持つ(「限定(delimit)」と呼ぶ)には項の特性が関与していると考え、「測定」できる項がある場合に「限定」がありうると提案している。「限定」という言葉は「完了(telic)」と置き換えて考えてよい。つまり、「測定」できる場合、in/for テストで in 句と共起できることになる。

「測定」について Tenny は「事象の時間的終点を指す際に、項によってになわれる役割」を指すとしている(Tenny 1994: p.11)。そして「測定」の例として主題増減動詞(incremental theme verb)、状態変化動詞(change-of-state verb)、経路目的語動詞(path-object verb)を挙げ、それらの直接内項が事象を「測定」するとしている。定義が多少抽象的なので、「測定」を表す *measure*(目盛)の語義を生かして補足説明すると、事象の開始時から終了時までにかかる変化を目盛にして項に担わせることができるかどうか「測定」であると考えるとよい。以下それぞれについて図示してみることにする。

(14) 主題増減動詞

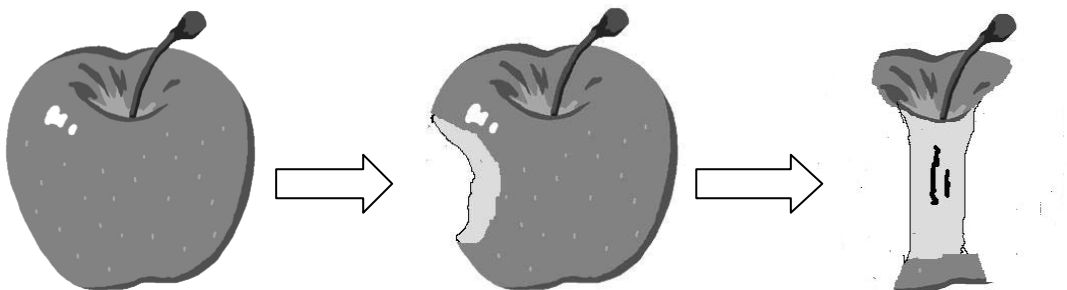
Chuck ate an apple.

(*ibid.* p.24)

事象開始

事象途中

終了



Chuck ate an apple in a minute.

(チャックは1分でリンゴを一つ食べた)

(15) 状態変化動詞

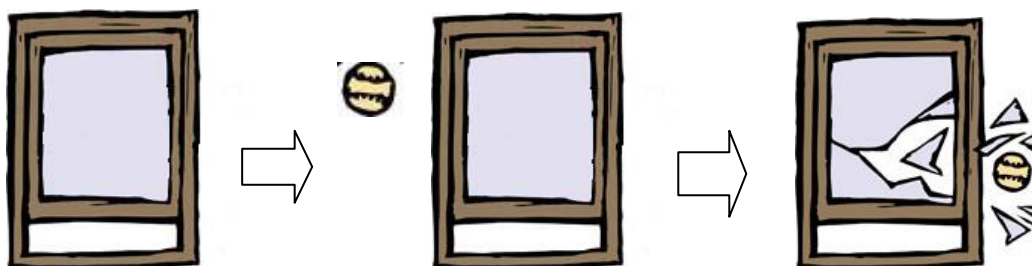
The baseball cracked the glass.

(*ibid.* p.16)

事象開始

(事象途中)

終了



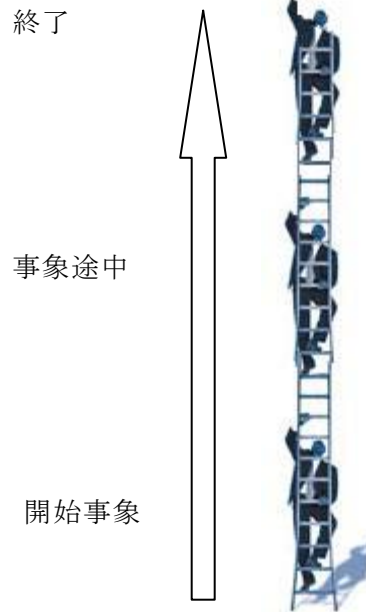
The base ball cracked the glass in an instant.

(野球ボールが一瞬でガラスを割った)

(16) 経路目的語動詞

Bill climbed the ladder.

(*ibid.* p.17)



Bill climbed the ladder in ten seconds.

(ビルは十秒でハシゴを上った)

目盛の幅という点については、典型的な主題増減動詞や経路目的語動詞は目盛が連続的多段階で、典型的な状態変化動詞は開始時と終了時の2段階しかないが、以下に示すように状況によってはそうでないこともある。

(17) a. John quickly swallowed the pill.

(ジョンは素早く錠剤を飲み込んだ)

b. John sent an e-mail to Mary.

(ジョンはメアリーにeメールを送った)

(18) The supernova is exploding.

(超新星が爆発している)

このことからわかるように「測定」の概念の中心は目盛の段階の有無や持続時間ではなく完了する時点のある変化そのものである。状況に応じて瞬間的な場合も段階的な場合も存在する。その点から、Vendlerや金田一のように「瞬間」の有無で動詞を分類する方法には

あまり妥当性はないといえる。

それでは項のタイプから「測定」を見てみよう。主題増減動詞と状態変化動詞は対象となる項そのものの変化が測定の対象になっている。一方、経路目的語動詞については対象そのものには変化はない。(16)の例を取れば、*the ladder* 自体は出現したり消滅したりするわけではないし、形が変わるわけでもない。変化しているのは *the ladder* 上で移動する *Bill* の位置である。加えてこの *Bill* も存在している位置は変わるが、*Bill* 本人に変化があるわけではない。経路目的語動詞については目盛がつけられるものはその経路であり、動詞の対象はその経路を目盛に沿って位置変化をしていることになる。

Tenny はこれらの測定にかかわる項に 3 つの相役割 (aspectual roles) を設定している。その相役割とは MEASURE、PATH、TERMINUS の 3 つで、MEASURE は主題増減動詞、状態変化動詞の変化する主体を、PATH は経路目的語動詞の主体が通る経路を示す項を、TERMINUS は経路目的語動詞の主体が到達する終点を示す項を指す。このうち PATH と TERMINUS は顕在的に具現する場合と非顕在的な場合とがある。

(19) Susan walked to Canada in sixty days.

(スーザンは 60 日でカナダまで歩いた)

(20) Susan walked the Appalachian Trail in sixty days.

(スーザンは 60 日でアパラチア山径を歩いた)

(21) Susan walked the Appalachian Trail to Canada in sixty days.

(スーザンは 60 日でアパラチア山径をカナダまで歩いた) (Tenny 1994: p.108)

動詞 walk は PATH 項や TERMINUS 項を取らない場合、*Susan walked for/*in sixty days.* のように *in* 句と共起できない。しかし(19)のように終点を表す TERMINUS 項を持ち、経路を表す PATH 項が非顕在の場合でも、逆に(20)のように PATH を持ち TERMINUS が非顕在の場合でも、(21)のように両方顕在の場合でも測定が可能である。

Tenny の提案は述部がこれらの相役割を持つときのみ、限定(delimit)がありうるというものである。前節で相的アプローチでは説明に窮するとした例で確認してみよう。

(25) Measuring-Out Constraint on Direct Internal Arguments:

(直接内項に関する測定制約 : MOC)

- i) The direct internal argument of a simple verb is constrained so that it undergoes no necessary internal motion or change, unless it is motion or change which “measures out the event” over time (where “measuring out” entails that the direct arguments play a particular role in delimiting the event.)

(ある単純動詞の直接内項は時間的に事象を「測定」する移動・変化でない限り、内的な移動・変化を受けないように制限される。その際、「測定」は直接内項が事象を限定(delimit)する上で特別な役割を演じることを含意する)

- ii) Direct internal arguments are the only overt arguments which can “measure out” the event.

(直接内項は事象を「測定」できうる唯一の顕在的項である)

- iii) There can be no more than one measuring-out for any event described.

(表されるいかなる事象も測定できるのは1つまでである)

(26) The Terminus Constraint on Indirect Internal Arguments

(間接内項に関する終点(Terminus)制約 : TS)

- i) An indirect internal argument can only participate in aspectual structure by providing a terminus for the event described by the verb. The terminus causes the event to be delimited.

(間接内項は動詞によって表される事象に終点を供することによってのみ相的構造に参加できる。終点があることで事象は限定されうる)

- ii) If the event has a terminus, it also has a path, either implicit or overt.

(事象が終点を持つならば、その事象は顕在的もしくは非顕在的に経路を持つ)

- iii) An event as described by a verb can have only one terminus.

(ある動詞に表される事象は終点を一つまでしか取ることはできない)

(27) Aspectual Interface Hypothesis(相インターフェース仮説：AIH)

The universal principles of mapping between thematic structure and syntactic argument structure are governed by aspectual properties. Constraints on the aspectual properties associated with direct internal arguments, indirect internal arguments, and external arguments in syntactic structure constrain the kinds of event participants that can occupy these positions. Only the aspectual part of thematic structure is visible to the universal linking principles.

(主題構造と統語的項構造の間の普遍的写像原理は相的素性によって支配される。統語構造における直接内項、間接内項、および外項と関連する制約はこれらの位置を占める事象参加者の種類を制限する。主題構造の相的部分のみが普遍的連結原理にとって可視である)

MOCのi)が主張することはすなわち、「測定」されない直接内項は内的移動もしくは変化しないし、限定もされないことを意味する。前述の例では*wipe*の直接内項がそれに当たる。MOCのii)は言い換えれば顕在的な「測定項(MEASURE)」は必ず直接内項として具現するということである。TCのi)、ii)は経路項(PATH)と終点項(TERMINUS)は二つセットで間接内項としてあらわされることで「測定」に関与するという意味である (Tennyは付加詞(adjunct)と項になるPPの区別をしていない⁶)。MOCならびにTCのiii)はまとめると1事象中には一つの測定しか許されないことを意味する。

AIHに仮定されていることはそれまで提案されてきた普遍的配列仮説(UAH)や主題役割付与統一性仮説(UTAH)と比較してさらに強力である。UAHでは「各項の主題関係を予測するUGの原理がある」と言及しているだけでその原理については触れていない。AIHに仮定されていることはまさにその原理である。UTAHはある「主題関係にある項はD構造内で同一の位置関係にある」と言及している。AIHは主題関係のアプローチをとっていないが、「普遍的連結規則にとって可視」つまりあらゆる言語において連結規則的に確実に統語的位置が保障されているのは特定の相的要素を持つものだけであるという提案であり、一般的に主題関係と統語的位置との関係に相関関係があると考えているUTAHよりも対象が絞られた提案であるといえる。さらに多言語的にこの提案を検討してみると興味深い事

⁶ 動詞 *reach* の場合、直接目的語に相当する部分が TERMINUS と分析されることになる。この事実を考えると、必ずしも英語では間接内項=PP であるとは言い切れないかもしれない。私の分析では *reach* の場合、主語が直接内項、直接目的語が間接内項である。

実がある。MOC を読みかえれば、「MEASURE 項は必ず直接内項」という命題は真だが「直接内項は必ず MEASURE 項」という命題は偽である。英語では直接内項は典型的には対格で具現する。しかし英語では対格で表されている項が他の言語では斜格で示される例を検証してみると、それらの項が MEASURE 項になっていないことが分かる。

- (28) a. He helps me.
NOM ACC
(彼は私を助けてくれる)
- b. Er hilft mir.
He-NOM help-3p-sg-Pres me-DAT
- (29) a. I like Latin music.
NOM ACC
(私はラテン音楽が好きだ)
- b. Me gusta la música latina.
Me-DAT like-3p-sg-Pres Latin music-NOM
- (30) a. I play tennis.
NOM ACC
(私はテニスをする)
- b. Je joue au tennis.
I-NOM to-the tennis

(28)のドイツ語の例では *help* に相当する動詞 *helfen* は与格を要求するが、動詞 *help* もしくは *helfen* が取る項は明確な時間的終点を持っていないので MEASURE 項ではない。(29)のスペイン語の例では、「好む」の意味を表す動詞 *gustar* が使われている。この動詞は英語の *like* とは違い、経験主に当たる項が与格として具現し、その対象は主格の形で動詞の後ろに置かれる。経験主が与格になるという点では *like* というよりむしろ英語の *please* に近い。英語スペイン語どちらもこの事象は状態を表しており、やはり MEASURE 項は存在しない。(30)のフランス語の例では *play* に相当する *jouer* は自動詞であり、*to* に相当する前置詞 *à* と男性名詞につく定冠詞 *le* の縮合形 *au* が用いられている。テニスをする行為はいつまでも続けられる活動であり、やはりここにも MEASURE 項は存在しないのである。英

語で MEASURE 項以外が対格を取る規則については本論文では言及しないことにするが、AIH がヒトの言語の共通的特徴であるとすれば、少なくとも MEASURE 項については必ず直接内項として統語部門に送られることになる。あえて言えば、相的な構造は現在のところほぼ間違いないと考えられるただ一つの普遍的意味構造である。次節ではこの主張をさらに進め、独自の語彙概念構造を提案する。

1.2 相インターフェース仮説に基づいた語彙概念構造

前節では項と述語間の関係を表示する試みについてこれまでの研究を概観した。ここで本論が取る立場をまとめてみる。

- ① Chomsky(1995)のミニマリスト・プログラムの枠組み内で説明する
- ② 主題役割による θ 付与は採用しない。
- ③ 語彙分解による語彙概念構造表示を採用し、語彙概念構造の選択制限により、 θ 役割に相当する機能を説明する。
- ④ 語彙分解の方針はイベント構造分析／相分析に従う。
- ⑤ 相インターフェース仮説と非分岐型使役連鎖からヒトが自然言語で取りうる事象構造類型を演繹的に決定する。
- ⑥ 統語に関与する構造的要素と認知に関与する特異的要素の役割分担を明確にする。

以上のことを踏まえ、この節では本論文で用いる語彙概念構造を設定していく。

1.2.1 相構造と事象構造の類似性

1.1.3 で見てきたアプローチをまとめてみると、定義の違いや用語の違いはあれ、どの事象構造もほぼ同じように事象を分類することに気づく。Pustejovsky(1991)も RH&L(1998)も影山(1996)も工藤(1995)も、「状態」とそれ以外を区別している。工藤以外は「到達」が結果を表す「状態」を内包する形で記述している。そして工藤も含め「達成」は「活動」に相当するものと「到達」に相当するものの組み合わせで表示されているのである。

Tenny(1994)は自らが提案する AIH に合致した相構造を提案している。この相構造は語彙概念構造に代わるものではなく、意味論と統語論のインターフェースの役割を果たすものであるとしているが、その構造は上述の語彙概念構造と合致する部分が見受けられる。

- (31) a. ____ []
 b. [MEASURE]
 [(PATH), (TERMINUS)]
 c. ____ [MEASURE]
 ____ [(PATH), (TERMINUS)]

Tenny の相構造は非状態動詞のみに提案されているので「状態」を表す構造はない。(31a)は「測定項(MEASURE)」も「経路項(PATH)」「終点項(TERMINUS)」も持たない非状態動詞であり、最初の下線部は外項を一つ取る動詞であることを意味する。下線部の後の角括弧は内項を指すが、内項には相関係を表す項が入らないことを指している。相役割を持たないため、この構造が表す事象は Vendler の「活動」に相当する。(31b)の二つの構造はそれぞれ、外項を持たず、内項として MEASURE 項、ないしは顕在的・非顕在的な PATH 項、TERMINUS 項を取ることを意味する。外項が無いことから、Vendler(1967)や Dowty(1979)の「到達」に相当する。(31c)は Pustejovsky をはじめとした表示同様、(a)の構造と(b)の構造の複合体になっている。

これらの分類方法は類似点こそ多いが、グループ分けの基準となる定義は異なっている。Pustejovsky と RH&L は上述の Vendler や Dowty の分析に則った分析を行っている。影山は Vendler の分析に従いながらも、非能格・非対格分析の成果を導入した分析を行い、工藤は「主体」・「客体」の観点と「動作」・「変化」の観点を組み合わせることで分析を行っている。Vendler や Dowty の分類では定義に不確かな部分がある。その点、Tenny の主張は普遍的な連結規則と考えられる最も強い仮説であり、かつ定義が明確である。本論文では動詞のグループ分けにはこの方式を採用することにする。すなわち、Vendler の本来の定義にある瞬間の概念は構造的意味表示としては考慮せず、時間的終点の有無のみをグループ分けの基本とすることとする。

Tenny の相構造はあくまで構造的な表示であり、これだけでは本論文のもう一つの提案である、非構造的で認知的な特異要素の表示は不可能である。そこで、すでに構造的表示と特異要素表示を区別した併記を試みている RH&L(1998)の表示を振り返ってみよう。

1.2.2 構造的要素と特異的要素を区別した語彙概念構造(RH&L 1998)

RH&L の語彙概念構造で特徴的なのは、統語に関連性の深い意味要素と、統語によって

分類される同一の特徴を持つ動詞群の中で意味的差異を生じさせる各動詞固有の特異要素を分けて表示していることである。Jackendoff(1983, 1990)をはじめとして、それまでの語彙概念構造では事細かに意味関数を設定し、全てを関数表示しようと試みていた。確かに前置詞や副詞などの持つ意味を表示する上で、例えば LOCATION や PATH を表す意味関数を設定することが無駄であるとは思わない。しかし、序章で述べたように語彙の認知的側面を考えると、必要以上に関数化することは好ましいことではない。特に意味拡張や意味選択に関わるファジーな認知的要素の部分は関数化することが困難であり、無理に関数化すれば百出する例外を全て記述しなければならないであろう。

では(9)で示した RH&L の語彙概念構造を見ながら、その仕組みを確認してみることにする。

(32)=(9)

- a. 状態： [x <STATE>]
- b. 活動： [x ACT<MANNER>]
- c. 到達： [BECOME [x <STATE>]]
- d. 達成： [[x ACT<MANNER>] CAUSE [BECOME [y <STATE>]]]
(または [x CAUSE [BECOME [y <STATE>]]])

RH&H の定義では大文字で書かれた ACT / CAUSE / BECOME の3つの基本述語(primitive predicate)が構造的要素である。(32a)-(32d)の全てにある、角括弧で括られた斜字体大文字<STATE>や<MANNER>の部分はそれぞれの述部に固有の「定項(constant)」と呼ばれる特異的要素である。それぞれの述部の定項はその述部の音声列と同じ名辞が当てられる。一例として *cool* を挙げてみる。*cool* は状態を表す形容詞でもあり、変化を表す自動詞、語彙的使役意味をあらわす他動詞の用法もある。

- (33) a. The soup was cool.
(そのスープは冷たかった)
- b. The soup cooled.
(そのスープは冷めた)

c. Alex cooled the soup.

(アレックスはスープを冷やした)

(Lakoff 1970)

これらの3用法についてすべて *cool* という名辞が共有されている。よって RH&L の方法で語彙概念構造を表示すれば以下のようなになる。

- (34) a. [x <COOL>]
b. [BECOME [x <COOL>]]
c. [[x ACT] CAUSE [BECOME [y <COOL>]]]

語彙概念構造の表示を一般化する際、RH&L では定項を有限の存在論的範疇(ontological categories)に分類して斜字体大文字表記している。上記の例では *COOL* は *STATE* に分類されるので一般的語彙概念構造表示(事象構造鋳型: event structure template と呼ばれる)は以下のように記される。

- (35) a. [x <STATE>]
b. [BECOME [x <STATE>]]
c. [[x ACT] CAUSE [BECOME [y <STATE>]]]

存在論的範疇の種類については RH&L ではすべてを上げていないが、例としては以下のような表示がある。

- (36) a. [x ACT<MANNER>]
b. [x ACT<INSTRUMENT>]
c. [x CAUSE [BECOME [y <PLACE>]]]
d. [x CAUSE [BECOME [y WITH <THING>]]]

これが RH&L の提案している語彙概念構造の表示であるが、この表示方法で問題なのは次の2点である。第一点は前述の通り、この分類が Vendler/Dowty の相分析に基づいていることである。第二点目は定項の表示である。(34)のように複数の事象構造鋳型で用いら

れる同一の名辞は数多くある。cool の場合は全て<STATE>で表示して問題はなかったが、次の場合はどうだろうか。」

- (37) a. Martha ran to the store.
(マーサは店まで走った)
- b. Tears ran down the child's face.
(涙が子供の顔に流れ落ちた)
- c. Martha ran Fred to the station.
(マーサはフレッドに駅まで走らせた)
- d. Martha ran a successful campaign.
(マーサはうまくキャンペーンを仕切った)
- e. Fred knows how to run the fax machine.
(フレッドはファックスの動かし方を知っている)

(Ritter and Rosen 1996:(14))

- f. The Shinano runs through Niigata City.
(信濃川は新潟市を流れている)

(37a)では動詞 *run* は移動する様態を表しているので<MANNER>に相当する。(37b)は涙が流れ落ちる場所が示されるので、<PLACE>と見ることもできる。(37c)は使役であり実際に *run* という<MANNER>で活動しているのは ACT の項に当たる *Martha* ではなく、BECOME の項に当たる *Fred* になる。(37d)の場合、使役であり、キャンペーンがうまく流れている状態を表すので(35c)と同じ事象構造鋳型で<STATE>にあたる。(37e)は分類に窮するが、動いている状態に一瞬で変えるという意味では<STATE>であろう(このような場合、Vendler の達成動詞の定義では説明できないことになる)。(37f)は状態であるので(35a)の事象構造鋳型が適用されることになる。Ritter and Rosen(1996)の意味選択制限の考えを元にとすると、*run* は「支障なくうまく進む」様子を表している意味選択制限の緩い動詞である。そこで統語的にも取れる構造が多くあることになる。しかし、RH&L では定項の表示が複数あり、その都度この場合は *MANNER* この場合は *STATE* と逐一検証する必要がでてくる。1.1.1 で言及した主題役割の問題点は適切なサイズの定義ができないということだったが、ここでも同様の問題が発生する可能性があるのである。それならばむしろカテゴリ

一分類を廃止して、Ritter らの考えに従い語彙ごとの意味選択制限に委ねてしまう方がシステムの優れていると思われる。

次にこれらの問題点を解決するためにいくつかの提案を加えて本論文で用いる語彙概念構造を提案する。

1.2.3 相構造と<ROOT>表示を用いた語彙概念構造

RH&L の語彙概念構造は構造的要素と特異要素を分けて記述している点で優れており、本論文でも大筋同様の形式を用いることにする。ただし、問題点については修正せざるを得ない。

まず、分類に用いている Vendler の相分類は「瞬間」などの主観的要素を含み厳密さを欠くため採用せず、代わって Tenny の測定に基づく相構造を適用することにする。また、統語との関連性を強調する意味で、構造的要素は項具現との関係だけを扱うものとして厳密に扱う。

まず、Tenny の相構造において測定を含む構造を BECOME と定義することにする。また BECOME のとる項は直接内項に限定する。比較できるように Tenny の相構造と本論文の法事を並べてみてみよう。(38)は Tenny の相構造であり、(39)は本論文で採用する BECOME を含む事象構造鋳型である。

- (38) [MEASURE]
 [(PATH), (TERMINUS)]
- (39) [BECOME [x <ROOT>]]

Tenny の主張では事象中に MEASURE 項があるか、PATH 項と TERMINUS 項がある場合測定があることになる。項との連結の点から見ると、MEASURE 項はそれ自体が直接内項になり、PATH、TERMINUS 項は間接内項である。PATH、TERMINUS タイプの測定ではその PATH を通過する主体が直接内項となる。つまり測定できる事象には2つのタイプが存在することになる。一つは MEASURE 項を持つ直接内項そのものが測定の対象になるタイプであり、もう一つは PATH、TERMINUS 項を伴い直接内項が PATH を通過して TERMINUS にいたるまでの運動が測定の対象になるタイプである。簡単に言い換えれば前者は直接内項にあたる事物そのものの変化が測定されるタイプであり、後者は直接内項にあたる事物

の移動が測定されるタイプである。

しかし動詞の中には同じような内容を表しながらも、MEASURE 型の測定しか認めないタイプと PATH、TERMINUS 型しか認めないタイプ、さらには両方認めるタイプなど取りうる構文に差がある場合がある (1.2.5 参照)。(39)で上げた本論文の事象構造では、どのタイプを取りうるのかという選択制限は<ROOT>内の情報として分離し、純粹に測定があることだけを示している。もし<ROOT>内に MEASURE 項のみを取るという選択制限があれば、直接内項を表す x は MEASURE 項である。PATH、TERMINUS 項を取る測定のみとるという選択制限があれば、直接内項を表す x は移動する主体を表すことになる。ここで提示した<ROOT>の詳細については 1.2.5 以降で詳細に説明することにする。

次に外項を取る構造的要素を ACT とする。これまでの語彙概念構造では「活動」を表す意味関数もしくは基本述語として使われてきた名称ではあるが、本論文では「活動」には限定しない。Tenny の相構造と対比して記述してみると次のようになる。

(40) — []

(41) [x ACT<ROOT>]

(40)では下線部が外項を、角括弧は相役割をもつ項がないことを意味している。英語では(英語以外の言語もそうであるが)相役割がない項が対格の形で具現することもあるので、必ずしも自動詞だけがこの相構造をとるわけではない。(41)は外項を取る ACT の前にある変項 x が外項を表している。<ROOT>の詳細についてはあとに譲るが、BECOME のときの<ROOT>同様、項の選択制限などにかかわる部分と考えてよい。

これまで提案されてきた語彙概念構造では ACT と Vendler の分類の「活動」を結びつけることが多かったが、本論文では Vendler の分類を基準に採用しないので例えば *It rains.*(雨が降る)のような準項(Quasi-argument: Chomsky 1981)を取る構文であってもこの事象構造鑄型であらわすことになる。

また、外項と内項を両方取るものについては従来通り CAUSE を用いて接続する。(42)が Tenny の相構造であり(43)が本論文の語彙概念構造だが、(43)でわかるように(39)と(41)が CAUSE で結ばれている構造になっている。

- (42) ____ [MEASURE]
 ____ [(PATH), (TERMINUS)]
- (43) [[x ACT<ROOT>] CAUSE [BECOME [x<ROOT>]]]

この場合も ACT は活動に限定していないので外項に動作主が来ない *frighten* 型の心理動詞についてもこの事象構造鋳型で表すことになる。

このほか状態を表す語彙概念構造は RH&L 同様 [x <ROOT>] で表すことにする。

本論文の事象構造では以上の BECOME/ACT/CAUSE の 3 つを構造的要素とする。構造的要素であるので、意味の違いを表す部分は全て特異的要素の部分で表すことにし、構造的要素の意味的バリエーションを設けることはしない。

次に RH&L の事象構造の問題となっていた定項の記述方法について修正してみることにする。RH&L の事象構造鋳型では定項を存在論的範疇で表している。そして実際に各動詞の語彙概念構造を記述するときは、この部分にその動詞の音声列が入るのが通例である。例えば(44)の事象構造鋳型では<STATE>の存在論的範疇を定項としてとり、その事象構造鋳型に適合する動詞 *dry* の語彙概念構造では動詞と同じ音声列 *DRY* が用いられている。また(46)の事象構造鋳型では<MANNER>の存在論的範疇を定項として取り、その事象構造鋳型に適合する動詞 *sweep* の語彙概念構造では動詞と同じ音声列 *SWEEP* が用いられている。

- (44) [[x ACT] CAUSE [BECOME [y <STATE>]]]
- (45) [[x ACT] CAUSE [BECOME [y <DRY>]]] (RH&L 1998: p.107)
- (46) [x ACT<MANNER>]
- (47) [x ACT<SWEEP> y] (*ibid.* : p.114)

前節で述べたように、特異的要素の部分に存在論的範疇のようなカテゴリーを設けることは豊富な意味拡張を保証する上では得策ではない。そこで本論文ではそれらの存在論的範疇を設定せず、一律<ROOT>で表示することにする。また、各動詞の語彙概念構造を表示するときに<ROOT>の位置にその動詞の音声列を挿入するのは RH&L の方式をそのまま踏襲する。

ROOT については本来 Pesetsky(1995)が心理動詞の主題関係を表すためにゼロ接辞を用いて説明した際に提案された概念である。Levin and Rappaport Hovav(2005:以後 L&RH)でも

定項の呼称に代えて用いられている。

Pesetsky は目的語の位置に経験主(experience)をとる *annoy* のようないわゆる EO (Experiencer Object)心理動詞が二形態素による合成語であると主張している。つまり *annoy* は経験主が主語の $\sqrt{\text{annoy}}$ という形態素と起動主(causer)を付加するゼロ接辞 *CAUS* という形態素の合成である。日本語の「悩む」は経験主主語動詞であり、*annoy* と同じ意味の「悩ませる」は使役を表す形態素「させる」を加えた二形態素による合成語である。これと同様のことが *annoy* でも生じているというのである。ただし、(48)で示すように英語では *CAUS* を合成しない「経験主主語述部」が現れることはない。

- (48) a. *John $\sqrt{\text{annoy}}$ with Mary.
(ジョンはメアリーに悩んだ)
- b. The book [$\sqrt{\text{annoy}}$ ϕ_{CAUS}]-ed John (*with Mary).
(この本はジョンを悩ませた)

この分析の証拠としてあげられているのは名詞化である。名詞化の際には(49b)のようなゼロ接辞を挟んだ名詞化接辞はできない。

- (49) a. [$\sqrt{\text{SubjExp-predicate v}}$] nominalizer]
b. *[[$\sqrt{\text{SubjExp-predicate v}}$] ϕ_{CAUS}] nominalizer]

よって *annoyance* の意味は「悩むこと・悩まされること」であっても「悩ますこと」にはならないのである。この考えを応用すれば、*annoy* の語彙概念構造は次のように表示できる。

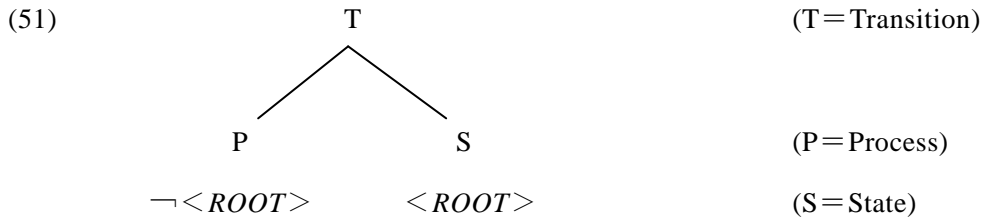
- (50) [[x ACT] CAUSE [BECOME [y <ANNOY>]]]

従来<ANNOY>の部分には結果状態として *ANNOYED* を用いる語彙概念構造表示が多かったが、Pesetsky の考え方を借りれば動詞と同じ音声列で記載できるのである。

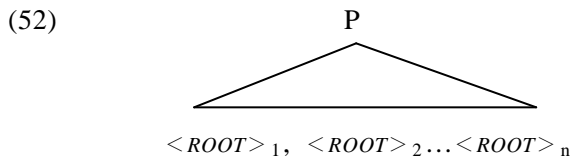
ここまで本論文で用いる語彙概念構造表示について概略した。次節以降は実例を見ながらこの語彙概念構造の詳細について見てみることにする。

1.2.4 二つのタイプの BECOME

(38)(39)であげたように、BECOME で表される事象には MEASURE 項を含むタイプと PATH 項 TERMINUS 項を含むタイプの 2 タイプが存在する。そしてそのどちらも共通しているのは測定を含む事象であるということである。Pustejovsky(1991)的な記述をすれば BECOME は次のように記すことができるだろう。



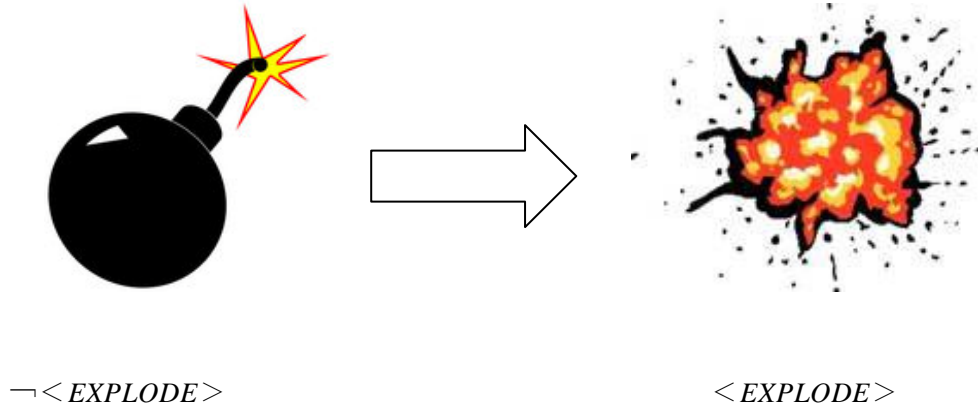
つまり MEASURE 型の BECOME は<ROOT>の表す事象が完了していない状態（論理記号を用いて¬<ROOT>で表されている）からある過程(process)を経て<ROOT>が表す状態(state)へ推移(transition)しているのである。言い換えれば MEASURE 項を取るタイプは直接内項 x が<ROOT>で表されることを満たしていない状態から<ROOT>で表されることを完全に満たした状態になることを意味する。比較のために ACT の場合をあげればこうなる。

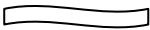


(52)が表すことは<ROOT>で表された事象が変化することなく続く過程である。時間の経過とともに<ROOT>₁、<ROOT>₂と進んでいくが、別の状態になるわけではない。

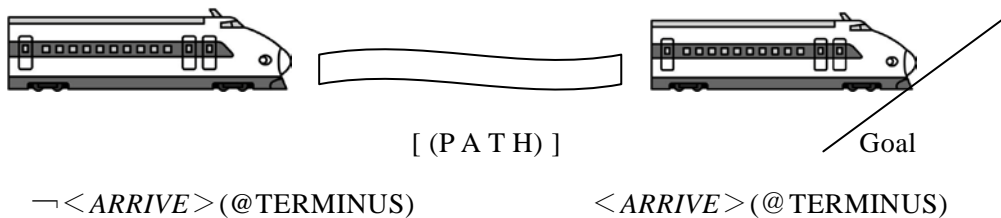
それではここで MEASURE 型の BECOME の具体例を見てみよう。(53)に上げた自動詞の *explode* は典型的な MEASURE 型の BECOME を取る動詞である。爆発する前の状態と爆発した後の状態では直接内項にあたる *The bomb* が別の状態になっていることがわかる。

- (53) The bomb exploded. [BECOME [x <EXPLODE>]]



一方、PATH 項 TERMINUS 項のあるタイプは、直接内項 x 自体は変化しない。<ROOT> に指定される PATH を通って TERMINUS の位置に到達していない状態から<ROOT>に指定される PATH を通って TERMINUS の位置に達することを意味する。<ROOT>に示される内容は x の状態ではなく、TERMINUS に着くまでの様態や手段を表すだけである。PATH と TERMINUS は非顕在の場合がある。(54)の場合は非顕在である。ここでは便宜的に TERMINUS を@~の形で、PATH を波状の  の形で表示してみる(@TERMINUS のカッコは非顕在であることを表す)。本章ではしばらくこのように PATH、TERMINUS 型には@TERMINUS をつけるが、次章以降では特に必要のない場合省略する。(54)では直接内項の The train はそれ自体に(53)に見られるような変化はない。単に位置的な変化を生じているだけである。

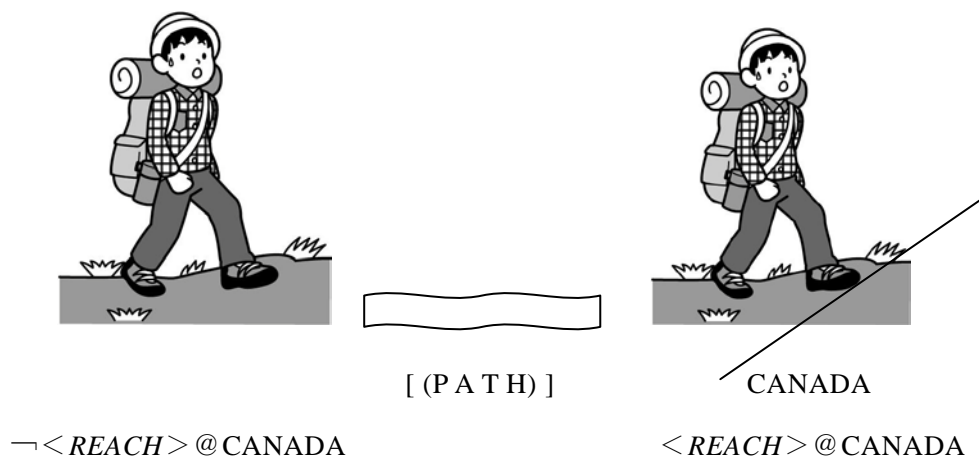
- (54) The train arrived. [BECOME [x <ARRIVE>]]



ここで注意してほしいのは PATH や TERMINUS が顕在の場合である。英語の場合、顕在の PATH や TERMINUS が対格となって具現することがある。だが、AIH に従えば PATH や TERMINUS は直接内項ではないので、本論文の語彙概念構造ではそれらを指す項が

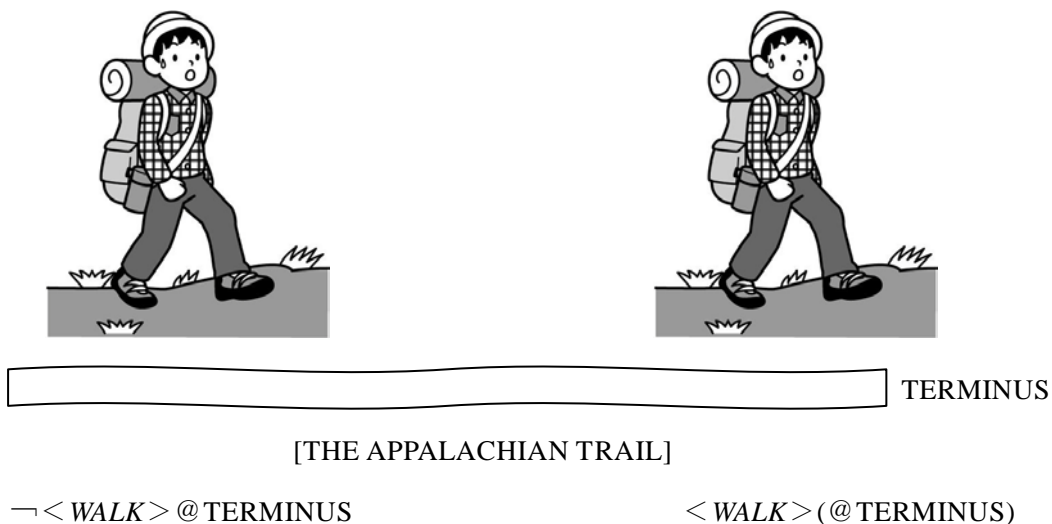
BECOME の変項の位置を取らないのである。よって、(55)の場合、x は *Canada* ではなく *The explorer* である。同様に(56)(57)も x は *Susan* である。

(55) The explorer reached Canada. [BECOME [x <REACH> @CANADA]]



ここでは PATH は明示されていないが、TERMINUS である *Canada* が明示されている。この *Canada* は TERMINUS であり、間接内項となる。

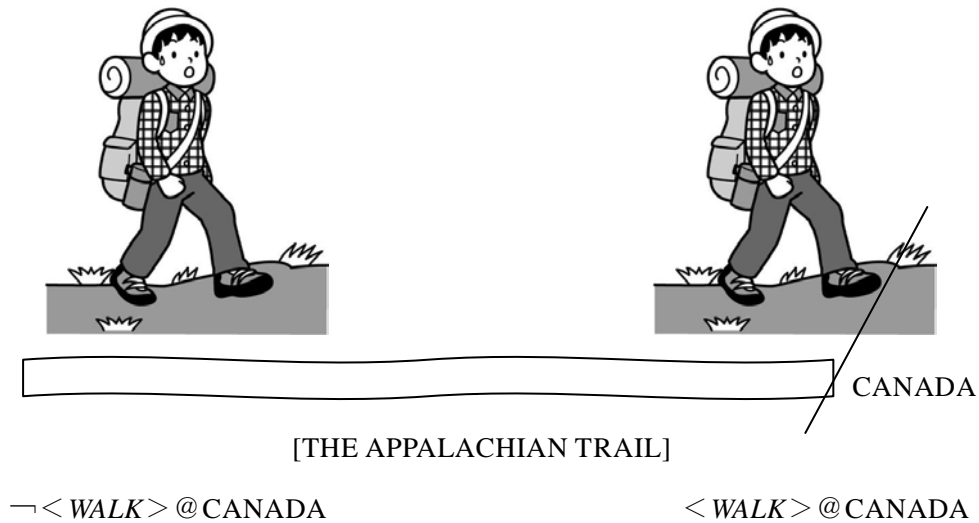
(56) Susan walked the Appalachian Trail. [BECOME [x <WALK> (@TERMINUS)]]



ここでは the Appalachian trail という PATH が明示されており、TERMINUS は非明示である。この *the Appalachian trail* は PATH なのでやはり間接内項となる。

(57) Susan walked the Appalachian Trail to Canada.

[BECOME [x < WALK > @ CANADA]



この場合は PATH も TERMINUS も明示されている。そして PATH も TERMINUS も間接内項である。

RH&Lの表示方法ではWALKは移動の様態を表すので存在論的範疇の<MANNER>を含む事象構造鋳型の[x ACT<MANNER>]に当てはめることになるが、本論文の場合、終点を含むWALKは厳密に相的に判断してBECOMEと設定していることが大きな違いである。この分析の妥当性はロシア語の移動を表す動詞によって説明できる。ロシア語では移動を表す動詞の多くが測定できる事象を表す形態と測定できない事象を表す形態の異なる2形態を持つ。

- (58) a. Девушка бежит в парк.
 girl-NOM run₁-3per-sg-pres to park
 (娘は公園へ走っていく)
- b. Девушка всегда бегаёт.
 girl-NOM always run₂-3per-sg-pres
 (娘はいつも走っている)

(58a)に使われる動詞бежатьは「走ってある目的地へ行く」ことを意味するが(58b)のбегатьは「反復して、または不規則に走る」ことを意味している。つまりロシア語では「走る」

という行為を目的地へ到達すれば完了する測定事象と、繰り返し行える測定できない事象の二つに分けて捉えているのである。ロシア語ではこの二つの事象に対しそれぞれの形態素が与えられているのに対し、英語は一つの形態しか存在しない。よってWALKという音声列はこの二つの事象構造類型双方で用いられることができると結論付けてよいだろう。つまり、終点が表示されていないwalkの場合は[x ACT < WALK >]が、終点が表示されている場合は[BECOME [x < WALK > @ TERMINUS] が用いられるのである。RH&Lのやり方では、様態<MANNER>という制約がありこの事実とうまく対応できないが、本論文で用いる特異的要素を表す<ROOT>は存在論的範疇のようなカテゴリー分けをしていないので、このような柔軟な対応が可能になるのである⁷。

この表示を用いると Jackendoff(1996)で出された AIH への反例について反論することができる。

- (59) a. The snake crossed the crack in the rock in five seconds.
(蛇が 5 分で岩の裂け目を横切った)
- b. The soldiers passed my house in/for two hours.
(兵士たちが 2 時間{で/ずっと}家の前を通り過ぎた)

(59)は両方、一見、主語の位置にある「外項」が事象を「測定」しているように見える。Jackendoff はこの矛盾を強調するためにあえて主語の項に細長い物体を設定しているが、ここで注意すべきは、*The snake* も *The soldiers* もそれ自体は全く変化していないことである。「測定」の定義上、内的な変化を伴わない項は MEASURE 項ではない。つまりこの事象は経路目的語動詞の事象なのである。*the crack/my house* は直接内項ではなく PATH 項であり、入ってきた側と反対側の終点を TERMINUS とする位置変化を表しているにすぎない。主語の位置にあって一見「外項」に見える *The snake* と *The soldiers* が意味構造上は直接内項なのである。よって本論文の事象構造で書けば次のようになり、なんら AIH には違反しないことになる。

⁷ BECOME のパターンがある証拠として、終点がある移動動詞の主語は内項を修飾する結果述語を伴うことができるという事実がある。i)の例文の主語は本論文の主張通りなら内項である。

i) The wise men followed the star out of Bethlehem.

(賢者たちは星を追ってベツレヘムから出て行った) (Vespoor 1997: 影山 2009 : p.282 より引用)
ただし、MEASURE 型と異なり内項自体に変化があるわけではないので共起できる結果述語の種類は限定される。

- (60) a. *cross*: [BECOME [x <CROSS> @TERMINUS]]
 b. *pass*: [BECOME [x <PASS> @TERMINUS]]

英語という言語の特質上、*the crack*や*my house*は直接目的語の位置で直接目的語として具現しているが、これらが直接内項でないことは、受動態にしたときに非文法的とはいえないまでも、自然な主語になりにくいことからわかる⁸。

- (61) a. ?The crack in the rock was crossed by the snake in five seconds.
 (? 岩の裂け目はその蛇に 5 分で横切られた)
 b. ?My house was passed by the soldiers in two hours.
 (? 私の家は兵士たちに 2 時間で通り過ぎられた)

しかも *cross* も *pass* も自動詞として使用することが可能である。

- (62) a. The snake crossed over the crack.
 (その蛇は裂け目の上を横切った)
 b. The soldiers passed in front of my house.
 (兵士たちは家の私の前を通り過ぎた)

(62)についてはどちらも主語は内項であると考えられる。その根拠は *pass* と語源を同じくするフランス語 *passer*(語源はラテン語で「歩調」を表す *pussus*)が(62)と同様に自動詞で使われた場合、複合過去で非対格動詞に用いられる助動詞 *être* が使われるからである。さらに、動詞 *cross* も *pass* も移動する主体を直接目的語とした語彙的使役構文で用いることができるので、(59)の *The snake* と *The soldiers* が意味上の外項であるとはいいがたいことになる。

⁸ 皮肉なことだが、Jackendoff (1972)の主題階層(Thematic Hierarchy)に従えば、こういう結論が容易に導かれることになる。*The snake* も *The soldiers* もともに主題役割は移動する主体であるので「主題」である(意図性を強調すれば「動作主」の可能性もある)。一方、*the crack* と *my house* はその移動が行われる経路であり、終点でもある。受動態の適格条件は *by* 句の NP が持つ主題役割が派生主語より高い位置になければならない。高い位置とは Agent > Location, Source, Goal > Theme の主題階層であるが、(61)は明らかにこれに違反する。

- (63) a. The parents crossed their children across the border.

(親たちは子供に国境を横切らせた)

- b. She passed her fingers through her hair.

(彼女は指を髪に通した)

Jackendoff(1996)はまた、一見、斜格が「測定」していると思われる例をあげて AIH に反論している。

- (64) a. Bill loaded the truck with three tons of dirt in/*for an hour.

(ビルは { 3 時間で/* 3 時間 } トラックに 3 トンの土を積んだ)

- b. Bill sprayed the wall with thirty gallons of water in/*for five minutes.

(ビルは { 3 分で/* 3 分間 } 30 ガロンの水を壁に吹き付けた)

これらは数量詞を含む *with* 句が増減主題項と同様の役割を果たしているかのように見える。しかし主題増減動詞の項は実際に量が増加もしくは減少するのに対し、(64)の場合は *dirt* は 3 トン、*water* は 30 ガロンのままで変化していないことに注意してほしい。この文で測定されているのは容器としての *the truck* が満杯になるまでの変化、対象としての *the wall* が全部液体に覆われるまでの変化である。以下の文が証拠である。

- (65) a. ??Bill loaded the truck with those three tons of dirt in five minutes, and it was only half full.

(??ビルは 5 分でこれら 3 トンの土でトラックを山積みにし、たった半分しか積んでない。)

- b. ??Bill sprayed the wall with those thirty gallons of water in five minutes, and it was only half covered.

(??ビルは 5 分でこれら 30 ガロンの水で壁を吹き付け、たった半分しか吹き付けていない)

(65)の双方の例では斜格で表される *dirt* と *water* が全部なくなっても、対格で表される *the truck* と *the wall* が完全に *loaded* もしくは *sprayed* の状態にならなければ文として成立しな

いことが示されている。言い換えれば *dirt* と *water* が無くなる時点がこの事象の時間的終点ではないのである。測定されているのは、(65a)の場合は「トラックが満杯」でない状態から「満杯」の状態へ変化する過程であり、(65b)の場合は「壁が何も吹き付けられていない」状態から「全面吹き付けられた」状態へ変化する過程である。つまり容器としての *the truck* と塗られる対象としての *the wall* は状態が変化する MEASURE 項である。事物が移動する様が測定されているわけではないのである。Jackendoff の反論はどれも、「測定」される項とは別の項のサイズを変えているだけで、何が「測定」であるのかの定義に沿っていない。項のサイズは変化までの持続時間の長さに影響することはあってもその事象の測定の対象とは関係がないのである。

もう一度ここで整理してみよう。「測定」できる現象には MEASURE 項を持つ「測定」と PATH、TERMINUS 項を持つ測定があり、前者は直接内項である変項 *x* が表す実体自体が変化を起こすタイプであり、後者は間接内項の PATH、TERMINUS 項をとり、直接内項の変項 *x* が表す実体自体は単にその PATH をわたるだけで変化しないタイプである。言い換えれば前者は変項 *x* の指し示す事物の内的変化の「測定」であり、後者は変項 *x* が指し示す事物が外的に事象の変化を「測定」しているのである。第3章以降では進行形の事例を中心にこの語彙概念構造の妥当性を見ていくことになるが、この内的・外的という区別は進行形の解釈に影響する<ROOT>の素性として重要な概念のひとつとなる。

1.2.5 <ROOT>表示

本論文で特異的要素の表示として採用している<ROOT>についてももう少し詳しく述べておくことにする。これまで、語彙意味論に関する文献にみられる語彙概念構造の多くで結果状態を表す部分は分析的に表示されてきた。以下はその代表例である（結果状態を表す部分の下線部は筆者）。

(66) *wear*: *x_i* CONTROL [*State y* BE AT-ON *x_i*'s BODY]

(影山 1996: p.89)

(67) *blossom*: [*x* <IN-BLOSSOM>]

[BECOME [*x* <IN-BLOSSOM>]]

(RH&L 1998: pp. 125-26)

(68) *give*: [[x ACT-ON y] CAUSE [BECOME [y BE AT [State **BROKEN**]]]

(伊藤・杉岡 2002: p.24)

(69) *go out*: [BECOME_{PUNC} [y NOT-AT-PLACE]]

(丸田 1998: p.155)

これも多くは Jackendoff(1990)の以下の形式になったためであると考えられる。

(70)

$$\begin{array}{ll}
 \text{[STATE]} & \rightarrow \left\{ \begin{array}{l} \text{[State BE ([THING], [PLACE])}] \\ \text{[State ORIENT ([THING], [PATH])}] \\ \text{[State EXT ([THING], [PATH])}] \end{array} \right\} \\
 \text{[PLACE]} & \rightarrow \text{[Place PLACE-FUNCTION ([THING])]} \\
 \text{[PATH]} & \rightarrow \left[\begin{array}{l} \left\{ \begin{array}{l} \text{TO} \\ \text{FROM} \\ \text{TOWARD} \\ \text{AWAY-FROM} \\ \text{VIA} \end{array} \right\} \left(\left[\begin{array}{l} \text{THING} \\ \text{PLACE} \end{array} \right] \right) \\ \text{Path} \end{array} \right]
 \end{array}$$

Jackendoff によれば状態(State)は BE、ORIENT、EXT の3タイプがある。意味関数 BE は *The dog is in the park.*のように物体の位置を示し、事物(THING)と場所(PLACE)を項に取る。ORIENT は *The sign points toward New York.*のように物体の向きを示し、事物と経路(PATH)を項に取る。そして EXT は *The road goes from New York to San Francisco.*のように空間の広がりを表し事物と経路を項に取っている。場所は場所を示す関数(PLACE-FUNCTION)と事物を項として取り、経路は TO などの経路を表す関数と事物ないし場所を項として取る。前述の通り、Jackendoff の関数は主題の位置・移動を基本に考えており、状態も位置ないし移動としてとらえているのが分かる。

しかし、このように結果状態が分析的に表示されると不都合な点がいくつかある。一つは述語の持つ多義性を説明する際に必要以上の構造を認めなければならなくなる点である。例えば Levin(1993: pp.117-18)で *spray/load* 動詞に分類されている動詞は次のような交代パターンをとる。

- (71) a. Jessica loaded boxes on the wagon.
(ジェシカはワゴンに箱を載せた)
- b. Jessica loaded the wagon with boxes.
(ジェシカはワゴンを箱でいっぱいにした)
- (72) a. Jessica sprayed paint on the wall.
(ジェシカはペンキを壁に吹き付けた)
- b. Jessica sprayed the wall with paint.
(ジェシカは壁をペンキで吹きつけた) (ibid.)

(71a)(72a)は移動する物体が目的格、移動先が斜格で具現しているのに対し、(71b)(72b)は移動する物体の移動先が目的格、移動する物体が斜格で具現している。(66)-(69)のような表示方法に従えば、これらの動詞は二つの表示を用意しなければならないことになる。例えば影山(1996)であれば次のように表示されることになるだろう。

- (73) a. x CONTROL [BECOME y BE AT-ON z]
- b. x CONTROL [BECOME y BE WITH z]

しかし、同じように物体を移動させる動詞である *pour* や *fill* などはこの交代が許されない。

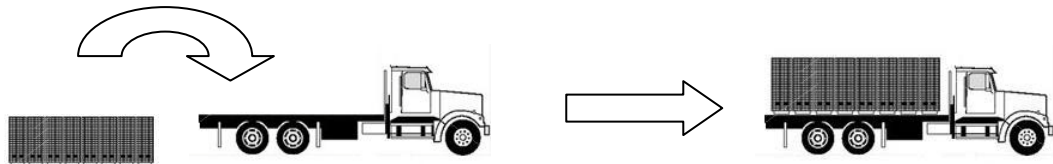
- (74) a. John poured water into the glass.
(ジョンはグラスに水を注いだ)
- b. *John poured the glass with water.
(*ジョンはグラスを水で注いだ)
- (75) a. *John filled water into the glass.
(??ジョンは水をグラスに満たした⁹)
- b. John fill the glass with water.
(ジョンはグラスを水で満たした)

⁹ 日本語の「満たす」の場合は英語と比べて若干容認可能性が高いようである。

(73)のように語彙概念を表示することは記述的には有効だが、なぜ *spray/load* は複数の語彙概念構造を持つことが許され、なぜ *pour* や *fill* が許されないのかについては説明がつかないことになる。また、複数の交代が許される述部について、すべての交代にそれぞれ異なる語彙概念構造があるとする考えは言語習得の説明の観点から考えると記憶の負担の面で問題があり、好ましいとはいえない。一つの単語がレキシコン上で語彙概念構造のリストの形で記憶されているというのははなはだ不合理であろう。

本論で提案する<*ROOT*>はある事象の全体的な意味で表す意味要素である。<*ROOT*>にはその事象の典型的参加者(participants)がどのようなもので、典型的プロセスがどのようなもので、典型的な結果がどのようなものかが記述されることになるが、それらは場面・状況・常識など百科事典的知識に左右されるファジーな認知的概念である。例えば前述の動詞 *load* や *spray* の<*ROOT*>情報はおそらく以下のようなものになる。

(76)



a. [外項]

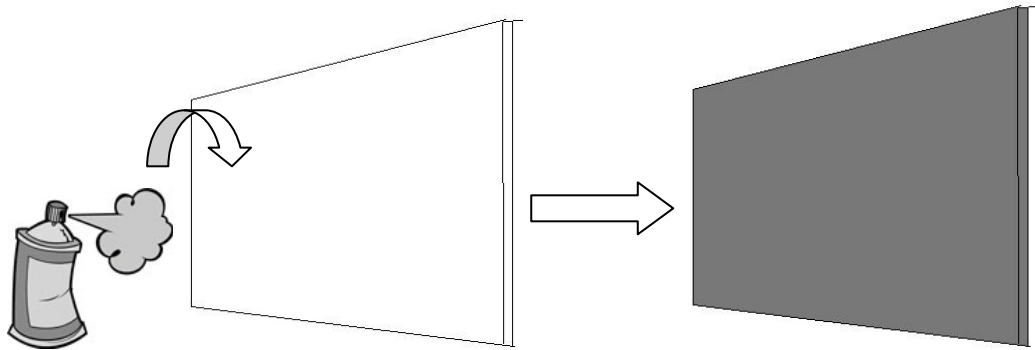
b. [積み荷]

<*ROAD*> ⇒ <*ROAD*> @ TERMINUS

c. [容器]

⊃ <*ROAD*> ⇒ <*ROAD*>

(77)



a. [外項]

b. ([道具])

c. [液体]

$\langle \text{SPRAY} \rangle \Rightarrow \langle \text{SPRAY} \rangle @ \text{TERMINUS}$

d. [表面]

$\neg \langle \text{SPRAY} \rangle \Rightarrow \langle \text{SPRAY} \rangle$

どちらの<ROOT>もそれぞれの動詞がどのような参与者(participants)の選択制限があり、典型的にどのような現象を示しているのかが「全体像」として記載されている。つまり、異なる構文ごとに構造が箇条書きされているのではなく、開始から終了までのプロセスが全て含まれた形として記載されているのである。まず参与者を見てみよう。図示してはいないがどちらの動詞も[外項]を持ち、その参与者には選択制限がある。*load* はそれに加えて[積み荷]と[積み荷]を入れる[容器]を典型的な参与者として選択する。*spray* は非頭在的に霧状に吹きだすための道具と吹きだされる液体と吹きだされる先の「表面」が典型的な参与者である(ただし、交代現象に関わるのは壁などの表面だけで例えば空気中に吹きだす場合はどこまで変化したら終わるのかという時間的終点がないので普通交代しない)。そして、全体的な事象として、どちらの動詞も何かしらの物体が移動した別のある物の状態が変化する過程が示されている。*load* は積み荷が移動して、積み込まれる先の容器がいっぱいになる。*spray* は液体が移動して、移動先の表面が一面別の状態になる。

本論文の<ROOT>は上述の構造的に記述された語彙概念構造のように複数が並立されているのではなく、現象の全体像が記述されているのが大きな違いである。構造的要素である基本述語 BECOME は定義上、 $\neg \langle \text{ROOT} \rangle$ から<ROOT>への推移である。よって BECOME の直接内項になる変項とその他の参与者はそれぞれこの関係を満たせる対象に

占められることになる。その関係を満たすかどうかの判断は事象の全体像をどう認知するかの問題となる。例えば *load* が表す事象の参与者として *the truck* と *hay* が上がった場合は普通 *the truck* の方を[容器]として *hay* を[積み荷]として認知する。しかし、同じ *the truck* を参与者として取った場合でももう一つの参与者が *a cargo ship* だったら今度は *the truck* が[積み荷]、*a cargo ship* が[容器]として認知されることだろう。だが、*the truck* と *cargo ships* だったらどうだろう。今度は複数ある *cargo ships* は玩具のようなものではないか？ といった類推が働くに違いない。そうなれば *the truck* が[容器]、*cargo ships* が[積み荷]の可能性も出てくる。話を変えて *a (computer) program* が参与者として出てきた場合は、[容器]はほぼ間違いなく *the computer* である。この場合は常識が働き[容器]の部分は省略する。このように項選択は構造で指定されるのではなく、多くは事象の全体像の中で認知的に捉えられるべきものなのである。

参与者の関係が認知された後は事象構造に適合するかどうかになる。動詞 *load* は MEASURE 型の測定も PATH、TERMINUS 型の測定も制限しないので、移動する[積み荷]の移動を焦点化するか移動先の[容器]の状態変化を焦点化するかで直接内項が決定される。一方 *pour* は移動する[液体]のみ焦点化できるように PATH、TERMINUS 型しか取れない選択制限があり、*fill* は満たされる[容器]のみ焦点化できるように MEASURE 型しか取れない選択制限があるため、それぞれ焦点化できるものだけが直接内項となるのである。直接内項にならなかった他の参与者は各言語固有の連結規則に従って項具現することになる。この方法はあるものが複数の構造をとりあるものは一つの構造しか取れない、という旧来の説明よりも説得力がある。旧来の説明では関連性がほとんどない複数のパターンを言語事実に合わせて列挙するだけで、なぜそのパターンになるのかは示されていないが、本論文では<ROOT>に示された意味内容から構造上取りうるパターンの最大値は決まっていて、取れないパターンがある場合はその条件を示せばよいだけだからである。

これまでの表示のように語彙概念構造の結果状態をあらわす部分を事細かに関数表示すると、あらゆる事例を反映させるために何パターンも語彙概念構造を設定する必要が出てくるが、<ROOT>のように事象を全体像としてとらえてあれば、個々の類似の場面で多少の違いがあっても、許容範囲であるかどうかを判断するだけである。これは実際の言語状況で遭遇しうる初見の現象や想像上の現象について描写する際も、細部まで規定されていない分、有利である。

特異的要素<ROOT>の一つの利点は 1.2.2 で触れた構文的な意味拡張性である。RH&L

の語彙概念構造では存在論的範疇を使っていたために不都合だった部分が<ROOT>表示で統一したことで解消している。例えば(37)の動詞 *run* の場合<ROOT>にあたる<RUN>は典型的な参加者を持たず、典型的な様態を含まず、単に「支障なく進む」という内容を示している。選択制限の緩い動詞であるため、複数の事象構造類型に挿入することで多義が保証されている。(37)の場合を取ってみよう。

- (78) a. Martha ran to the store.
[BECOME [x <RUN> @TERMINUS]]
- b. Tears ran down the child's face.
[BECOME [x <RUN> (@TERMINUS)]]
- c. Martha ran Fred to the station.
[[x ACT] CAUSE [BECOME [y <RUN> @TERMINUS]]]
- d. Martha ran a successful campaign.
[[x ACT] CAUSE [BECOME [y <RUN> (@TERMINUS)]]]
- e. (Fred knows how) to run the fax machine.
[BECOME [x <RUN>]]
- f. The Shinano runs through Niigata City.
[x <RUN>]

Ritter らは *run* と比較で動詞 *walk* を出している。彼女らの説明では *walk* は歩くものは「その行動を意思的にコントロール」し、その行動は「高度に特別な移動様式」であるとしている(Ritter and Rosen 1996: p.41)。これをもとに<WALK>を設定すると参加者には意思を持ってその行動をコントロールできるもので、「足状の物を交互に出して進行する」となる。参加者に意思を持つものがあるのでその条件を満たさない参加者の設定はできない。よって[x <WALK>]の語彙概念構造は成立しなくなる。また、[BECOME [x <WALK> @TERMINUS]]の構造は取れても、(78c)や(78d)のような参加者の制限と様式の制限を満たさない物は成立しなくなる。

さらに言えば前述の *load/spray* や *pour/fill* などは参加者として意思を持って行う存在と移動する事物、移動先が既に入っているために[BECOME [x <ROOT>]]や[x ACT<ROOT>]などの構造は選択できないことになる。

以上が<ROOT>についての説明である。第3章以降では参与者の選択制限や事象の概要のほかにもいくつかの補助的な素性が提案されることになるが、どれも主観によって代わりうる要素であり、構造的な要素とはなりえないものである。

1.2.6 CAUSE

構造的要素である基本述語の CAUSE は通例、単純形動詞の語彙中に使役事象と結果事象の双方を含む語彙的使役動詞内に用いられる。*make, let, have* などの使役を表す動詞は結果事象を表す非使役述語と組み合わせて使役構文を形成するため語彙的使役動詞には入らない。前述の通り、本論文では連結規則との関係で構造的要素を設定しているので、語彙的使役を表す基本述語は CAUSE しか設定していない。しかし、これまでの研究ではさまざまなタイプの基本述語が提案されてきた。この節では星野(2009b)を元にそれらのいくつかを取り上げ、不備を指摘する。

語彙的使役動詞についてはすでにいくつかのタイプがあることが知られている。例えば、Jackendoff(1990: pp. 130-133)では次の使役の差に言及している。

- (79) a. Harry (successfully / unsuccessfully) urged Sam to leave.
(ハリーはサムに去るように説得し(うまくいった／うまくいかなかった))
- b. Harry (successfully / unsuccessfully) impeded Sam's leaving.
(ハリーはサムが去るのを邪魔し(うまくいった／うまくいかなかった))
- (80) a. Harry (?successfully / *unsuccessfully) forced Sam to leave.
(ハリーはサムを無理やり去らせ(?うまくいった／*うまくいかなかった))
- b. Harry (?successfully / *unsuccessfully) prevented Sam from leaving.
(ハリーはサムが去るのを阻止し(?うまくいった／*うまくいかなかった))
- (*ibid*: p. 131)

(79)の例文ではどちらも*successfully/unsuccessfully*のような結果事象の成否に直接関わる表現が使われるのに対し、(80)の例文の場合*successfully*は不可能ではないが幾分冗漫な感じを与え、*unsuccessfully*では非文になる。これは(79)の*urge*や*impede*が「サムが去る」という結果事象の成否を問わないのに対し、(80)の*force*や*prevent*の場合この結果事象が必ず成立

することを意味するためである。この差を語彙意味表示に反映させるため、Jackendoffは使役を表す意味関数のCAUSEに付加する成否に関するパラメータを設定した。すなわち(79)の結果事象の成否を問わない語彙意味表示ではCS^u、(80)の結果事象が必ず成立する語彙意味表示ではCS⁺を用いるのである。この意味関数を用いて実際に表示すると次のようになる。(Jackendoffの語彙概念構造は、完全な形で表示すると複雑になるため、しばしば簡略な表示も使われる。ここでは簡略な表示を提示する)。

(81) Harry impeded Sam's going away.

[CS^u ([HARRY], [NOT [GO ([SAM], [AWAY])])]]

しかし Jackendoff の分析は相的にみると正しいとはいえない。*urge* や *impede* はもし対象がまったく変化を受けなかった場合、対象は「測定」できないはずである。実際、測定できるかどうか in X min でテストをしてみればはっきりする。

(82) a. *I urged him in 20 minutes.

(*私は20分で彼をせきたてた)

b. *I impeded him in 20 minutes.

(*私は彼を20分で邪魔をした)

よって、*urge* や *impede* は相構造的には語彙的使役動詞ではないと考えるべきである。つまり単なる他者への働きかけを表す動詞であり、測定できないタイプの動詞なのである。よってこれらの動詞は語彙登録の段階では次のような語彙概念構造を基本としているといっている。

(83) [x ACT < ROOT >]

その一方、CS⁺は本来的に結果状態への変化を表しているので語彙登録の段階ですでに語彙的使役動詞本来の語彙概念構造をしていることになる。よってCS⁺とCS^uに分けて基本述語を設定することには意味がないと考えられるのである。

丸田(1998)や中村(2003)は結果事象の成否とは別の面で使役動詞の多様性について論じ

ている。ここでは主に中村の用語について検証するが、重複する部分については丸田の用語についても言及する。

中村は語彙的使役動詞の意味の差を表すために CAUSE、INITIATE、CONTROL、COME ABOUT の四つの異なる意味述語を設定している。このうち、COME ABOUT は非対格動詞に用いられる構造と提案されており、今回の議論からは外すことにする。

CONTROLは「主語が動作の全てにわたって直接関与して目的語を制御する(*ibid*: p.46)」使役について、INITIATEは「状態変化動詞の他動詞の主語の役割がその状態変化のきっかけをつくる(*ibid*: p.55)」使役について記述するときに用いると定義されている。従来、語彙的使役を表すために使われてきたCAUSEは中村の用語では「使役となる原因がある心理状態を引き起こす(*ibid*: p.83)」狭義の意味述語として使われ、一般に使役を表す意味述語の総称としてはCAUSE_{<proto>}を用いて区別している。

INITIATE については丸田が中村に先立って採用している。丸田は Talmy(1985)のいうオンセット使役についてこの INITIATE を採用しているが、その内容はほぼ中村と同じ分析といってよい。一方、同延使役については中村とは異なり CONTROL ではなく従来通り CAUSE を用いている（もちろん、この CAUSE は中村の言う狭義の CAUSE とは異なる）。丸田は心理動詞の説明には、CAUSE に代わる別の意味述語を用いるのではなく、ACT の代わりに AFFECT という意味関数を使うことで説明している。

以下に中村があげている意味述語の具体例をあげてみよう。各例とも上がこれらの意味述語を用いた語彙概念構造、下がその語彙概念構造を含む文である。

- (84) [x CONTROL [y COME TO BE NOT AT z]]

John removed the dishes from the table.

(ジョンはテーブルから皿を取り除いた)

- (85) [x INITIATE [y BECOME BROKEN]]

John / The gale broke the vase.

(ジョンが／強風が 花瓶を壊した)

- (86) [x CAUSE [y BE_{<stage>} FRIGHTENED]]

John / The gale frightened Mary.

(ジョンが／強風が メアリーを怖がらせた)

(84)の場合「テーブルから皿を取り除く」ためには行為者の「ジョン」が常に目的語の「皿」に
関与していなければならないのに対し、(85)の場合、使役者にあたる「ジョン」や「強
風」は花瓶に対してなにかのきっかけを与えただけで、結果事象が派生する時点まで関与
していない場合がある。例えば花瓶に触れた後でバランスを失って台から落ちた場合や、
花瓶の近くにあったものを倒してそれが花瓶に当たった場合、その花瓶をのせた台そのも
のが倒れた場合なども考えられる。(86)の場合、使役者にあたる「ジョン」や「強風」は
直接的にメアリーに関わっているわけではない。

このように使役を表す意味述語を複数設定することには確かにそれなりのメリットがある。たとえば使役起動交替の可否や、Van Voost(1992)が指摘している心理動詞と達成動詞や到達動詞との共通点、相違点などの説明などが可能である。しかし、同時に構造が複雑化するというデメリットも存在する。たとえば中村も丸田も使役を表す基本述語 **INITIATE** と **CONTROL**(丸田の場合は **CAUSE**)を区別することで以下のような使役起動交替の可否の説明を試みている。

- (87) a. John broke a window with a ball.
(ジョンがボールで窓を割った)
- b. The window broke.
(窓が割れた) (中村 2003: p.56)
- (88) a. John destroyed the car.
(ジョンは車を破壊した)
- b. *The car destroyed.
(*車が破壊した) (中村 2003:57)

動詞 *break* は(9a)のように他動詞としても、(87a)の目的語を主語にした(87b)のような自動詞としても使うことができる。このような交替を使役起動交替とよぶが、この交替は全ての他動詞に可能というわけではない。例えば *break* と類似の意味を持つ *destroy* は(88b)で示しているように自動詞の用法がない。このことを中村は次のように語彙概念構造を設定することで説明している。

- (89) *break*: [x INITIATE [y BECOME BROKEN]]

(90) *destroy*: [x CONTROL [y BECOME BROKEN TO GREAT EXTENT]]

中村によれば(87a)の *a window* には「壊れうる」性質があり非意図的に壊れる可能性があるため、(89)に示しているように語彙概念構造では使役者が単なるきっかけでしかない *INITIATE* という意味述語が用いられている。一方(88a)では動詞の意味構造内に過度の程度を表す状態が入っており、その状態を派生させることには外的要因が必要となるため(90)が示しているように語彙概念構造では使役者が常に関与していることを示す *CONTROL* が用いられている。このうち(89)の *INITIATE* は自分から壊れる場合には余剰となり削除できるが、(90)の *CONTROL* は外的要因を示す必要な要素であるために削除できないために使役起動交替が許されない、というのが中村の主張である。

しかし中村の主張にはいくつか問題点がある。中村は同じ *break* でも次のような場合は使役起動交代が起こらないとしている。

- (91) a. John broke the promise.
(ジョンは約束を破った)
- b. *The promise broke.
(*約束が破れた)

(91a)の *the promise* には自ら破れるという内在的特性はないため必ず使役主に人を必要とする。よってこの場合は[x CONTROL [y BECOME BROKEN]] の語彙概念構造を持つことになるためにこの交替が許されないというのが中村の考えである。だが、それだと、*break* には *INITIATE* を含む語彙概念構造と *CONTROL* を含む語彙概念構造の二つが並立することになってしまう。使用頻度を考えると *break* の方が *destroy* よりも基本的な語彙である。*break* の方が用法の幅が広く *destroy* は用法の幅が限定されているのは確かに事実であるが、基本的な語彙の方が複数の異なる語彙構造を持っているとする考えは記憶の負担の点で望ましいとはいえない。むしろ、基本的動詞は多様な解釈を許す柔軟性がある単純な構造をしていて、用法の幅が限定されている動詞は硬直した構造をしていると考えるほうが適切だろう。

また、(90)で「過度の程度」があることが *CONTROL* につながるという議論も次のような例を考えると妥当とは思われない。

- (92) a. The window broke into pieces.
(窓は粉々に割れた)
- b. The car broke completely.
(車は完全に壊れた)

もし中村が言うように「過度の程度」があることが使役者の関与を必要とするならば、[x CONTROL [y BECOME BROKEN]] の語彙概念構造も持っている *break* は過度の程度を表す副詞句を含む(92)の解釈を許さないはずだが、現実にはまったく問題はない。

本論文の考え方では使役を表す基本述語 CAUSE 一つであり、意味の差は<ROOT>の情報で表している。よってこの方式で書かれる *break* と *destroy* は<ROOT>部分が異なるだけで同一である。

- (93) a. [[x ACT] CAUSE [BECOME [x <BREAK>]]]
- b. [[x ACT] CAUSE [BECOME [x <DESTROY>]]]

<ROOT>内の意味情報はその動詞が持つ全体的な意味の中で典型的な参与者と典型的プロセス、そして典型的な結果である。*break*と*destroy*の例で考えれば典型的結果はほぼ同じ「本来とは異なる(通常は不都合な)状態」であろう¹⁰。しかし、決定的な違いは*break*には参与者に課する選択制限が少なく、逆に*destroy*は制限があるということである。以下で参与者の部分だけ<ROOT>を記述してみよう。

(94) <BREAK>

- Participants: a. []
- b. [事物]

(95) <DESTROY>

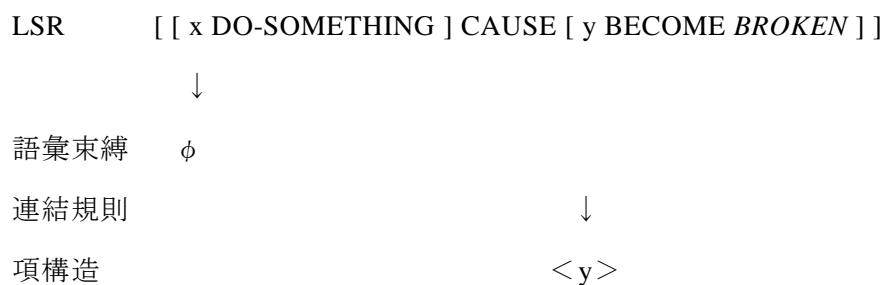
- Participants: a. [動作主][外界の力]
- b. [(築き上げられた)事物][(築き上げられた)計画]・・・

¹⁰ *break* の場合は *ice breaker*(緊張を解きほぐすジョーク)や *windbreaker*(ウィンドブレーカー)など本来とは異なる状態にすることが不都合でない場合もよくある。一方、~*destroyer* の組み合わせはほとんどが不都合であると思われる。

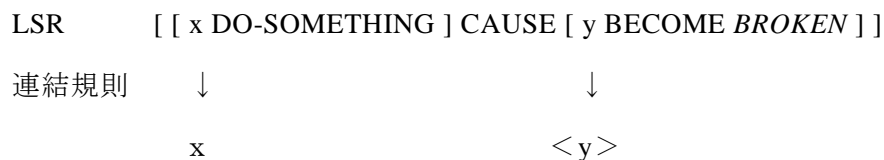
どちらの<*ROOT*>も a.がその事象を引き起こす物を、b が *MEASURE* 項となる物を指している。<*BREAK*>にカッコだけで何も記されていないのは制限が特定されていないことを意味する。ではこの項の選択制限がどのように使役起動交代の差につながるかを見てみよう。

本論文では使役起動交代を起こす動詞は全て使役他動詞を基準にしているという Levin and Rappaport Hovav(1995)の立場をとる。使役起動交替のメカニズムについて Levin らは次のように説明している。

(95) 自動詞の *break*



(96) 他動詞の *break*



(L&RH 1995: p. 108)

Levin らは、(95)で示すように動詞 *break* の使役主を表す変項 x が存在量子化(existential quantification)していると主張する。(95)でφとあるのは存在量がゼロ、すなわち存在はするが不特定であることを意味する。このため連結規則により、項構造は結果事象の y のみの一項自動詞として派生するのである。

(94)で示した<*BREAK*>と、(95)<*DESTROY*>とでは選択制限に差がある。*break* の場合、選択制限が緩い。*The sad news broke my heart.*のような無生物も主語項として選択できる上、(95)で示された存在量子化されたφにあたる項も選択できるのである。一方、<*DESTROY*>は選択制限で具体的な行為者が要求されており、存在量子化されたφは項として取ることができないため、使役起動交代ができないのである。

1.2.5 で述べたように、項の選択は事象全体から認知的に決定される。つまり、構造的には可能でも認知的に認められない項選択は決定されない。＜*BREAK*＞でも同様のことが言える。もし存在量化された ϕ が参与者として選択された場合は、認知的に行為者が ϕ でも＜*BREAK*＞の状態になるものが *MEASURE* 項として選択されることになる。(91a)の *the promise* は、＜*BREAK*＞の状態になるには論理的に使役主としての人が必要であり、 ϕ と *the promise* は項として選択される前に認知的・論理的に破綻しているのである。これらは数え上げの段階で排除され、もはや統語部門に送られることはないと考える。

一方認知的・論理的に、行為者が ϕ でも「壊れうる」ものが選択される場合はその限りではない。一旦項選択の段階で認可されたものは統語部門に送られ、あとは統語操作によって一項の自動詞として具現することになる。

この主張の妥当性は L&RH(1995)の提案する使役起動交代を許す動詞の定式化の問題点をクリアできる点で証明される。Levin らの主張では使役起動交代を許す動詞は、動詞の表す出来事が外的要因により引き起こされるという意味を持ち、その外的要因を表すものを主語に取れる動詞でかつその外的要因を表す主語が意思を持たない「原因」も許す動詞であることを要求している。しかし大石(2008)は定式化の不備を次の例をあげて指摘している。

- (97) a. The republicans want to Reaganize the country.
(共和党員はその国をレーガン主義に染めたいと思っている)
- b. The country refuses to Reaganize.
(その国はレーガン主義に染まるのを拒んでいる)
- (Keyser and Roper 1984 より)

(97)の *Reaganize* は人間のみが行える活動であり、主語には人間の動作主を必要とする動詞であるのに使役起動交替が可能である。大石は *-ize* を付加した使役動詞でこのような現象が見られることを指摘し、(98)のように使役起動交替が不可能な場合と比較検証した上で(99)のような修正を加えている。

- (98) a. They Reaganized the budgets.
(彼らは予算をレーガン主義に染めた)

b. *The budgets Reaganized.

(*予算はレーガン主義に染まった) (大石 2008:(15))

- (99) 使役動詞が動作主主語を要求する場合、目的語が動作主の解釈が可能なときのみ対応する起動動詞を持つ。 (ibid. :(20))

つまり、(97)の *the country* は動作主になりうる人間集団を表しており、(98)の *budget* は動作主として働くことができないということである。一見すると、*Reaganize* は *destroy* 同様、使役主を意味選択制限する動詞のように思われるが実際はそうではない。

接尾辞 *-ize* は常に同じ性質を持つと考えられる。(100)のように使役主に動作主を持たず、使役起動交替を起こす例もあることから接尾辞 *-ize* は原則的に主語に語彙意味選択制限の無い使役動詞を派生させる接辞であると考えてよい。

- (100) a. Water has oxidized the iron.

(水で鉄が酸化した)

- b. The iron has oxidized.

(鉄が酸化した) (ibid : (21))

Reaganize のように動作主以外が主語に来ないのは構造上の問題ではなく、結果事象が論理的に人間集団しか使役主の対象にしないという意味上の制限でしかない。接尾辞 *-ize* が持つ主語に語彙意味選択制限を課さないという性質は全ての *-ize* 動詞に継承されているはずである。よって、その動詞の表す事象が論理的・認知的に存在量子化した ϕ が使役起動主で対象となる項が測定できるになりうる場合だけ統語へ送ることができるのである。このように論理的制限を用いることで大石のような場合わけをせずともこの現象は説明できることになる。(97)の場合 *the country* は人の集団であり、他の動作主を必要とせずとも論理的に $\langle \text{REAGANIZE} \rangle$ の状態になれるので $x=\phi$ 、 $y=\text{the country}$ の組み合わせは破綻しないが、(98)では *the budgets* は他の動作主を持たないかぎり $\langle \text{REAGANIZE} \rangle$ の状態にならないので、 $x=\phi$ 、 $y=\text{the budgets}$ の組み合わせはその時点で破綻するのである。

次に中村(2003)が提案している狭義の CAUSE を見てみよう。中村が狭義の CAUSE を設定している理由は Van Voost(1992)で指摘されている *frighten* 型の心理動詞が語彙使役動詞でありながら到達動詞と似た性質を持つという事実による。

(101)		Psych-verb	Achievement	Accomplishment	States
a.	in X min	begin	begin	begin and end	begin
b.	for X min	ok	*	*	ok
c.	almost	begin	begin	begin and end	begin
d.	take place	yes	yes	yes	no

(中村 2003:67)

上記の事実を元に中村は次のように *frighten* 型の語彙概念構造を設定した。

(102) [x CAUSE [y BE_{<stage>} AT MENTAL STATE]

中村の語彙概念構造の特徴は、前述の INITIATE や CONTROL と違い、引き起こされることが状態変化ではなく心理状態であるということである（角括弧で書かれた STAGE は Carlson(1977)でいうステージレベルの状態、つまり一定時間持続する状態を示している）。この構造に従うと、状態変化を含まないので(101a)と(101c)で示されるように心理動詞では *in X min* や *almost* があるときには出来事の始めしか修飾できない。また、状態動詞と同じ意味述語 BE を含むために状態動詞と同様に(101b)の *for X min* との共起ができ、CAUSE が存在するので出来事(take place)を表すことができ、状態動詞とは違う、というのが中村の説明である。

しかし、同じことを本稿で提案する語彙概念構造でも説明ができる。(103)がその語彙概念構造である。相的に見て心理動詞は心理状態の変化を含む状態変化動詞であるために心理変化を受ける対象は測定の対象になる。よって直接内項の位置に写像される BECOME の変項として置かれる。前述のように ACT は単に外項を表すので x に動作主が来るわけではない。

(103) [x ACT] CAUSE [BECOME [y <FRIGHTEN>]]]

(101a)と(101c)で始点のみをさすという結果は言い換えれば始点も終点も一緒であることを意味する。つまりどちらも変化までに持続時間が無い、つまり瞬間での変化であるということである。本論文の語彙概念構造では RH&L の語彙概念構造とは異なり、瞬間の有無

は構造で表示していない。よってその変化が瞬間であるか持続的なものであるのかは全て特異要素である<*FRIGHTEN*>が担うことになる。瞬間を示す内容があることで(101a)と(101c)については本論文の語彙概念構造でも十分説明が可能である。

英語の心理動詞の場合、ほとんどが瞬間的な変化である捉えられている。よって Vendler 的な見方をすれば確かに到達動詞であるが、*in* 句と共起できるという点でまぎれもなく測定可能な事象であり、また外項を持つという点で Dowty 的な見方をすれば達成動詞でもある。Vendler/Dowty 的な分析の限界点はまさにここにある。

(101b)については *FRIGHTEN* がステージレベル状態であるということでは本稿の見解は中村と一致する。一定時間を表す *for X min* は、Carlson(1980)のいう個体レベルの述部に対しては共起できない。個体レベルの述部には恒久的な状態という意味合いがあるためである。しかしステージレベルの述部に対してはそれが一時的という意味合いがあるために共起が可能になっているのである。

ただし、中村は *BECOME* の代わりに *BE* という意味述語を使うことで説明をしているが、それでは説明できない現象がある。星野(2009b)は結果状態に米山・加賀(2001)の提案する状況記述(situation describing)の状態を結果状態として持つ語彙的使役動詞はその進行形が結果状態の一時的状態の意味を表すことができるとしている。

(104) I am disconnecting the TV.

(私は一時的にテレビの電源を抜いている)

動詞 *disconnect* は意図的な行為によって対象に変化をもたらすという典型的な語彙的使役動詞であり、心理動詞ではない。しかしこのように結果状態を強調することができる。よって次のように *for X min* とともに容易に共起する。

(105) I disconnected the TV for two months.

(私は2ヶ月間、テレビの電源を抜いていた)

また *in* 句や *almost* を付加した場合の結果も *frighten* と同様になる。

- (106) a. I disconnected the TV in 10 seconds.
(私は 10 秒でテレビの電源を抜いた)
- b. I almost disconnected the TV.
(もうちょっとでテレビの電源を抜くところだった)

ここで用いた状況記述述語は定義の上でステージレベル述語の下位分類である。よって (101) のパターンと一致する点でもステージレベル述語を含む点でも中村の言う狭義の CAUSE と同じ振る舞いをする。しかし *disconnect* は心理動詞ではないので、中村のいう狭義の CAUSE を使う分析は出来ない。中村の定義通りなら、電源を抜く行為のみなら CONTROL を使うことになるだろうし、偶然足を引っ掛けて意図せずに電源が抜けた場合や事故により電源が切れた場合などは INITIATE になるだろう。状況が変わるごとに異なる使役意味述語を用いた語彙概念構造を設定せねばならないのは明らかに理論的な不備である。

(101d)については中村同様、本論文の語彙概念構造中でも CAUSE があるので全く問題はない。

以上のように、*frighten* 型の心理動詞も他の語彙的使役動詞同様に同じ相構造をした動詞集合に含まれ、瞬間の素性配置や主語の語彙意味選択制限、結果状態の記述といった特異的要素記述によって十分に諸現象を説明できることが示された。さらには狭義の CAUSE では説明できないことについても説明できることも示された。

1.2.7 事象構造鋳型

ここまで様々な事例を用いて本論文で使う語彙概念構造について言及してきた。いったん整理してみることにしよう。ここまで上げられた一般的な語彙概念構造表示、つまり事象構造鋳型は次のようなものがあつた。

- (107) [x <ROOT>]
[x ACT<ROOT>]
[BECOME [x <ROOT>]]
[[x ACT<ROOT>] CAUSE [BECOME [y <ROOT>]]]

しかし事象構造鋳型はこれだけで十分なのだろうか。Tenny(1994)の直接内項に関する制約(MOC)の iii と間接内項に関する終点制約(TS)の iii を思い出していただきたい。

(108) There can be no more than one measuring-out for any event described.

(表されるいかなる事象も測定できるのは1つまでである)

(109) An event as described by a verb can have only one terminus.

(ある動詞に表される事象は終点を一つまでしか取ることはできない)

このことから一つの事象構造鋳型には最大で一つの BECOME しか入らないことが確定される。また Croft(1991,1994)などで示されるビリヤードモデル(序章参照のこと)により [[BECOME [x <ROOT>]CAUSE[y ACT<ROOT>]]] のような構造も存在しないことになる。外項をとる構造的要素として ACT は定義されているので [x ACT<ROOT>]CAUSE [x ACT<ROOT>]] のような構造も外項が二つあることになり排除される。*I drive a car.* や *Somebody hit me.* のような時間的終点の無い他動詞は RH&L や影山の語彙概念構造同様、[x ACT<ROOT>(ON y)] のように対象を表示することになるだろう。変項 y は測定されないが項である。この項は対格として具現することもあるが、時には斜格で具現することもある。

(110) a. Paula hit the fence.

(ポーラはフェンスを殴った)

b. Paula hit at the fence.

(ポーラはフェンスに殴りかかった) (Levin 1993: p.41)

このような特性のため、これを直接内項と呼ぶかどうかは厳密な定義が必要になるだろうが、本論文ではその議論には深入りしない。よって本論文中は(107)にあげた事象構造鋳型だけを用いて説明することにする。

また中国語の使役複合動詞については研究が進んでおり、一見するとこの事象構造で説明できない物がいくつかある。

(111) 哥哥 逗 笑 了 弟弟。

兄 あやす一笑う 完了 弟

(兄さんが弟をあやして弟が笑った)

(王 2005: p.179)

複合動詞「逗笑」は動詞の組み立てとしてはどちらも外項を取る動詞「逗(あやす)」と「笑(笑う)」であり[x ACT<ROOT>]CAUSE [x ACT<ROOT>]]のような構造はないという仮定に矛盾するようだが、王が言うように、全体の意味としては笑った瞬間に成立する事象であり、実質は[[x ACT<逗>] CAUSE [BECOME [y <笑>]]]の関係であると考えられる。次の例も一見、ここであげた事象構造分析とは異なる。

(112) 马拉松 跑 累 了 小明。

マラソン 走る一疲れる 完了 小明

(マラソンは小明を走り疲れさせた)

(王 2005: p.191)

複合動詞「跑累」は「马拉松」が使役主でその結果事象に「小明が走って疲れる」という使役を含む構文が入っているという、二つの使役を含んでいるように見える。しかし王の分析では(113)にあるように「跑累」は自動詞としても使うことができる動詞であり、かつ(112)の主語「马拉松」は単なる事象の CAUSER にすぎないため、(113)の自動詞文に原因となる語句を追加したことで(112)を派生したとしている。

(113) 小明跑累了。

(小明は走って疲れた)

(*ibid.*)

この分析をもとに語彙概念構造を記述してみよう。「跑累」は全体としてみれば疲れた時点で終わる事象であり、「走った」という要素はその様態でしかない。そのため(113)の事象は[BECOME [x <跑累>]]と記述してよい。他動詞の「跑累」はそれに起動主である外項が付加されることから[[x ACT<跑累>] CAUSE [BECOME [y <跑累>]]]とすることができる。

1.3 まとめ

Jackendoff に代表される意味上の差異をすべて語彙概念構造で表そうとするアプローチはともするとかつて主題役割の分類がそうだったようにとめどない細分化への道へ向かう危険性を秘めている。また、このアプローチは必然的に分類学的手法を取ることになり同様の手法をとる構造主義言語学に対して Chomsky が取ってきた方向とは逆行することになる。本論文では連結規則とかかわりのない意味的差異については新たな基本述語を作らず、意味的差異は非構造的な要素によって説明されるとしている。これは序章で述べているように語彙のレベルが生得的で構造的な計算体系の統語部門と成長とともに複雑化していく後天的要素を含むファジーな認知体系との接点にあるという考えを反映している。

論理的・認知的に条件を満たさない項は数え上げの段階で排除されるという考えは、統語における言語計算体系で用いることができる要素は語彙項目に含まれている要素に限られるというミニマリスト・プログラムにおける包括性条件(Inclusiveness condition: Chomsky 1995: p.228)に照らし合わせても正しいと思われる。ミニマリスト・プログラムの枠組み内では統語上の言語計算体系でフィルターは存在しない。よって言語計算の途中で論理的におかしい文を排除することはないのである。

1.4 追記：新語形成プロセス 動詞 *Michael Jackson* の変異から

<ROOT>分析の妥当性を示す一つの例として新語形成の容易さをあげたいと思う。この分析の利点は構造的要素と認知や主観、知識などに基づく特異的要素を分けていることであり、特異的要素については厳密な記述に適している部分ではないと指摘してきた。このため、初めて聞く表現であっても<ROOT>に相当する部分について知識がある場合、その知識を元に構造要素を組み合わせた上で意味解釈ができるのである。これはすべてを意味関数で記述しようというアプローチでは説明できない現象である。

西森(2009)の記事によれば、アメリカのポップ歌手マイケル・ジャクソン(Michael Jackson: 1959-2009)の死後数週間、アメリカのメディアがマイケル関連の記事一色になったことを受けて、若者の間で *I'm totally Michael Jacksoned out.*(マイケル・ジャクソン潰けになってうんざりしている)という表現がよく聞かれるようになったという。しかし、それ以前は *Michael Jackson* が動詞としてつかわれる場合、彼の言行を反映して「過剰な整形手術をする」「整形手術のやり過ぎで顔が変形する」「皮膚を漂白する」「子供に性的虐待をする」などを意味した。

この動詞 *Michael Jackson* の<*ROOT*>は<*MICHAEL JACKSON*>である。ここに含まれる情報は話者がマイケル本人に対して持つ情報すべてであり、その情報から連想されることである。よって場面に応じて想起され検索される情報は異なるが、全体像は用法ごとに異なるわけではない。逆に、従来のようにすべて意味関数で表記するアプローチでは、全体像はわからないうえに、なぜその意味になりうるのか、という疑問には答えられない。また、それぞれの意味ごとに語彙登録するのは非常に不合理である。*Michael Jackson O out* という動詞句についていえば、「マイケル関連のニュースがメディアを席巻して視聴者がうんざりしている」という背景が知識として存在しているうえで成り立つ表現であるが、この表現を語彙登録するために特別なプロセスがあるとは考えにくい。本論文で提案している語彙概念構造では以下に図示するように、*BECOME* や *ACT* の項と<*ROOT*>の関係性から意味が導き出せる。これはある<*ROOT*>から連想で導き出せるイメージが言語社会・共同体内で共有され容易に合意できる範囲で新語が生み出される可能性があることを意味する。

(114) <*MICKAEL JACKSON*>



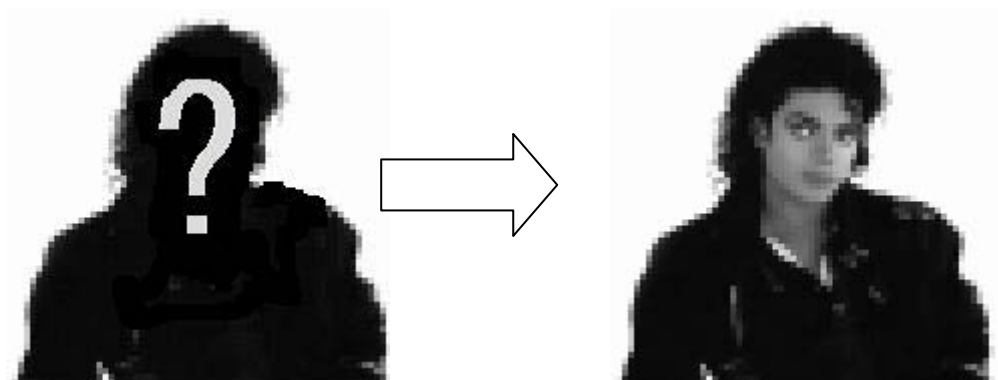
【連想される情報】

- ・ King of Pop ・ 整形手術 ・ ダンスの名手 ・ スリラー
- ・ 死去のニュースにうんざり ・ ジャクソン 5 ・ モータウン ・ ネバーランド
- ・ 幼児虐待 ・ 顔面漂白 ・ ジャッコー ・

etc.

(115) [BECOME [x <MICHAEL JACKSON>

¬<MICHAEL JACKSON> → <MICHAEL JACKSON>



[顔面漂白][整形手術]

[整形した鼻が崩壊気味] etc.

(116) [x ACT<MICHAEL JACKSON>]

<MICHAEL JACKSON>₁<MICHAEL JACKSON>₂... <MICHAEL JACKSON>_n



[幼児虐待]

[幼児虐待]

[幼児虐待]

[ネバーランド]

[ネバーランド]

[ネバーランド]

[ムーンウォーク]

[ムーンウォーク]

[ムーンウォーク]

[奇行]

[奇行]

[奇行]

etc.

このように、<ROOT>情報の意味が拡大しても、項と<ROOT>の間に相対関係が成り立ち、かつ発信者と受信者の間に共通理解が成り立つならば、新語は誕生しうるのである。

第2章

英語進行形の意味によるグループ分け

第1章では近年注目を浴びている相分析をもとに、語彙概念構造を項との連結規則にかかわる統語的な構造的要素と概念的意味にかかわる認知的な特異的要素に分けて記述するという新しい語彙概念構造を提案した。第2章以降ではこの記述の妥当性を示すために進行形の多義性についてこの語彙概念構造を用いた説明を試みる。

進行形で説明することにより、Vendler(1967)や金田一(1950)などの理論の根底にみられる「瞬間」の概念が主観に基づくものであって構造的な要素ではないことが明確に示されることになる。また、これまで進行形の研究では進行形の多義性は深く扱われていなかったが、この語彙概念構造を用いて説明することで、構造的に可能でかつ実際に許容される解釈、構造的に可能で意味概念的に許容されない解釈、構造的に不可能な解釈が容易に明確に分類される。そのうち構造的に可能で意味概念的に許容されない解釈については特異要素<ROOT>の内容が深く関与しており、文脈に応じては解釈が可能になる場合があるが、それはあくまで構造が許す範囲内で説明されることになる。

本章では、Hoshino(2007a, 2007b, 2008)、星野(2008a, 2009a)にしたがって進行形の解釈についての記述的研究成果を列挙した上で、それらを出来事の実現性(Actuality)という点からグループⅠ、グループⅡ、グループⅢの3つのグループに分類する。そのうえで第3章ではグループⅠ、第4章ではグループⅡ、第5章ではグループⅢについてそれぞれ考察していくことにする。

2.1 進行形の解釈

英語で *be -ing* の形で表される述部形は伝統的にその表す意味から進行形(progressive)もしくは継続形(continuous)と呼ばれてきた。しかし、実際は「進行」とも「継続」ともつかない用法も含め様々な解釈が存在する。一般向けの文法書であってもその点は指摘されている。まず学習者用の基本的文法書の記述を見てみよう。(1)が現在進行形、(2)が過去進行形である。本論文では語彙概念構造と進行形の関係について明示することが主眼であり、進行形の全ての用法について記述することは念頭に置いていない。よって進行形以外に他の法助動詞や相助動詞を含まないこの二つの用法に限定して話を進めることにする。未来

進行形と呼ばれる *will be -ing* については助動詞 *will* の複数の意味について言及する必要がある、また完了進行形については完了についても言及する必要がある、今回は説明しない。

- | | | | |
|-----|----|---|------------------|
| (1) | a. | Be quiet! The Prime Minister is speaking. | Present activity |
| | | (静かに！ 首相が話しているところです) | (現在の活動) |
| | b. | She is staying at the Olympic Hotel. | Temporary state |
| | | (彼女は一時的にオリンピックホテルに滞在中だ) | (一時的状態) |
| | c. | Pollution in the city is getting worse. | Changing state |
| | | (都市の汚染はますます悪化している) | (変化中の状態) |
| | d. | We are leaving at ten o'clock. | Future plans |
| | | (10 時に出発します) | (近未来の予定) |

(O'Driscoll 1988:p.30)

- | | | | |
|-----|----|---|----------------------|
| (2) | a. | Between 10 and 11 last night, I was reading. | Past activity |
| | | (昨夜 10 時から 11 時の間は読書していました) | (過去の活動) |
| | b. | They were getting up early that month. | Past temporary habit |
| | | (その月、彼らは早起きしていました) | (過去の一時的習慣) |
| | c. | She was having a bath when the phone rang. | Background activity |
| | | (電話が鳴った時、彼女は入浴していました) | (背景になる活動) |
| | d. | Everybody was excited because they were leaving for Paris the next day. | |

Arrangements in the past

(翌日パリに出発することになっていたのでみんな興奮していた)

(過去における予定)

(*ibid.* p.31)

この学習者向け文法ガイドでは以上のように現在進行形、過去進行形ともに 4 つの異なる用法が紹介されている。一般向けの文法書でもほぼ同様の分類である。(3)が現在進行形、(4)が過去進行形である。

- (3) a. He is working in Saudi Arabia at the moment. Around now
(彼は現時点でサウジアラビアで勤務中だ) (現在)
- b. Why is he hitting the dog? Repeated actions
(なぜ彼は犬を叩いているの) (繰り返し動作)
- c. I'm travelling a lot these days. Repeated actions
(このごろ何度も旅行しています) (繰り返し動作)
- d. That child's getting bigger every day. Changes
(あの子は日に日に大きくなっていく) (変化)
- e. What are you doing tomorrow evening? Talking about the future
(明日の夜、何する?) (未来)
(Swan 2005)
- (4) a. What were you doing at eight o'clock yesterday evening?
In progress around a particular past time
(昨日の夜 8 時、何していたの?)
(過去のある時点で進行中)
- b. As I was walking down the road, I saw Bill.
Background event
(道を歩いているとビルにあった)
(背景の出来事)
- c. At the time when it happened, I was travelling to New York a lot.
Repeated actions (as background events)
(それが起きた当時、私は何度もニューヨークへ行っていた)
(背景の出来事となる繰り返し)
- d. It happened while I was living in Eastbourne last year.
Shorter temporary actions and situations
(去年イーストボーンに住んでいたときそれは起きた)
(短期の一時的活動・状況)

- e. I was having lunch with the President yesterday, and she said ...

Less important news

(昨日社長と昼食食べてたんだけど、その時言ってたよ・・・)

(あまり重要でない情報)

- f. Aunt Lucy was always turning up without warning and bringing us present.

Things happening repeatedly and unexpectedly

(ルーシーお婆さんはいつも知らせなしに訪れて贈り物を持ってきた)

(予期せず繰り返し起きること)

(*ibid.*)

学習用や一般用の文法書の場合、その目的は正しく書くためのガイドであり、なぜそうなるのかは目的ではない。よって「このような場合に使う」という断定的な記述の列挙にならざるを得ない。

それに対し、Quirk et al.(1985)は詳細な事例を挙げて説明的立場で進行形の意味を扱っている。Quirk らはまず、次のように進行形を分類している。

(5) STATE PROGRESSIVE (状態の進行形)

- a. We are living in the country.

(私たちは今一時的に田舎に暮らしている)

- b. We live in the country.

(私たちは田舎に暮らしている)

(6) EVENT PROGRESSIVE (出来事の進行形)

- a. The referee blows his whistle.

(おっと、ここで審判の笛だ)

- b. The referee is blowing his whistle.

(審判が笛を吹いています)

- c. The train was approaching.

(列車が近付きつつある)

(7) HABITUAL PROGRESSIVE (習慣の進行形)

- a. The professor types his own letters.
(教授は手紙をタイプで打つ)
- b. The professor is typing his own letters while his secretary is ill.
(秘書が病気の間、教授が手紙をタイプで打っている)
- c. At that time she was having regular singing lessons.
(当時彼女は定期で歌のレッスンを受けていた) (ibid. pp.198-200)

多くの場合、状態動詞は進行形にできないが、(5a)のように可能な場合は現在形の(5b)が持つ永続性の意味ではなく、むしろ一時的の意味解釈となる。(6)のように出来事を表す動詞が進行形になる場合、その出来事が「持続時間(duration)」をもち、かつまだ終了していないことを意味する。(6a)の出来事としての解釈は、例えばサッカーの試合の中継で審判が一瞬短く笛を吹く状況に使われるのに対し、(6b)は審判が笛を吹き続ける様子か繰り返し吹く状況を表すとしている¹。この「持続時間」の概念は(6c)でも見られる。(7)であげた繰り返しの用法はある限られた期間での習慣を表している。(7a)は永続的な習慣を表しているのに対し、(7b)は秘書がいない間、という限られた期間内で繰り返される習慣である。また(7c)では「その当時」という限定で一時的にそういう習慣があったことが述べられている。

Quirk et al.(1985)ではさらに、動詞のタイプごとに用法の整理を試みている。ここでそれらのタイプを概略してみよう。まず、動詞を静的(stative)動詞と動的(dynamic)に分類する。静的意味は不可算(non-count: *ibid.* p.178)で定義され、動的意味は加算(count: *ibid.*)で定義してあるが、大まかに前者が状態動詞、後者が非状態動詞であるといって差し支えない。静的動詞はさらに2つに分類され、性質(quality)を表す動詞は進行形にできない。

- (8) a. Mary is Canadian.
(メアリーはカナダ人だ)
- b. *Mary is being a Canadian.
(*メアリーは一時的にカナダ人だ) (ibid. p.200)

¹ 出来事の解釈でなければ(6a)には「仕事として笛を吹くことになっている」という解釈もある。

一方、もう一つの静的動詞、状態(state)は若干、進行形の容認可能性が上がる。

- (9) a. Mary has a bad cold.
(メアリーは悪い風邪をひいている)

- b. ?Mary is having a bad cold.
(?メアリーは悪い風邪をひいているところだ) (ibid.)

ただし、これらの動詞が進行形で表されるときには動的な意味に再解釈されることがあり
うとしている。

- (10) Mary is being tired. (ibid.)
(メアリーは一時的に疲れている ⇒ 疲れているふりをしている)

状態の動詞でも進行形のなりやすさには差異があるとも指摘している。個人に関わる状態
で(11a)の知的状態(intellectual states)や(11b)の感情・態度の状態(states of emotion and attitude)
は一時性が強調されない限りは進行形と共起しないし、(11c)の知覚の状態(states of
perception)は動作として解釈されるとき以外は進行形と共起しない。一方(11d)の身体感覚
の状態(states of bodily sensation)は一時的状態を表す場合は単純時制でも進行形でも言い表
すことができる。

- (11) a. I {understand/*am understanding} that the offer has been accepted.
(私は申し出が受け入れられたと理解している)
- b. She {likes/*is liking} to entertain the students.
(彼女は生徒を楽しませるのが好きだ)
- c. The soup {tasted/*was tasting} strongly of garlic.
(このスープは強烈にニンニクの味がした)
- d. My foot {hurts/is hurting}.
(足が痛い) (ibid. p.203)

静的とも動的ともつかない一部の動詞については位置・姿勢動詞(stances)という用語を用いている。これらの動詞は単純時制で使われた時は恒久的な状態を、進行形で使われた時は一時的状態を表す。

- (12) a. James lives in Copenhagen.
(ジェイムズはコペンハーゲンに住んでいる)
- b. James is living in Copenhagen.
(ジェイムズは一時的にコペンハーゲンに住んでいる)

動的動詞については結果状態の有無(完結(conclusive) / 非完結(non-conclusive))、持続性の有無(持続(durative) / 瞬間(punctual))、動作主性の有無(動作主あり(agentive) / 動作主無(non-agentive))の3つの観点から8つのグループに分けている。結果状態の無い「非完結」で「持続」のタイプの動詞はともに進行形にでき、動作主のあるタイプ(13a)は「活動(activities)」、動作主の無いタイプ(13b)は「進行中の出来事(goings-on)」と名付けている。活動については他動詞の用法もある(13c)。

- (13) a. Jill was writing/working/singing/dancing....
(ジルは{手紙を書いている/働いている/歌っている/踊っている}...)
- b. The wind is blowing.
(風が吹いている)
- c. The children are playing chess.
(子供たちはチェスをしている)

「非完結」で「瞬間」のタイプの動詞はどちらも進行形にしたときに繰り返しの意味となる。動作主のあるタイプ(14a)は「瞬間的活動(momentary acts)」、動作主の無いタイプは「瞬間的出来事(momentary events)」と名付けている。

- (14) a. John was nodding his head.
(ジョンは首を縦に振っている)

- b. Downstairs, a door was banging.
(下でドアがバンバンと音を立てていた)

「完結」で「持続」のタイプで動作主が無いタイプは進行形にすると「変化の過程(process)」つまり状態の変化の途中であることを表す。この用法については(15a)のような自動詞用法と(15b)のような他動詞用法の両方がある。

- (15) a. The weather is getting warmer.
(天気がだんだん暖かくなっている)
b. The sun is ripening our tomato nicely.
(太陽のおかげで我々のトマトはよく熟している)

一方、動作主があるタイプ(16)は「達成(accomplishment)」すなわち、ある時間的終点に向かつての活動を意味する。このタイプは前述の「活動」の動詞に直接目的語や目的地の副詞句を入れることで作ることもできる場合がある。またこの進行形の意味の場合、結果に至る途中であって必ずしも示される事象が完結している必要はない。

- (16) Jill is knitting herself a sweater.
(ジルは自分にセーターを編んでいる)

最後の「完結」で「瞬間」のタイプは当然起こりうる状態変化を表す。つまり目の前で起こりそうな出来事を指す。動作主性があるタイプ(17a)を「推移的行為(transitional acts)」動作主が無いタイプ(17b)を「推移的出来事(transitional events)」と呼んでいる。

- (17) a. I'm stopping the car at this garage.
(このガレージに車を止めるよ)
b. The train is arriving at platform 4.
(電車が4番線に到着します)

以上が Quirk et al.による進行形のグループ分けである。ここまで様々な文献にあらわれ

る意味分類を見てきたが、明確に区別できる用法もあれば区別がはっきりしないものも多くみられる。例えば(2a)の過去の活動と(2c)の背景となる活動は単に対比される時間が(2a)が前置詞句、(2c)が時間を表す副詞節であるだけで、過去のある時間における活動、といっても問題ないではないだろうか。同様のことは(4a)(4b)にも言える。

また、一つの文が持つ多義的な解釈についても説明がなされていない。例えば(16)の *Jill is knitting herself a sweater* は出来上がりつつあるという「達成」の意味以外にも今実際に編んでいるところだという「活動」の意味解釈も可能である。また文脈を設定すれば「一時的な習慣」の意味も可能になるであろう。

(18) Jill is knitting herself a sweater (instead of her mother while she is sick in bed).

((母が病床にいる間、母に代わって)ジルがセーターを編んでいます)

進行形の意味は多様であり、整理するのが困難であるのはこれらの記述を見ていくと容易に想像がつく。これに語用論的な意味が加わると更に話は複雑になる。例えば丁寧さを表すために進行形が用いられることがある。

(19) a. I'm hoping you can lend me £10.

(10ポンドお貸しくださるといいのですが)

b. What time are you planning to arrive?

(何時におつきになるご予約でしょうか?)

(Swan 2005: p.436)

この用法は過去形を用いると更に丁寧さが増す。

(20) a. Good morning. I was wondering: have you got two single rooms?

(おはようございます。シングル2部屋ございませんでしょうか?)

b. Were you looking for anything special?

((店内で)なにかお探しのものでもございましょうか?)

(*ibid.*)

これとは別に、Goldsmith and Woisetschlaeger(1982)は進行形に「構造的」知識か「現象的」知識化を区別する形而上学的な用法があるとしている。例えば次のような単純時制と進行

形の意味の対立である。

- (21) a. The engine doesn't smoke anymore.
(このエンジンはもう煙を立てません)
- b. The engine is not smoking anymore.
(このエンジンはもう煙を立てていません)

(Goldsmith and Woisetschlaeger 1982: p.81)

現在時制で表される(21a)は例えばエンジンを修理した後で、煙が出るか出ないかテストをするまでもなく発話される。つまり、目の前の現象として言及されるのではなく、修理が済んで理屈上煙を立てないという知識を元にして述べられている。これが世界知識を元にした「構造的」意味である。この状況では(21b)の言い方はできない。それに対して(21b)はドライブ中に煙を出していたエンジンが、停止して放っておいたらいつの間にか煙が消えていたような文脈で発話される。これから煙を立てないかどうかは何も保証はないが、目の前の現象としては煙を立てていない。これが目の前の現象を元にした「現象的」意味である。この状況では(21a)の言い方はしない。

ともかく、ここにあげた用法について何も指針なしに一つずつ検討していくのは時間の無駄である。次節において、明確な基準で進行形の意味を3つに分け、それを元に第3章から第5章までそれぞれ検討していくことにする。

2.2 進行形の基本的な意味

議論を進める上で、本論文では進行形の様々な意味は、進行形の基本的意味と述部の持つ意味要素とで合成的に形成されるという立場をとる。ヒトが言語を習得する上で、様々な用法をそのたび毎に箇条書き的に習得していくことは不合理であると考えからである。この考え方は第1章で触れた<ROOT>の考え方に共通する。複数の語彙概念構造ではなく、認知的<ROOT>を一つ設定することで、事象構造鋳型と組み合わせて多様な構文が可能であるというアプローチは、ここでも用いられることになる。

進行形の基本的な意味については様々な提案がなされている。Quirk et al.(1985)とLeech(2004)は次のように提案している。

- (22) a. その出来事は「持続性(duration)」を持つ
 b. その出来事は「限定的持続性(limited duration)」を持つ
 c. その出来事は「必ずしも完結している必要はない」

(Quirk et al.1985: p.198)

- (23) a. 進行形は「持続性」を示す。この点で非持続的な「出来事の現在形(event present)」と区別される。

Event present ・ Progressive ～～～～

- b. 進行形は「限定的持続性」を示す。この点で「状態の現在形(state present)」と区別される。

State present ————— Progressive ～～～～

- c. 進行形はその出来事が完結している必要はないことを示す。これも「出来事の現在形」と区別される。

(Leech 2004: p.19)

Leech and Svartvik(1994: p.73)では「一時性(temporariness)」と「未完成性(incompleteness)」を用いているが、「一時性」と「持続性」はほぼ同様のことを言っていると解釈してよい²。(22)と(23)は(23)に補足説明がついている以外は全く同じことが述べられている。(22b)(23b)でいう「限定的持続」という言葉は永遠に持続する状態と比較するために「限定的」という修飾語句がつけられている。しかし、(22a)(23a)の出来事の持続であっても、それが永遠に持続するわけではない。よって出来事の持続も同様に「限定的持続」といって差し支えあるまい。非完結性については持続とは相対する概念であり、純粋に持続を意味するならば当然の帰結として出てくる意味であると考ええる。よって本論文は進行形の基本的な意味概念として「限定的持続」を採用することにする。

2.3 分類の基準

2. 1で進行形の解釈について見てきたが、これらの問題点の一つは基準がはっきりしていないことであった。本論文は進行形の意味の細分化が目的ではなく、進行形が様々な意味を持ちうることのメカニズムを、語彙概念構造を通じて明らかにすることである。細かな解釈上の違いや、語用論的な意味の拡張について深入りするつもりはない。よって進

² Leech も Svartvik も Quirk et al.(1985)の共著者であり、基本的に主張は変わっていない。

行形の用法についても、語彙概念構造とリンクするような構造的に明確な分類方法を用いることにする。

第1章で触れたように、動詞の意味は「測定」の概念でアスペクト的に分類できる。この「測定」の概念は構造的な要素であり、本論文では語彙概念構造の構造的要素にこの「測定」の概念を用いた分類をおこなっている。一方、進行形の意味の基本にある「限定的持続」は「測定」のような明確さを欠く主観的概念である。測定の場合は時間的終点という明確な時点を持ち客観的に観察できるが、「限定的持続」はどれだけ持続すれば限定的なのかは主観の問題である。これについては Goldsmith and Woisetschlaeger(1982)が次のように言っている。

- (24) a. The statue of Tom Paine now stands at the corner of Kirkland and College, but everybody expects the new Administration to move it.
 (トム・ペインの像は今、カークランド通りとカレッジ通りの角に立っているが、みんな新しい行政府がそれを移転させると思っている)
- b. The statue of Tom Paine is standing at the corner of Kirkland and College, and nobody thinks the deadlocked City Council will ever find a proper place for it.
 (トム・ペインの像はカークランド通りとカレッジ通りの角に立っているが、膠着状態の市評議会ではそれにふさわしい場所は見つけれないとみんな思っている)

(24a)は「永続的」状態を表すはずの現在時制を用い、(24b)は「限定的持続」を表すはずの現在進行形を用いている。しかし、トム・ペインの像がこれから立っているであろう時間は明らかに(24b)の文の方が長そうである。Goldsmith らは前述の「構造的/現象的」区別を用いて前者が法令等に基づいて決まっている「本来あるべき」構造的知識であり、後者は法令などなくたまたまそこにあるという「現象的」知識に基づいていると説明している。これについて反論するつもりはないが、この結果からわかることは、「限定的持続」は実際の時間の長さを反映した客観的な概念ではないということである。よって限定的持続の長さを基準として進行形を明確に分類することはできない。

しかし、進行形が進行相というアスペクトを表している以上、何らかの時間的要素で分類する必要はある。そこで本論文では2つの視点から進行形を分類することにする。一つ

は Hornstein(1990)に倣って時制構造は発話時(speech time: S)、出来事時(event time: T)、指示時(reference time: R)の三つの点からなるとする視点である。もう一つは発話時点でその行為・出来事が実際に実現しているかどうかという視点である(アクチュアリティ(actuality)と呼ばれる)。この分類によって、様々な用法は3つのグループに分類されることになるが、それぞれのグループの中でもいくつかの下位分類がなされることになる。

2.4 進行形の意味的グループ分け

Hornstein(1990)は前述の通り時制構造は発話時と出来事時、指示時の3つの点からなるとしている。そして英語の基本的時制を次のように表記している。

(25)	a.	現在	S, R, E
	b.	過去	E, R-S
	c.	未来	S-R, E
	d.	現在完了	E-S,R
	e.	過去完了	E-R-S
	f.	未来完了	S-E-R

コンマで隔てられた二つの時間点は同時に起こることを意味する。ハイフンでつながれた二つの時間点はハイフンに先行する時間点がハイフンの右にある時間点より先行することを意味する。現在時制ならば発話時が指示時でありかつ出来事時である。過去時制では発話時に先行して指示時と同時に出来事時がある。未来は逆に発話時のあとに指示時と出来事時が同時に存在することになる。

進行形はそれ自体時制ではなく、一つのアスペクトを表す用法であるので、本来であれば現在進行形は(25a)、過去進行形は(25b)と同じであるはずである。しかし、2.1であげた用法の中には明らかにこの基準に反する用法が存在する。

(26)	a.	We are leaving at ten o'clock.	=(1a)
	b.	Everybody was excited because they were leaving for Paris the next day.	=(2d)
	c.	What are you doing tomorrow evening?	=(3e)
	d.	The train was approaching.	=(6c)

e. I'm stopping the car at this garage. =(17a)

f. The train is arriving at platform 4. =(17b)

(26a)の基準時は *at ten o'clock* であるが、これは発話時よりも後に起こることである。そして出来事時は基準時と同じであるので時間的表示は **S-R, E** となる。つまり未来である。
(26b)の基準時は皆が興奮していた過去の時点である。そして出来事時はその時点からみて *the next day* である。発話時はそれよりも後になるので **R-E-S** の形であり、これも過去形とは異なる。ここにあげた用法はどれも本来の時制とは異なる時間的表示がなされている。これらの用法はその意味でもっとも進行形の基本的な意味からは離れた意味を持つグループであるといっている。

それではもう一つの視点であるアクチュアリティを見てみよう。アクチュアリティのあななしは Hornstein の方式では記述できない。というのも次のような例があるからである。

(27) Mr. Green is writing another book, but at the moment he is out playing golf.

(グリーン氏はもう一冊本を執筆中だが、今は外でゴルフをしている)

(柏野 1999: p.110)

(27)の後半部は発話時と指示時と出来事時が全て同じであり、現在形と同じパターンを取る。前半部は発話時と指示時是一緒である。しかし執筆という行為はこの段階ではしていない。大きな視点でとらえればこの発話時、指示時の周辺で行われている行為であり、現在形と同様のパターンで捉えることは可能だが、アクチュアリティという点で考えれば後半部にはあるが前半部にはないということになる。このような視点から 2. 1 の例を見てみると次のような文にアクチュアリティが無いことが分かる。

(28) a. They were getting up early that month. =(2b)

b. Why is he hitting the dog? =(3b)

c. I'm travelling a lot these days. =(3c)

d. At the time when it happened, I was travelling to New York a lot. =(4c)

e. Aunt Lucy was always turning up without warning and bringing us present.

=(4f)

- f. The professor is typing his own letters while his secretary is ill. =(7b)
- g. At that time she was having regular singing lessons. =(7c)
- h. John was nodding his head. =(14a)
- i. Downstairs, a door was banging. =(14b)

これらの文に共通していることは行為と行為の間に断続があることである。つまり、繰り返しの用法である。これらは時制という点では残りの用法と同じ特性を共有するが、アクチュアリティが無いという点では基本的な用法とは言い難い。その点で(26)のグループよりも基本的な意味に近いが、それでも進行形の基本的な意味からは離れた用法であるといっていよう。

ここで、進行形は3つのグループに分けて検討することにする。最初のグループは最も進行形の基本的意味に近いグループで、アクチュアリティがあるもの、次のグループは時制的には最初のグループと同じ特性を持つがアクチュアリティが無いもの、最後の3つ目のグループは時制的特性が異なるものである。それぞれをグループⅠ、グループⅡ、グループⅢと呼ぶことにする。便宜的にいうと、グループⅠは現在形の場合、現在行われている行為・出来事や、現在起こっている状態の変化、もしくは現在ある一時的状態を表す。過去形の場合は過去の一時点で行われていた行為や出来事、過去起こっていた状態の変化、もしくは過去のある一時的状態を表す。グループⅡは現在、もしくは過去に繰り返し行われていた行為・出来事や、習慣、もしくは複数回で行われる行為を表す。そしてグループⅢは発話時、もしくは指示時の段階でまだ発生していない出来事、つまり近未来の予定などを意味する用法である。

第3章ではグループⅠを、第4章ではグループⅡを、第5章ではグループⅢを、それぞれ扱うことにする。

第3章

グループⅠの解釈

序章、第1章では人間の認知形態に基づく語彙概念構造について考察してきた。第2章では第1章で提案された語彙概念構造の妥当性について述べるために、もっともふさわしい例と考えられる英語進行形である *be + ~ing* の解釈の多様性について概略し、Hornstein(1990)の表示とアクチュアリティに基づいて分類し、それぞれグループⅠ、グループⅡ、グループⅢと名づけた。このように分類することで、進行形の解釈の内、構造に深く依存する解釈と、状況に深く依存する解釈とが容易に区別できるようになる。第3章以降ではそれぞれのグループについて解釈を検討し、語彙意味表示の中に構造的要素と特異的要素という二つの異なる要素があることを実証していく。

3.1 グループⅠの解釈 まとめ

この章では第2章であげたグループⅠの解釈についての解釈の検討を進める。グループⅠはHornsteinの表示でその時間的表示が基本時制と同じパターンを取り、時制アクチュアリティ(actuality)があるものと定義される、従来の研究では現在形の場合、現在行われている行為・出来事や、現在起こっている状態の変化、もしくは現在ある一時的状態を表す。過去形の場合は過去の一時点で行われていた行為や出来事、過去起こっていた状態の変化、もしくは過去のある一時的状態を表すとされてきたものがこれに当たる。

従来の研究では主に記述的な用法の紹介にとどまっていたが、本論文では積極的に多義性に踏み込んで解釈していく。中にはグループⅠとグループⅡ、グループⅠとグループⅢといったようにグループの枠を飛び越えた多義性もあるが、この章では主にグループ内の多義性を扱う。第4章以降では折に触れて説明が完了した用法を交えてグループを超えた多義性も扱うことにする。

Goldsmith and Woisetschlaeger(1982)で提案された「構造的/現象的」の区別については進行形の解釈が主観的な要素を持つという点で重要な視点であると考えている。しかしグループ別の解釈という視点では、アクチュアリティのある場合はグループⅠであるという区分に代わりはない。解釈の上で補足の要素がある物についてはその都度説明することにし、本論文では解釈可能性の可否に議論を絞ることにする。このことは同様に語用論的な解釈

である *I was wondering ...*(~してくださらないでしょうか)のような「丁寧」さを表す用法にも適用される。この用法ももともとは *wonder*(~かしらと思う)の現在形が直接的すぎることから「今そう思っているわけではない」という意識から「過去」形で婉曲的に言い表し、さらに「恒久的にではなく一時的に」という意識で「進行形」を用いていると考えてよい。よって（現実とは違う可能性があるが）過去のある時点で一時的に実際生じていた感情という点ではグループ I であるとみなすことにする。

3.2 複数の意味を持ちうる進行形と単独の意味しか持たない進行形

語彙意味表示に統語実現と密接に関係する構造的要素と語彙選択制限や意味解釈と密接に関係する特異的要素があるということは、動詞の中に複数のグループ I の解釈をあらわす用法が存在することで実証できる。それらの動詞は項の取り方しだいでグループ I の解釈が可能になるもの、またその逆に項の取り方しだいではグループ I の解釈が不能になることがある。第 1 章で述べたように、構造的要素は構文に関する客観的な言語計算体系と密接に結びついている。よって、同じ構造的要素からなる事象構造鋳型を共有する動詞は構造上同じ統語操作が可能である。一方、特異的要素は主観や状況に応じて境界が変わるファジーな認知的要素である。1.2.6 で言及した使役起動交代が典型的な例だが構造上可能であっても語彙選択制限や意味の制限によって統語操作が妨げられる例は少なからず存在する。そして進行形では特にこのような例が多くみられる。具体例としてまず動詞 *hide* を見てみよう。

(1) Jack was hiding his money in his room.

- a. ジャックは自室に金を隠しているところだった。
- b. ジャックは自室に金を隠していた。

この例では動詞 *hide* は Quirk et al.(1985)の用語でいえば「活動(activities)」の解釈と「状態の進行形(state progressive)」の解釈を取りうる。ただし、この「状態の解釈」は厳密に言うところ Quirk et al.(1985)では言及されていない「結果状態」の進行形であり、今後は動詞 *live* の進行形のような「状態の進行形」と区別する意味で「結果状態の継続」と呼ぶことにする。しかし項を変えると異なる解釈が生まれることになる。

(2) The moon was hiding the sun at that moment.

- a. その瞬間は月が太陽を隠そうとしていた。
- b. その瞬間は月が太陽を隠しているところだった。

「月」は無生物なので、「活動」の解釈は成立しない。代わりに(2a)のように「変化の過程 (process)」の解釈と(2b)の「結果状態の継続」の解釈が成立する（「進行中の出来事 (goings-on)¹」もありうる）。さらに次の場合はどうだろう。

(3) Kimberly is hiding her true feelings.

(キンバリーは自分の本当の気持ちを隠している)

この場合、自分の気持ちを隠すために具体的に何か動作をしているわけではなく、「活動」の解釈は成立しない。また、「変化の過程」を表しているわけでもない。意味していることは「結果状態の継続」である。

このように複数の解釈を持ちうる動詞がある一方、次のような動詞には複数のグループ I 解釈はない。

(4) Lola is singing on the stage.

(ローラはステージで歌を歌っている)

(活動)

(5) Michael's ability is getting worse.

(マイケルの能力は悪化していつている)

(変化の過程)

また、ACT や BECOME を持たない、<ROOT>のみの状態を表す文は普通、進行形にできないが、特定の条件の下で解釈が可能な場合、グループ I の解釈は「一時的状態」を表す一通りしかない。

(6) Nancy is being kind to her brother today.

(ナンシーは、今日は(いつもと違って)弟に優しい)

(一時的状態)

¹ 理論上、「進行中の出来事」の解釈も可能で意図的に当てはめると、「他でもなく月が、太陽を隠しているところだった」となる。ただし、普通の強勢ではこの解釈は出てこないと思われる。

すでにHoshino(2007a, 2007b)で指摘している通り、グループ I の解釈の場合、進行形を持つ基本的な意味「限定的持続」と語彙概念構造の構造的要素は密接な関係を持っている。動詞句*sing*や*get worse*²の語彙概念構造は次のように単一の基本述語から成立している

(7) *sing*: [x ACT < SING >]

(8) *get worse*: [BECOME [y < GET WORSE >]]

sing には基本述語 ACT が、*get worse* には基本述語 BECOME が入っているが、他の構造的要素は含まれていない。また、述部 *be kind* の語彙概念構造は < ROOT > 要素一つしか含まない。

(9) *be kind*: [x < BE KIND >]

一方、動詞 *hide* は次のような複合的語彙概念構造を持っている。

(10) *hide*: [[x ACT < HIDE >] CAUSE [BECOME [y < HIDE >]]]

この語彙概念構造の中には意味述語 ACT と BECOME が含まれている。このため、複数の意味解釈が生み出されていると考えてよい。ACT と進行形の意味が組み合わさった場合、それはある「活動」もしくは「出来事」が「限定的持続」を持って行われていることを意味する。そして、BECOME と進行形の意味が組み合わさった場合、ある「変化」が「限定的持続」を持って起きていることを意味する。言い換えれば ACT のある語彙概念構造を持つ動詞は「活動」「進行中の出来事」の意味を持つ進行形になり、BECOME のある語彙概念構造を持つ動詞は「変化の過程」の意味を持つ進行形になりうるということになる。もう一つの「結果状態の継続」（または「一時的状態」）は「限定的持続」と < ROOT > が組み合わさっている。ただし、ここには多少複雑な要素が入ってくる。

< ROOT > は前述の通り、境界があいまいなファジー要素であり、事象の参加者の典型的選択制限や典型的プロセスや典型的な結果状態が表示されている。これらの条件は絶対的

² 動詞 *get* やその他の軽動詞 *have/take/make* などはそれ自体が語彙概念構造を持つというより述部全体として語彙概念構造を持っているとした方がよいであろう。

なものではない。文脈や参加者の種類によってその典型的プロセスや典型的結果状態には認知的・経験的に修正がかかることがある。その場合、構造の上では可能な進行形の解釈が妨げられることになる。本論文では便宜的に外項に当たる参加者に関わるプロセスの情報は ACT の後ろにある<ROOT>に、直接内項に当たる参加者に関わるプロセスの情報は BECOME の後ろにある<ROOT>に記述することにするが、定義上、どちらの<ROOT>も内容的には全く同じ内容が入っているのであって、異なる<ROOT>が設定されているわけではないことをあらかじめ断っておく。

まず、(1)の例から見てみる。<HIDE>の典型的なプロセスが「ある行為者（もしくは移動する物）が物を他の者から見えないように何か行為をする（または移動する）」であるとしよう。変項 x の *Jack* と変項 y の *his money* の関係からどのような全体的状況が浮かぶだろう。*his money* が部屋のどこかに<HIDE>の状態になるのは常識的に相当量の札束でない限り一瞬である。ある映画でベッドの裏側の一面にびっしりと札束を敷き詰めて隠す場面があったが、これほどの量でこのようなやり方をするのであれば一瞬で隠すことは不可能である。しかし、片手に収まる程度の金額であれば、普通、10 秒もあれば隠すことはできるだろう。

この判断から、ジョンの金が<HIDE>でない状態から<HIDE>の状態になる変化の過程、つまり BECOME のプロセスにかかる時間はほとんどないといってい。つまり隠れていない状態と隠れている状態の2段階である。よって、この間にはほぼ時間はゼロであるといってい。この時間ゼロという認識は進行形が持つ「限定的持続」とは矛盾する。よって変化を表す構造的要素 BECOME は結果的に進行形の持つ「限定的持続」と結びつくことはできず、構造上は可能な「変化の過程」の解釈ができなくなるのである。一方、外項を占める *John* を思い浮かべると、隠す場所を部屋中に探してあれこれ試している過程も浮かんでくる。この行為は容易に「限定的持続」と結びつけることはできる。つまり外項である *John* がとる行動、すなわち ACT のプロセスは進行形の「限定的持続」の意味と矛盾しないのである。これにより ACT は限定的持続と結びついて「活動」の解釈が可能になるのである。

一方、(2)の場合はどうだろう。<HIDE>と *The moon and the sun* の関係を見てみよう。言うまでもなくこれは日食の状況である。日食という現象がどういうものか話者と聞き手の間に共通認識があれば、*the sun* が一<HIDE>から<HIDE>の状態になる過程に時間がかかることがわかるだろう。よってこの「変化の過程」を描写する用法は容認されることにな

る。一方、ACTの項の*The moon*を考えると話者の間には当然、日食は「太陽と地球を結ぶ一直線上に月の軌道が重なることで太陽の光を隠す」ものであるという事実が常識的に共有されている。この段階ですでに月は旧情報であり、話題になることではないため、普通の強勢で発音した場合、「進行中の出来事」の解釈にはならない。また、無生物主語でもあるので「活動」の解釈もできないことになる³。

(3)の例も同様に説明ができる。*her true feeling* が<HIDE>な状態になるために何か特定の活動を行う様子は想像しがたい。本当の気持ちを隠すことは人間の精神的、内面的な活動であり、表立ってなにか行動をすることは稀だからである。もちろん、話者と聞き手の共通理解として、「キンバリーは必ず本心と裏腹なことをする」といった情報があれば、「ああ、今やっていることの反対が彼女の本当の気持ちなのだ」というように「活動」の解釈も可能かもしれない。また *her true feeling* が<HIDE>になるまでのプロセスが段階を追って変化していく様子もあまり考えられないので「変化の過程」の解釈も普通はあり得ない。普通は本性を明かさないと決めたら一気に全部隠すであろう。しかし、「虐待を受けている子供が徐々に本心を言わなくなっている様子」が共通理解としてあるならばこの解釈ができないこともないかもしれない。

ここまであげてきたことを整理してみよう。動詞句 *sing* や *get worse* のような基本述語を一つしか持たない動詞句は進行形のグループ I の解釈を一つしか持たない。一方、*hide* のような複合語彙概念構造を持つ動詞句は複数のグループ I の解釈を持ちうる。つまり、グループ I の解釈の最大数は事象構造によって決定されているのである。具体的には ACT と結びつく用法と、BECOME と結びつく用法、そして詳細は後述するが<ROOT>と結びつく用法の3つである。

ACT と結びつく用法は Quirk et al.(1985)の分類では「活動」や「進行中の出来事」、それに他動詞用法の「達成(accomplishment)」がほぼ対応する。「達成」の場合は主語項の「活動」がその対象になる。*The sun is ripening our tomatoes nicely.*のような他動詞用法の「変化の過程」の場合、おそらく主語項 *The sun* と目的語項 *our tomatoes* ではおそらく後者がトピックの場合が普通であろう。この場合は ACT ではなく BECOME と結びついていると考えたい。

BECOME と結びつく用法は、自動詞用法の「変化の過程」と「達成」が対応する。「達

³ SF 小説やパニック小説で *Something was hiding the sun at that moment.* とある場合は「進行中の出来事」の解釈もありうると思われる。それは共有されている情報がなく、*Something* が新情報であるためである。

成の場合は目的語項の「変化の過程」が対象になる。また、他動詞用法の「変化の過程」の場合はおそらく多くの場合、目的語の「変化の過程」が対象となるだろう。

そして<*ROOT*>と結びつく用法は「状態の進行形」またはこの節で導入した「結果状態の持続」が対応する。

その一方で、構造的には可能であっても意味的には解釈不能の用法も存在する。それは<*ROOT*>に含まれる情報や<*ROOT*>と選択された項の間の意味関係上もたらされる情報によりグループ I の解釈が妨げられているのである。この情報については場面や常識・知識などの認知的要素が影響するので、個人差や集団の間の差が生じる可能性が高い部分である。しかし、基準が全くないわけではなく、判断の基準となる意味的な要素は少なからず存在している。次節ではそのグループ I の解釈を妨げる共通素性について探ることにする。

3.3 グループ I の解釈を妨げる共通素性「瞬間(punctual)」

前節ではある動詞が取りうる進行形のグループ I 解釈の最大数は語彙概念構造によって決まり、その解釈を取れるかどうかは<*ROOT*>の情報に従うと提案した。実際、どのような場合に進行形グループ I の解釈が妨げられるか実例を見てみよう。まず、語彙概念構造中に ACT のみを持つ構造の例を見る。

- (11) a. #He is belching now.
(彼は今、繰り返し吐いている)
- b. #He is spitting now.
(彼は今、繰り返しつばを吐いている)
- c. #Lightning is flashing.
(稲妻が繰り返し光っている)
- d. #The door is banging.
(ドアが何度もバンバンと音を立てている)
- e. #He is kicking the can.
(彼は何度も缶を蹴っている)
- (Hoshino 2007b: pp. 102-3)

これらの文はすべて主語項が外項の自動詞で、ACT のみを構造的要素として持つ動詞で

ある。しかし、どれも共通して「活動」の解釈ではなく「繰り返し」の解釈になっている。一回一回の行為の間隔に比較的長い間があるなら、それはアクチュアリティがないことになり、厳密にはグループ I ではなく、グループ II の解釈である。これらの動詞の示す事象が持続する時間は通例、極めて短いと認識されている。このような動詞のグループは *semelfactives* と呼ばれている (Engelberg 2000, Smith 1991)。これらの動詞はほぼ瞬間的に完了する動詞で、かつ繰り返しの解釈をすることで不完了 (*atelic*) になるという特性がある。そこで、この章ではグループ I の解釈が可能である他の語彙概念構造と区別するために、以下のように <ROOT> に「瞬間的である」という情報を示す (*punctual*) という素性記号を添えて表示することにしよう。

- (12) a. *belch*: [x ACT < *BELCH*_(punctual) >]
 b. *spit*: [x ACT < *SPIT*_(punctual) >]
 c. *flash*: [x ACT < *FLASH*_(punctual) >]
 d. *bang*: [x ACT < *BANG*_(punctual) >]
 e. *kick*: [x ACT < *KICK*_(punctual) > y]

これらの動詞は「瞬間」的に行われるという情報がグループ I の解釈を妨げている。ACT を持つ構造は構造の上では、「活動」もしくは「進行中の出来事」の解釈が可能であるので、文脈等でこの (*punctual*) の素性が相殺される場合は「活動」「進行中の出来事」の解釈が許されることがある。例えば一瞬をとらえた写真の中ではその「瞬間」は固定されているので (*punctual*) は意味を成さない。よって次のような文はグループ I の解釈が許されることになる。

- (13) a. In this photograph he is belching.
 (この写真の中では彼は吐いているところだ)
 b. In this photograph he is spitting.
 (この写真の中では彼はつばを吐いているところだ)
 c. In this photograph the lightning is flashing.
 (この写真の中では稲妻が光っているところだ)

- d. ?In this photograph the door is banging.
(この写真の中ではドアがバン、と音を立てているところだ)
- e. In this photograph he is kicking the can.
(この写真の中では彼は缶を蹴っている)

(13d)については動詞 *bang* は「バンと音を立てている」ことが写真で伝えられるか、という疑問はあるが、不可能とはいえない。

では BECOME の場合はどうであろうか。Vendler(1967), Dowty(1979)の分析に従えば到達動詞の進行形はグループ I の解釈を持たない。そして、到達動詞の特徴は時間的終点を持ち、瞬間で終わる事象を表すことである。すなわち基本述語 BECOME で表すことができ、かつ(punctual)の素性を持っている動詞であるといつてよい。実際に表示してみると次のようになることであろう。

(14) Vendler/Dowty の到達動詞の典型的事象構造類型

[BECOME [x <ROOT_(punctual)>]]

ただし、この(punctual)は結果状態が「瞬間」というのではなく、あくまでBECOMEと組み合わせられたときにその変化の過程が「瞬間」とであるという情報である⁴。この(punctual)も何らかの理由で相殺される場合、グループ I の解釈「変化の過程」が可能となる。

- (15) a. #The bomb is exploding.
(爆弾が爆発しようとしている/*爆弾が爆発しているところだ)
- b. The supernova is exploding.
(超新星が爆発している)

動詞*explode*は[BECOME [x <EXPLODE_(punctual)>]] であらわすことができる。よって通常は(15a)のように進行形はグループ I の解釈はない。しかし、項が*The supernova*のように

⁴ Beavers(2008)では状態の非段階性(non-gradability)と瞬間性(punctuality)との相関関係を指摘しているので、表示としては(non-gradable)と表示することも可能である。つまり、結果状態が non-gradable であるならば自動的に BECOME は punctual であると判断されるわけである。本論文では ROOT 内にある状態に関する素性もいくつか指摘するが、その中に non-gradable の素性も含まれている。Non-gradable と punctual の二つの素性を併記することは余剰であるが、本論文では理論を明示するためにあえて punctual の素性を用いることにする。

動詞*cool*などの変化を表す自動詞は「 $\langle COOL \rangle \rightarrow \langle COOL \rangle$ 」で表示でき、BECOMEで表すことができる動詞であると考えられるが⁵、その他の多くのBECOME型の動詞とことなり、その変化は「瞬間」的ではない。これらの動詞については[BECOME [x $\langle ROOT \rangle$]]のように(punctual)の素性がない事象構造鋳型が用いられることになる。(punctual)がないので、BECOMEと進行形のもつ「限定的持続」の複合は妨げられず、結果として「変化の過程」の解釈が可能となる。事実、以下にあげる動詞*grow/turn/decay*の進行形はどれも「変化の過程」の解釈である。

- 一方、これらの動詞についても<*ROOT*>の情報と項の情報が組み合わさることによって (punctual)と解釈されることもありうる。

- 我々は常識として赤信号は点灯しているか消灯しているかの2段階しかないと知っている。そして赤信号はその赤さの度合いが一つしかないことを知っている。中間の段階がない変化は持続時間がない。つまり瞬間の変化である。そのため、構造上はグループⅠの解釈は可能であっても、実際の解釈としては「だんだん赤くなっていく」は認められないのである。

⁵ 第一章でも言及したが時間終点は文脈で左右される。

ACT と BECOME の双方を持ち、構造的には「活動」「進行中の出来事」「変化の過程」の解釈を持ちうる。しかしこれまで述べてきたのと同様に、＜ROOT＞の部分に(punctual)の要素が認められるときにはその解釈が妨げられるのである。

ACT、BECOME の双方の解釈が妨げられる動詞としては *smash* が挙げられる。

(18) #Otto is smashing the mirror.

- a. オットーは鏡を砕き割ろうとしている。
- b. *オットーが鏡を砕き割っているところだ。
- c. *オットーのせいで鏡が砕き割れているところだ。

動詞*smash*から連想される「動作主」の動きの様態は「ハンマーなどの道具を素早く動かす」ことである。またその「変化」は「一瞬の内に粉々に」なることである。よって*smash*の語彙概念構造は次のようなものになるはずである。

(19) [x ACT＜SMASH_(punctual)＞] CAUSE [BECOME [y <SMASH_(punctual)>]]

この *smash* の場合も前述のとおり、*In this picture* という文脈では(punctual)の素性が相殺され、グループ I の解釈が可能になることもある。

前節であげた動詞 *hide* は項によって様々に変化する。選択した項により、話者、聞き手の常識の範囲内でどれが *punctual* でどれがそうでないのかの判断がなされることになる。

最後に第1章で取り上げた *frighten* 型の心理動詞について考えてみることにする。本論文は Grimshaw(1990)の分析に従い *frighten* 型の心理動詞は達成動詞＝語彙的使役動詞の一つとして考えている。同様の立場をとる丸田(1998)は使役主の位置にあたる項をとる基本述語に AFF を用いているが、本論文では基本述語は統語的關係を表す構造的要素として扱っており、丸田のように項の取る主題役割に応じた別の基本述語を用いるアプローチは取っていない。この基本述語を増やすアプローチの代わりに、本論では＜ROOT＞の参加者の選択条件に制限がかかることになる。

frighten 型の心理動詞の場合、その主語は多くの場合、単に心理変化のきっかけに過ぎない。よってたとえ有生主語を取ったとしてもその主語が何か直接的にその心理変化をもたらす行動をとっていない場合がある。

(20) Elephants terrify John.

(ジョンはゾウが怖い)

(丸田 1998: p.29)

主語 *Elephants* は有生であるが、決してジョンに対して何か行動を起こしているわけではない。ただその大きさや姿がジョンの心理変化のきっかけになっているだけである。Pesetsky(1995)は *frighten* 型の動詞の主語に、何か動作を引き起こす動作主項(Agent)でもなければ、従来 *frighten* 型心理動詞の主語に設定されていた主題項(Theme)でもない、起動主項(Causer)という主題役割を与えている。一般的に *frighten* 型の心理動詞は進行形にしないことが多いが、まず、ACT に関わる「活動」や「進行中の出来事」が成立しない理由としては「瞬間」の有無とは別にこの特殊な意味選択制限が関わっていると考えられる。前節の *The moon was hiding the sun at that moment* や *Kimberly is hiding her true feelings* の場合と同様、意味的に不自然であると考えられるのである。＜ROOT＞の中にはこのように主語の選択制限に関わる素性もいくつか存在しているように思われる。有生主語のみ許可するのか無生物主語も許可するのかといったことも重要な素性であろう。ただそれらの素性はアスペクトからのみ説明できるものとは思えないのでこの論文で詳細について検討はしないことにする。ただ、この場で言えることは、(punctual)以外にも結果的に進行形のグループ I の解釈を妨げるものもあるかもしれないということである。

また、心理状態は事例に示すように一見すると段階があるように思える。

(21) a. I was a little surprised.

(ちょっとびっくりした)

b. I was very surprised.

(すごくびっくりした)

c. This is more surprising than that.

(こっちのほうがあれよりびっくりです)

しかし、その変化は通例、その全て段階を通過して変化するわけではなく、その状態になる前となった後の2段階のみが対象になる。つまり非段階的变化である⁶。実際、段階的な

⁶ 検索サイト Google を用いて “gradually +(frighten 型の心理動詞-ing 形)” を検索してみると軒並み 3 桁以下の検索結果になった。たとえ 3 桁あっても *gradually* の後にコンマやピリオドがついて区切られているものがほとんどであり、実質上 *frighten* 型の心理動詞が「変化の過程」の意味を表すことは困難であると考えてよいだろう。

心理変化を表す場合は動詞*become*, *get*などを用いて分析的にあらわす。非段階的変化はすなわち瞬間的な変化であるので「変化の過程」の解釈はこの(punctual)素性によって阻止されていると考えられる。

ここまでをもう一度簡潔にまとめてみると、ある動詞が取りうるグループ I の解釈の種類の最大数は語彙概念構造で決まり、その可能の解釈を妨げるのは主に<*ROOT*>に含まれる相的な要素、「瞬間」(punctual)ということになる。この「瞬間」は進行形の基本的意味である「限定的持続」とは意味内容的に矛盾しているのでそのままでは共存できない関係であることは明らかである。

3.4 状態を表す<*ROOT*>の相的特徴

ここまで基本述語 ACT と BECOME に絞って説明をしてきたが、ここからはもう一つのグループ I の解釈である「一時的状態」と「結果状態の持続」について話を進めたいと思う。議論に入る前に状態を表す動詞の分類についていくつか確認してみたい。

3.4.1 Quirk et al(1985)の分析

基本的に状態動詞は進行形にできないといわれている。Quirk et al.(1985)では状態動詞(Stative)を性質(qualities)、状態(states)、位置・姿勢(stances)の3つに分けて説明を試みている。Quirk らによれば、「性質」の状態動詞(述部)は「恒久的かつ譲渡不能(permanent and inalienable)」特性をいい、進行形とは共起できない。

- (22) a. Mary is Canadian.
(メアリーはカナダ人だ)
- b. *Mary is being a Canadian.
(*メアリーは一時的にカナダ人だ)
- (23) a. Mary has blue eyes.
(メアリーは青い目をしている⁷)

⁷ 日本語ではこのような形の「テイル形」が存在している。畠山・本田・田中(2008)はこのテイル形を「上戸彩はきれいな目をしている」構文と名づけ、アスペクトを表しているというよりも英語の同属目的語構文同様、「きれいな」のような修飾語句がなければ意味を成さない特殊な例であるとしている。この用法については語用論的な側面が強いので本論文では深入りしないことにする

- b. *Mary is having blue eyes.

(*メアリーは一時的に青い目をしている)

(Quirk et al. 1985: p.200)

「状態」の状態動詞は「性質」の状態動詞よりも恒久性が薄い状態を表し、進行形の容認度は多少あがる。

- (24) a. Mary is tired.

(メアリーは疲れている)

- b. ?Mary is being tired.

(メアリーは一時的に疲れている)

- (25) a. Mary has a bad cold.

(メアリーは悪い風邪を引いている)

- b. ?Mary is having a bad cold.

(メアリーは一時的に悪い風邪を引いている) (ibid.)

「位置・姿勢」の状態動詞は「単純形で用いられた場合恒久状態を表し、進行形で用いられた場合一時的状態を表す」ことができる動詞である。

- (26) a. James lives in Copenhagen.

(ジェームズはコペンハーゲンに住んでいる)

- b. James is living in Copenhagen.

(ジェームズは一時的にコペンハーゲンに住んでいる)

(ibid: p.206)

Quirk らはさらに「状態」の状態動詞を 4 種類の「個人的状態」に分け、その中の「知覚動詞」はさらに 2 タイプに分類、加えて「*being* の状態動詞」と「*having* の状態動詞」があると細かく分類しているが、あまりに記述的かつ分類学的で本質から遠いと思われるのでここでは紹介は割愛する。ここで大事な点は「一時的状態」を表すことができる状態動詞にはなりやすさに程度があることである。

Quirk らの分析で進行形の解釈を完全に妨げているものは「性質」の状態動詞である。「性質」がもつ特質で相的な要素として定義に挙げられているものは「恒久的」という要素である。「状態」の状態動詞や「位置・姿勢」の状態動詞はその点で「恒久的」という度合いが「性質」の状態動詞よりも低いためにグループ I の解釈の容認可能性が高くなっているといえよう。

3.4.2 Carlson(1980)の分析

進行形の研究とは異なるが、状態の分析ということでは Carlson(1980)の個体レベル述語と場面レベル述語の区別が進行形以外の現象についても適用できる汎用的な分類として知られている。まずは知覚動詞を用いた報告の例を見てみよう。

- (27) a. Martha saw the policemen in the cruiser.
(マーサは警官たちがクルーザーにいるのを目にした)
- b. Martha saw the policemen drunk
(マーサは警官たちが酔っ払っているのを目にした)
- c. Martha saw the policemen naked.
(マーサは警官たちが裸でいるのを目にした)
- d. *Martha saw the policemen intelligent.
(*マーサは警官たちが知的でいるのを目にした)
- e. Martha saw the policemen run into the bar.
(マーサは警官たちがバーに駆け込むのを目にした)
- f. *Martha saw the policemen own a car.
(*ジョンは警官たちが車を所有しているのを目にした)

(Carlson 1980: 125)

知覚動詞で「～を目撃した」という報告を表す用法で使う場合、目的語に続く補語の内容によって意味解釈が可能なものと不可能なものが存在する。場所を表す前置詞句はほぼどんな場合でも可能であるが、名詞類は不可であり、形容詞句、動詞句については(b)-(f)で見られるように可能な場合と不可能な場合がある。

形容詞句、動詞句の中でこの構文で使うことの出来ない *intelligent* や *own a car* といった

述語は恒久的ないし本質的な特性を持つ語句であり、Carlson はこのタイプの述語を個体レベル述語と呼んでいる。一方、*drunk* や *naked*, *own a car* などこの構文で可能な述語は一時的もしくは非本質的な特性を持つ語句であり、このタイプの述語は場面レベル述語と呼んでいる。この区別は無冠詞複数名詞の主語を持つ構文の総称的解釈の可否にも反映される。

- (28) a. Firemen are available.
((誰であっても/何人かの)消防士は出動可能だ)
- b. Firemen are altruistic.
((誰であっても/*何人かの)消防士は人助けが第一だ)

形容詞 *available*(出動可能)は「一時的な状態」で、場面レベル述語と見なされる。場面レベル述語では、無冠詞複数の主語が来た場合、基本的には全員ではなく「ある何人かの」、という解釈が普通である。一方、形容詞 *altruistic*(人助け第一)は消防士にとって必須の条件と見なされ、本質的な特性であるので個体レベル述語と見なされる。個体レベル述語では、無冠詞複数の主語が来た場合は「消防士というものは全て」という総称的な解釈だけが許され、「ある何人かの」という解釈はできない。提示の *There* 構文でも同様のことが言える。

- (29) a. There are police available.
(警察が出動可能だ)
- b. *There are firemen altruistic.
(*消防士が人助け第一だ)

Carlson の分類は決して進行形の分析のために行われたものではないが、「恒久的」か「一時的」か、という点でくしくも Quirk らの分類と共通点があることがわかる。

ただし、注意すべきは次のような場合である。Carlson の分析では *dead* を以下のような理由から場面レベル述語に分類している。

- (30) a. John saw the President dead.
(ジョンは大統領が死んでいるのを目にした)

b. Dogs are dead.

(*どれもみな/何匹かの)イヌは死んでいる)

dead の状態は確かに一度死んでしまえば恒久的に続く状態ではあるが、大統領やイヌなどの生物にとっては本質的な情報でない。いくつかある状態のうちの一局面でしかないのである。Quirk らの分析でも「性質」の状態動詞の特性として「譲渡不能(*unalienable*)」をあげているが、このことを考えると、「譲渡不能」の特性は必ずしも Carlson の「本質的」とは同義でないことが考えられる。

とはいえ、「恒久的」か「一時的」か、という素性は進行形にとどまらず様々な現象に関係する重要な素性であることは間違いない。

3.4.3 米山・加賀(2001)の分類

米山・加賀(2001)は Carlson の分類を踏まえて、場面レベル述語をさらに二つに分けて考察している。彼らは個体レベルに相当するものを特徴記述(*character-describing*)述語と呼び、「人やものの内在的特徴を記述する(*ibid.*)」形容詞句ないし前置詞句と位置づけている。一方、場面レベルに相当するものは状態記述(*state-describing*)述語と状況記述(*situation-describing*)述語とに区別して提案している。状態記述述語は「人やものの一時的状態を記述する(*ibid.*)」形容詞ないし前置詞句と定義され、状況記述述語は「人や物を一定の状況に位置づける働きをもつ(*ibid.*)」形容詞ないし前置詞句と定義される。第1章の議論と結び付けて言い換えると、状態記述述語は対象物が「一方向の変化」をした状態であり、状況記述述語は対象物自体には変化がなく、対象物がある位置・状況へ移動した状態である、と考えてもよい。状態記述述語は対象物「内的変化」であり、状況記述述語は対象物の周辺の変化、つまり「外的変化」なのである。

Carlson の区別と大きく異なる点はこの「内的」か「外的」かの区別である。米山らの特徴記述述語(Carlson の個体レベル述語に相当)はこの点で「内的」特性である。Carlson の区別がアスペクト的に恒久的かどうかで分類しているのに対し、米山らはまず「内的」か「外的」という視点で分類し、その後で「内的」なものについて「内在的特徴」なのか「一時的状態」なのか、言い換えれば「恒久的」か否か、に分類しているわけである。

この分類を用いると、以下のように Carlson の分類では説明ができない部分も説明が可能になる。

- (31) a. *There is a man { intelligent / of considerable talent }.
 (*人が{ 知的だ / かなり才能がある })
- b. ??There is a kid { hungry / in high spirits }.
 (??ちびっ子が{ 腹ペコだ / ご機嫌だ })
- c. There is a fireman { available / in the room }.
 (消防士が{ 出動可能だ / 部屋にいる })
- (32) a. *John_i left the hospital { intelligent_i / of considerable talent_i }.
 (*ジョン_iは{ 知的に_i / かなりの才能を持って_i }退院した。)
- b. John_i left the hospital { hungry_i / in good health_i }.
 (ジョン_iは{ おなかを空かして_i / 健康な状態で_i }退院した。)
- c. *John_i left the hospital { available_i / in the bed_i }.
 (*ジョン_iは{ 出動可能で_i / 寝床で_i }退院した。)

これら二つの例ではそれぞれ(a)が特徴記述述語、(b)が状態記述述語、(c)が状態記述述語である。(31)の *there* 存在文では(31c)の状況記述述語だけが文法的で、(31b)は(31a)より若干容認可能性が高い程度である。一方(32)の描写の二次叙述(secondary depictive predication)では(32b)の状態記述述語だけが文法的である。Carlson によれば個体レベル述語はイベントを表さないので、個体レベル述語に相当する特徴記述述語の例がどちらも非文となるのは不思議ではない。だが場面レベル述語に相当する一時的な状態を表す術語の中で(32b)と(32c)のような差異が出ていることから、「内的」か「外的」か、という区分も重要な要因であることがうかがい知れる。

3.4.4 段階性と非段階性

段階性(gradability)があるかどうかも状態の区分として提案されている。Beavers(2008)の定義では「段階性とは段階の分割可能性、すなわち段階が2段階であるのか多段階であるか」である。例えば *dead* は *dead* か *not dead* かの2段階しかないが、*flat* は *flat* の度合いに段階がありうる。つまり、*dead* のような2段階しかない述部は非段階性述部であり、*flat* のような多段階を持つ述部は段階性述部となる。段階性の区別は次のように比較級を用いたテストで明らかにできる。

- (33) a. dirtier (より汚い) / wetter (より湿った)
 straighter (よりまっすぐな) / more bent (より曲がった)
 b. *deader / *more dead (より死んでる)
- (34) a. This road cuts more into the woods than the highway.
 (この道は幹線道路よりずっと森に切り込んでいる)
 b. John walked more to the river than Bill.
 (ジョンはビルより川のほうへ歩いている)
- (35) a. *Bill is more at the store than John.
 (*ビルはジョンより店にいる)
 b. *This fly is more on the wall than that one.
 (*このハエはあのハエよりも壁に張り付いている)

Beavers は非段階性述部と「瞬間性(punctuality)」を関連付けており、その点でこの段階性・非段階性の区別はアスペクトとは関係の深い特徴といってよいだろう。

ここまで Quirk et al(1985)、Carlson(1980)、米山・加賀(2001)、Beavers(2008)を引用して状態述部の特性をまとめてきた。星野(2009a)はこれを元に「恒久的(permanent)」「一時的(durative または temporal。本論文では理論の関係上、durative を採用する)」「内的(internal)」「外的(external)」「段階的(gradable)」「非段階的(non-gradable)」という相的素性を提案したが、本章ではこれらの素性を更に整理してみることにする。

本章の狙いは<ROOT>内の典型的なプロセスに関わる情報で結果状態がどのような時間的特性があるのかを明らかにすることである。星野(2009a)の段階で提案されていなかった二つのタイプの BECOME の分析に基づくと、ここにあげた「内的」「外的」の区別は前者が MEASURE 型の BECOME の変化を、後者が PATH、TERMINUS 型の BECOME の変化をそれぞれ表していることに気づくだろう。つまり内的・外的の情報は結果状態の時間的特性ではなく、BECOME の過程に関する構造的情報なのである。また、同様に「段階的」「非段階的」についても Beavers の言う通り「非段階性」が「瞬間性(punctuality)」に関係があるのだとしたら、それは結果状態の時間特性ではなく、変化のプロセスに関わる特性である。であれば星野(2009a)で指摘した素性のうち結果状態に関わる時間的素性は(permanent)と(durative)だけになる。結果状態が(punctual)というのは時間による変化が無いことを前提する状態の定義に反するので存在しない。

それではこの二つの素性がどのように結果状態の持続用法と一時的状態の用法に影響するのか次節以降で確認してみよう。

3.5 「結果状態の持続」用法と<ROOT>の相的素性

従来から言われてきたことだが、日本語のテイル形は結果状態を表すことができるという点で大きく英語と異なる。例えば、「庭でイヌが死んでいる」といった場合、「イヌが死んだ結果が今、庭に存在している」という意味内容を表す。同じ文を英語に逐語訳した *A dog is dying in the garden.* は「一匹のイヌが庭で死にかけている」という意味(本論文の分類ではグループⅢに相当する)であって、決して死んだ結果がその場にあるわけではない。

しかし、これまでも何度か取り上げたように英語の進行形でも結果状態を表すことができる例がある(星野 2009a)。

(36) He is hiding his money somewhere in this room.

(彼は自分のお金をこの部屋のどこかに隠している) (*ibid.*)

星野(2009a)はこの結果状態の持続を表す用法の可否が前節で取り扱った<ROOT>のアスペクト素性と密接な関係があることを指摘している。

日本語のテイル形では[BECOME [x <ROOT>]]の語彙概念構造を持つ動詞でもテイル形が結果状態の持続(星野 2009a では結果残存用法と読んでいる)が可能なのに対し、英語ではこの語彙概念構造を持つ動詞の進行形は結果状態の持続を表さず、「～しつつある」というグループⅢの解釈をとることになる。この点に関して Hoshino(2007a, 2007b)は、日本語では状態を表す述部となる形容詞が少ないのに対し、英語では述部となる形容詞が豊富で、かつ結果残存の意味を表す用法として完了時制が発達しているので、日本語で動詞+テイルで表される状態は形容詞を用いた用法もしくは完了形で表すと述べている。つまり、すでにそれを表すのにふさわしい用法があるために「構造上可能であっても存在しない用例的ギャップ」となっているのである。

しかし、面白いことに[x ACT<ROOT>]CAUSE [BECOME [y <ROOT>]]のような複雑な事象構造になると英語も日本語も似たような容認可能性を見せることになる。まず、<ROOT>で示される事象の結果状態が恒久的(permanent)に続く例を見てみよう。

- (37) a. John is smashing the mirror.
 (ジョンが鏡を粉々にしようとしている)
 (*ジョンが鏡を粉々にして、目の前に破片がある)
- b. ジョンが鏡を粉々にしている
 (ジョンが鏡を粉々にしようとしている)
 (*ジョンが鏡を粉々にして、目の前に破片がある)
- (38) a. John is killing a monster.
 (ジョンが怪物を殺そうとしている)
 (*ジョンが怪物を殺し、目の前に死体がある)
- b. ジョンが怪物を殺している。
 (ジョンが怪物を殺そうとしている)
 (*ジョンが怪物を殺して目の前に死体がある)
- (39) a. Jong Il is launching a “satellite.”
 (ジョンイルが「人工衛星」を打ち上げようとしている)
 (*ジョンイルが「人工衛星」を打ち上げて、今飛んでいる)
- b. ジョンイルが「人工衛星」を打ち上げている。
 (?ジョンイルが「人工衛星」を打ち上げようとしている)
 (?ジョンイルが「人工衛星」を打ち上げて、今飛んでいる)

ちなみに(38b)は「ジョンは以前に怪物を殺した経験がある⁸」という意味になるが、英語ではこのような解釈はない。

英語動詞 *smash* と日本語動詞「粉々にする」の結果状態は「粉々に砕かれた状態」だが、それは典型的には恒久的状態であって、一時的状態ではない。また、英語動詞 *kill* と日本語動詞「殺す」の結果状態は「死んでいる状態」だが、これも同じく典型的には恒久的状態であって一時的状態ではない。英語動詞 *launch* と日本語動詞「打ち上げる」の結果状態は「推力によって打ち上げ場所から上方に向かって離れた状態」であるが、これも典型的には恒久的状態であって、一時的状態ではない。(permanent)の素性を含む語彙概念構造で

⁸ このような意味解釈は日本語ではパーフェクト相(工藤 1995)と呼ばれ、「後継時点における、それ以前に成立した運動の効力の現存(ibid: 39)」と定義されている。それ以前は「経験・記録」用法と呼ばれることが多かった用法であるが(藤井 1966 など)、工藤の明快な定義により混同されやすい「結果状態の継続」用法と区別がつけやすくなっている。庵(2001)ではパーフェクト相内の細かな差異を表すためにあえて「効力持続」、「記録」、「完了」「反事実」に下位分類しているが、この例の場合は「記録」用法にあたる。

表示すると以下ようになる。

- (40) *smash*: [x ACT<SMASH>] CAUSE [BECOME [y <SMASH_(permanent)>]]]
kill: [x ACT<KILL>] CAUSE [BECOME [y <KILL_(permanent)>]]]
launch: [x ACT<LAUNCH>] CAUSE [BECOME [y <LAUNCH_(permanent)>]]]

英語の場合、結果状態が恒久的である場合、結果状態の持続と解釈をすることはできない。これは進行形が持つ基本的な意味「限定的持続」と<ROOT>に含まれる典型的なアスペクト素性(permanent)とが齟齬を起こしているためであると考えてよいだろう。(permanent)な結果状態というのはすなわち不可逆な変化を意味する。しかしこの<ROOT>内の時間的素性はあくまで主観的・認知的なものであるため、例えば次のような場合は(permanent)の素性が相殺されて結果状態の持続の解釈がありうることになる。

- (41) The endorphins are killing the pain during the times of intensity.

(集中状態にあるあいだは脳内物質エンドルフィンが痛みを抑えている)

目的語の *the pain* は実際に死ぬわけではなく、無くなった状態を指すだけでやがて集中状態が無くなれば痛みは元に戻る。この文では結果状態の(permanent)は相殺されていることになる。

(permanent)以外の要因としてあげられるのは「内的」な変化か「外的」な変化か、の違いである。星野(2009a)では(internal)(external)の素性を用いて説明していたが、それらは動詞の<ROOT>が持つ典型的結果状態を表す素性ではない。むしろこれは項の変化の様子を示しているのであって、BECOME のタイプを表す構造的要素であるといつてよい。その意味では上述の *smash* と *kill* は MEASURE 項を変更として取るタイプであり、*launch* は PATH、TERMINUS のタイプである。このことから典型的な結果状態が(permanent)である動詞は MEASURE 型、PATH・TERMINUS 型ともに結果状態の持続用法にならないことが予測される。それでは(permanent)でないものはどうであろうか。MEASURE 型の動詞について見てみよう。この用法の背景にありうる普遍性を見る意味で、対応する日本語も併記しておく。

- (42) a. I am drying my shirt.
 (私がシャツを乾かしている途中だ)
 (*私がシャツを乾かして、目の前に乾いたシャツがある)
- b. 私はシャツを乾かしている。
 (私がシャツを乾かしている途中だ)
 (*私がシャツを乾かして、目の前に乾いたシャツがある)
- (43) a. John is boiling water.
 (ジョンがお湯を沸かしている途中だ)
 (*ジョンがお湯を沸かして、目の前にお湯がある)
- b. ジョンはお湯を沸かしている。
 (ジョンがお湯を沸かしている途中だ)
 (*ジョンがお湯を沸かして、目の前にお湯がある)

英語動詞*dry*と日本語動詞「乾かす」は一<*DRY*>→<*DRY*>と考えられるので内的な変化といえる。ただし、乾いたシャツも使用すればまた濡れた状態に戻るなのでその状態は一時的である。英語動詞*boil*と日本語動詞「沸かす」も一<*BOIL*>→<*BOIL*>であり、一時的な状態である⁹。どちらもBECOMEの項は状態が変化しており、MEASURE項であるといえる。しかし、英語、日本語ともに結果状態の持続の意味にはなっていない¹⁰。もちろん、(41)のような文が許されるのであるから、全てのMEASURE項が不可というわけではないが、どうやらMEASURE項を取るタイプは結果状態の持続用法にはなりにくいようである。では、PATH、TERMINUSを取るタイプを見てみよう。

- (44) a. John is hiding his money in his room.
 (ジョンは部屋にお金を隠しているところだ)
 (ジョンは部屋にお金を隠し、今も部屋のどこかにある)

⁹ ただし、英語の場合、目的語が変化の対象である *water* で、日本語の場合、目的語が結果状態を表す「お湯」という点では異なっている。

¹⁰ この文もパーフェクト相で解釈することは可能である。特に「もう」という副詞が用いられるとわかりやすくなる。

- b. ジョンは部屋に金を隠している。
 (ジョンは部屋にお金を隠しているところだ)
 (ジョンは部屋にお金を隠し、今も部屋のどこかにある)
- (45) a. The government is isolating the infected.
 (政府は感染患者たちを隔離しているところだ)
 (政府は感染患者たちを隔離して、患者たち今も隔離されたままだ)
- b. 政府は感染患者たちを隔離している。
 (政府は感染患者たちを隔離しているところだ)
 (政府は感染患者たちを隔離して、患者たち今も隔離されたままだ)

英語動詞 *hide* と日本語動詞「隠す」が表す事象では、BECOME の項が示す事物には内的な変化はなく、単に位置が見えない場所へ移動するだけである。英語動詞 *isolate* と日本語動詞「隔離する」も同じく BECOME の項が示す事物は「他の者たちと異なる場所」へ移動するだけである。隔離された対象者は隔離前と隔離後でなんら内的な変化はない。しかしどちらの行為も永続的ではなく、随時元に戻せる一時的なものである。このような PATH・TERMINUS 型の場合、MEASURE 型とは反対に英語も日本語も結果状態の持続の意味を持つことがわかる。

結果状態の持続が(permanent)で使えない理由は(permanent)の概念が進行形の基本的意味である「限定的持続(durative)」と矛盾するからであるなら、(permanent)でないこれらに差があるのはなぜだろう。

MEASURE 型と PATH・TERMINUS 型の BECOME の大きく異なる点は、BECOME 型が項の事物が実際に変化しているのに対し、PATH・TERMINUS 型は項の事物自体には変化がないことである。BECOME の定義上、基本述語 BECOME を含む動詞の表す事象は一<ROOT>→<ROOT>への変化である。つまり、一時的な変化を表すならどこかで変化した項に<ROOT>→一<ROOT>の逆変化が起こらなければならない。一方 PATH・TERMINUS 型の変化の場合、実体の変化がないので、そのような制約がかからないことになる。つまり位置・状況を変えるだけで元の状態に戻る可能性があるのである。そのため全体的な傾向として PATH・TERMINUS 型の方が MEASURE 型よりも結果状態の持続になりやすいということになる。もちろん、一時的に変化してもすぐに元に戻ってしまうような場合は MEASURE 型でも十分一時的状態になりうる。

- (46) Hurry up! Get out of here while my magic is neutralizing the evil.

(急げ。私の魔法が悪を中和しているうちにここ逃げるんだ)

星野(2009a)で「段階的」と「非段階的」の区別としていたものについても修正をする必要がある。星野(2009a)では PATH・TERMINUS 型であっても差がある例として次のような例を用いている。

- (47) a. John is putting the vase on the desk.

(ジョンは机の上に花瓶を置こうとしている)

(ジョンは机の上に花瓶を置いて、今実際に置いてある)

- (48) a. John is sending the letter to Mary.

(ジョンが手紙をメアリーに送ろうとしている)

(ジョンが送った手紙がメアリーのところへ向かっている)

(*ジョンが手紙をメアリーに送って、今メアリーの手元にある)

Beavers(2008)によれば終点を表す前置詞 *on* は非段階的、*to* は段階的である。言い換えれば *on* の場合、置かれたか置かれていないかの2段階しかなく、*to* の場合はメアリーの手元に届くまでに経過があるということになる。この事実を元に非段階的な述部は結果状態の持続の用法にならないというのが結論であった。Beavers の主張では非段階的は瞬間性(punctual)と、段階的は持続性(durative)とそれぞれ結びつきが強いとしているが、この瞬間性や持続性は<ROOT>内の情報としてある典型的なプロセスとして考えれば活動のプロセスや変化のプロセスに関わる情報であって、結果状態に関わる情報ではない。つまり、非段階的な語句がある事象構造は BECOME のプロセスが(punctual)なのであって、結果状態が(non-gradable)とする必要はない。また、段階的な語句がある事象構造は BECOME のプロセスに(punctual)が無いこと(Beavers に従えば durative であること)を意味しているのであって、結果状態が(gradable)とする必要はない。(47)の場合、BECOME のプロセスに(punctual)があるとすれば、進行形の持つ「限定的持続」の意味は BECOME と結びつくことができないので「変化の過程」の解釈は取りえないが、(48)では BECOME のプロセスに(punctual)が入らないために「変化の過程」の解釈が発生しうるのである。(48)が結果状態の持続の意味にならない理由はおそらく、*send* ~*to* の場合、<ROOT>の典型的プロセス

で強調されるのは *to* で表される「過程」であり、結果状態が焦点化されないためであって <*ROOT*> の結果状態の相的な特性が問題ではないと思われる。

ここでこれまでの議論を整理してみたい。「結果状態の持続」を表す用法は結果状態を表す <*ROOT*> の典型的プロセスにおける結果状態の部分と進行形の「限定的持続」が組み合わされた用法であり、結果状態を表す部分にこの「限定的持続」に矛盾する(permanent)な要素がある場合は阻止される。また、この用法が成立するためには結果状態が元の状態に戻る必要があるため、項が別の状態に変化する MEASURE 型の BECOME よりも項自体には状態変化がなく位置が変わるだけの PATH・TERMINUS 型の BECOME の方が結果状態の持続を表しやすい傾向にある。さらに、<*ROOT*> の典型的プロセスで変化・移動の過程が結果状態の持続用法に影響する可能性もある。PATH・TERMINUS 型の方が結果状態の持続の用法になりやすい事実は日本語のテイル形でも同様のことがいえ、英語特有の現象ではないことが予測される。次節では状態動詞の一時的状態を表す用法について同様のアプローチで検証する。3.7 では 3.3 で行った(punctual)の検証と同様にこれらの解釈を妨げる素性が構造的な要素ではなく、主観や経験などから修正を受ける特異的要素であることを実証することにする。

3.6 状態動詞の「一時的状態」を表す用法

前節で指摘したように、結果状態の持続を表す用法は動詞の <*ROOT*> が持つ典型的プロセスの中で結果状態と進行形の「限定的持続」の意味が組み合わさったものである。そしてこの合成を阻止する要素は、結果状態を表す部分の(permanent)素性であり、構造的には MEASURE 型の BECOME もその特性上この解釈を取りにくい。ではこの(permanent)な素性は普通の状態動詞の <*ROOT*> の場合でもありうるのだろうか。

第1章で定義したように状態を表す述部は[x <*ROOT*>] の語彙概念構造をとる。この語彙概念構造は状態変化を表す語彙概念構造の[BECOME [x <*ROOT*>]]や語彙的使役動詞、つまり活動を表す事象と変化を表す事象の複合である[[x ACT<*ROOT*>] CAUSE [BECOME [y <*ROOT*>]]]でも同じ形が含まれている。変化を表す事象については前節で言及したように英語においては完了形や豊富な形容詞の語彙体系のために結果状態の持続用法が意味的ギャップとなっているが、語彙的使役動詞については「外的」で「非段階的」の場合に結果状態の持続用法が可能である。であれば同じ語彙概念構造のパーツをもつ状態を表す述部の「一時的状態」の用法に関しても同じ素性が関与していることが予想

される。実際そうであるかどうか確認してみたい。

3.4.1 で言及したように、Quirk et al.(1985)では「性質」を表す状態の述部は進行形になりにくいと指摘している。

- (49) a. Mary is Canadian.
(メアリーはカナダ人だ)
- b. *Mary is being a Canadian.
(*メアリーは一時的にカナダ人だ)
- (50) a. Mary has blue eyes.
(メアリーは青い目をしている)
- b. *Mary is having blue eyes.
(*メアリーは一時的に青い目をしている)

(Quirk et al. 1985: p.200)

これらの状態は相的に見ると「恒久的」であるといっている。「恒久的」の意味素性は進行形の基本的意味「限定的持続」とは相反する意味素性であるので当然、進行形と結びつくのを妨げるといえる。このことは「結果状態の持続」用法にも当てはまる。Carlson(1980)の指摘する個体レベル述語の判定基準である「本質的」かどうか、の区分は次のような例を考えると考慮しなくてよいであろう。

- (51) a. Lana is dead.
(ラナは死んでいる)
- b. *Lana is being dead.
(*ラナは一時的に死んでいる)

形容詞 *dead* は生命にとっては本来ある状態ではないので個体レベル述語にはなっていないが、進行形という側面から見れば進行形にできない述部になる。つまり、本質的かどうかは意味の上では重要な素性であるが、相的な素性ではないということになる。以上の述部を(permanent)の素性を含めた語彙概念構造で表せば次のようなものになる。

- (52) be Canadian: [x <BE CANADIAN_(permanent)>]
 have blue eyes: [x <HAVE BLUE EYES_(permanent)>]
 be dead: [x <BE DEAD_(permanent)>]

Quirk らは「状態」を表す状態述部については事細かに下位分類しているので後述することにし、「位置・姿勢」の状態を先に見てみよう。Quirk らの説明では「位置・姿勢」の状態述語は進行形にして「一時的状態」を表しやすいことになっている。

- (53) a. James is living in Copenhagen.
 (ジェームズは一時的にコペンハーゲンに住んでいる)
 b. People were lying on the beach.
 (人々が浜辺で寝そべっていた)
 c. He is standing over there.
 (彼はあちらにたっている)

これらの述部は「恒久的」状態も「一時的」状態も表せるので、<ROOT>の情報としては(permanent)や(durative)の素性を持たないと考えてよい。よってアスペクトに関係ない事実を提示するには単純時制で、「一時的(durative)」を表すときには進行形の基本的意味に含まれる(durative)の素性でその意味を提示することになるのである。

「位置・姿勢」状態の述部の場合、permanent/durative のセット以外にももう一つ重大な特徴がある。それはどれも対象自体が変化しているわけではないことである。(53a)の *live* の場合、対象の項 *James* はどこに住んでも *James* であるし、(53b)の *people* もどこで寝そべろうが人間であることは変わらない。(53c)も同様である。つまり米山・加賀(2002)でいう状況記述述語の示す「外的」な状態であるといってい。この結論は前節で PATH・TERMINUS 型の方が「結果状態の持続」の解釈になりやすいとしたことと関連がある。「外的」な状態は可変性が高い。つまり人為的に変更しやすいと考えられるのである。恒久的なのか一時的なのか意図的に変更できうる「外的」素性があるものが permanent や durative のような固有のアスペクト素性を持たないのは当然の帰結といえる。

一番複雑なのは「状態」を表す状態述部である。3.4.1 で省いた詳細についてここで提示し、考察してみることにしよう。

(54) 「個人的(private)」状態

- a. 「知的状態(intellectual states)」 *know, believe, think, wonder, suppose, imagine, realize, understand* など。特に後ろに名詞節が目的語として続くもの

I (understand / *am understanding) that the offer has been accepted.

(この申し出が受け入れられたとわかった)

- b. 「感情・態度の状態(states of emotion or attitude)」 *intend, wish, want, like, dislike, disagree, pity* など。特に節補部が後ろに続くもの

She (likes / is liking) to entertain students.

(彼女は生徒を楽しませるのが好きだ)

- c. 「知覚状態(states of perception)」 *see, hear, feel, smell, taste* など。

主語に知覚者が来るタイプ

I (can see/*am seeing) the house.

(家が見える)

知覚されるものが主語に来るタイプ

That house (looks/*is looking) empty.

(その家は空っぽに見える)

- d. 「体の感覚の状態(states of bodily sensation)」 *hurt, ache, tickle, itch, feel cold*

My foot (hurts / is hurting).

(足が痛い)

(55) その他の *being*、*having* の状態

being の状態

The box contains a necklace. = A necklace is in the box.

(その箱にはネックレスが入っている)

*The box is containing a necklace.

having の状態

The can holds two gallons. = The can has a capacity of two gallons.

(その缶には2ガロン入る)

*The can is holding two gallons.

Quirk らはこれらの「状態」をあらわす状態述部についてそのほとんどが原則的には進行形にならないとしていることがわかる。ただし、知的状態や感情・態度の状態述語は、心理的態度を表す過去(attitudinal past)と結びつけて「一時性(temporariness)」や「暫定性(tentativeness)」が強調される場合は進行形にできるとしている。

(56) a. What were you wanting?

(何を望んでいたんだ?)

b. I was hoping you would give me some advice.

(君が僕に助言してくれることを期待してたんですよ)

心理的態度と共起するということはすなわち、この用法は純粹に相的な用法ではないということである。この件については次節でもう一度取り上げるが、この時点で言えることはこの用法については<ROOT>内の相特性とは無関係である。

ここでそれぞれの述部のタイプについて相特性を考えてみる。知的状態の動詞は *know* や *believe* のようにむしろ「恒久的」に近いものから *wonder* や *imagine* のような「一時的」のものまで含まれている。また、人間の精神に関わることであり、「内的」な状態と考えられる。位置・姿勢の動詞が「外的」であり、意志の力で可変可能なため「恒久的」「一時的」のような素性を持たないのに対し、知的状態の動詞は対象の精神状態の変化を含む「内的」状態なので、語彙意味上、相インターフェイス仮説に基づいて更なる変化を表せない、つ

まり自由に「恒久的」か「一時的」を選択できない述部である。そこでそれぞれの動詞は典型条件としての(permanent)素性または(durative)素性を持つことになる。

(57) *know*: [x < *KNOW*_(permanent) >]

(58) *wonder*: [x < *WONDER*_(durative) >]

動詞 *know* の(permanent)は前述の通り進行形の基本的な意味がもつ(durative)とは相反する素性であり進行形との共起は阻止される。また動詞 *wonder* の(durative)は進行形の基本的な意味の(durative)と同じであるので、進行形は余剰要素となり、共起できないことになる。

感情・態度の状態述部、知覚状態述部、体の感覚の状態述部についても *like* など「恒久的」と考えられるケースもあるが、ほとんどが「一時的」と考えてよい。よって知的状態の述部同様、(56)で指摘した例外を除いて進行形と共起できないことになる。「体の感覚の状態」を表す述部については進行形と共起可能だが、この件に関しては次節で考察する。

Quirkらの*being*や*having*の状態述部の分類については若干、説明しにくいものを寄せ集めたこじつけの感がある。例えば*The can holds two gallons.*(Quirk et al. 1985: p.205)の*hold*は缶の収容力について述べているだけで、中に液体が入っていない場合でも使えることからわかるように主語*the can*の特徴について記述しているものである。つまり彼らの分類ならば「性質」の状態に属すべきものである。また、*She belongs to the tennis club.*(*ibid.*).(彼女はテニスクラブに所属している)も同様に主語の所属関係を記述している述部なので「性質」にあたる。すなわちこれらは(permanent)の素性を持っている述部であるといっていよい¹¹。同様のことは*contain*や*resemble*などの例(*ibid.*)にも当てはまる。また、*We agree with you.*(我々はあなたに賛成だ)や*The water tasted bitter.*(水は苦かった)のような例文も挙げられているが、これらはそれぞれ感情・態度の状態、知覚状態に分類すべきものであろう。

この節を要約すると、次のようになる。状態を表す述部については「恒久的」「一時的」「外的」「内的」の素性が進行形の可否に関わってくる。「外的」の素性があるものについては「恒久的」「一時的」といった相的な素性を持たないものがあり、それらの述部は進行形との共起を妨げない。一方、恒久的、一時的の素性を持つ述部については進行形との共起が妨げられるということになる。この条件は変化の過程に関する相的素性の「段階的」

¹¹ *belong* については所属先が生まれ持った特質であるとは限らないので「外的」な状態であるとも考えられる。仮に外的で恒久的だとすると、米山・加賀(2001)の分類には当てはまらない可能性がある。

「非段階的」に関する条件を別にすれば「結果状態の持続」用法でも当てはまるので、一般的に状態を表す<ROOT>に共通する相素性と考えてよいだろう。

3.7 特異的要素としての相素性

3.3 で相素性(punctual)が主観的なもので、項と<ROOT>の関係によっては相殺されるケースを見てきた。ここでは相素性(permanent)などが相殺されるケースを通して、これらの素性が構造的な要素ではなく、特異的なものであることを確認する。

原則的に状態動詞は進行形と共起しないが、外的の素性を持つ<ROOT>については進行形と共起して結果状態の持続や一時的状態の意味を表すことができた。その理由として挙げられたのが、「意図的に」変更可能であるということから(permanent)素性や(durative)素性を取りえないことである。(permanent)などの素性を相殺する要因として、まずこの「意図的に」という要素から検討してみよう。

Quirk et al.(1985)や Leech(2005)で状態を表す述部が進行形と共起している例のいくつかは「意図的」要素に関連している。

- (59) a. The neighbors are being friendly.
(隣人たちは親しげな振りをしている) (Quirk et al. 1985: p.202)
- (60) a. He's being a fool.
(彼は馬鹿な振りをしている)
- b. He's being awkward.
(彼はわざと不器用にふるまっている) (Leech 2004: p.30)

Quirk らは、これらの状態述部は臨時的に動作動詞として再解釈されているためとしているが、どのような場合にこの再解釈ができるかということについては言及していない。ここで本文の主張にしたがってこれらの文を分析してみよう。ここにあげられている *be friendly*、*be a fool*、*be awkward* はどれも人の性質を表しているので、(permanent)の素性を持っていると考えられる。しかし、意図的にその振りができるという文脈があるときはこの(permanent)の素性が相殺され、結果として(external)の素性があるとき同様、(permanent)も(durative)の素性もない状態となり、進行形の持つ(durative)と共起できるのである。図示すれば以下のようなになる。

- (61) *be friendly*: [x <BE FRIENDLY_(permanent)>]
 ⇒ *be friendly* + intention: [x <BE FRIENDLY_(permanent)>]

「意図的」な要素以外の主観的な要素としては第2章でも言及した Goldsmith and Woisetschlaeger(1982)の「構造的(structural)/現象的(phenomenal)」の区別が挙げられる。従来、進行形の「持続時間」については相的に単純時制よりも短いと考えられていたが、Goldsmith らは次のような例をあげて実際の持続時間とは必ずしも関係がないことを示した。

- (62) The statue of Tom Paine now stands at the corner of Kirkland and College, but everybody expects the new Administration to move it.

(トム・ペインの像は今、カーkland通りとカレッジ通りの角に立っているが、みんな新しい行政府がそれを移転させると思っている)

- (63) The statue of Tom Paine is standing at the corner of Kirkland and College, and nobody thinks the deadlocked City Council will ever find a proper place for it.

(トム・ペインの像はカーkland通りとカレッジ通りの角に立っているが、膠着状態の市評議会ではそれにふさわしい場所は見つけれないとみんな思っている)

(Goldsmith and Woisetschlaeger 1982: p.84)

これらの例では通常解釈とは持続時間の解釈が異なる。(62)では *but* 以降で変化が差し迫っていることを示している。すなわち像が建っていると考えられる持続時間は短いと考えられるが、用いられている形は永続的な意味を持つ単純時制形である。しかし、一方で(63)は *and* 以降で変化が起きそうにないことを暗示しているが、用いられている形は一時的な意味を持つ進行形である。このことから、Goldsmith らは進行形の進行形の「持続時間」というものが厳密に相的なものだけではないと主張している。Goldsmith らの説明では単純形の(62)は「現在の像の位置が適切に指定された位置にある」ことを意味し、逆に進行形の場合(63)は「像の場所は適切な手順で決められたものではない」ことを意味しているという。つまり、「本来的そうである」という世界のあるべき姿(Goldsmiths らは構造知識と呼んでいる)に沿っている場合は、例え持続時間が短かろうが単純形で表されるのに対し、「本

来どうであるか」とは関係のない『現象』としてはここにある」場合には例え持続時間が永続的であろうが進行形を用いるというのである。

この考え方は本論文が終始言及している＜*ROOT*＞の意味内容が認知に基づくという考えと合致している。*Goldsmith* らの主張を取り入れれば(*Permanent*)の素性はそれが「本来そうである」という認識と結びついているのであり、「本来そうではない」という認識がある場合は(*permanent*)の素性が相殺されると考えてよいだろう。次にあげる例はいずれもこのように「本来はそうではない」という認識の下に容認されている例であると考えられる。

- (64) a. As the dog was being a nuisance, we shut him out.

(イヌがうるさかったので締め出した)

- b. Peter is being unusually patient with children.

(珍しいことにピーターが根気よく子供の世話をしているわ)

(柏野 1999: pp. 150-51)

いずれの例も意図的というよりも通常と違うことが強調されている。この場合は本来とは違うという状況的な意味によって(*permanent*)が相殺されているのである。

次の用法についても同様の説明ができると考えられる。

- (65) a. My foot is hurting.

(足が痛いよ)

(Quirk et al. 1985: p.203)

- b. You are looking tired this evening.

(君、今晚は疲れて見えるよ)

(ibid: p.204)

- c. I'm hoping you'll come.

(あなたが来てくれると期待しています) (ibid: p.202)

(65a)の例は「体の感覚の状態」を表す状態述部だが、短い状態を表す場合は進行形でも単純現在形でもかまわないとされている。述部の *hurt* は内的な状態で、相的な素性は(*durative*)に当たり、進行形を用いずとも一時的状態を表せるが、このタイプの述部(*hurt* / *ache* / *tickle* / *itch* / *feel cold* など)は本来望ましい状態ではないので、＜*ROOT*＞内の相的素性をあえて相殺し、進行形によって(*durative*)を強調しているのである。(65b)の例は知覚されるものが

主語の位置に来る「知覚の状態」述部の例だが、これも進行形でも単純現在形でもかまわないとしている。だが同じ動詞 *look* を使っても、知覚される現象が客観的な報告であれば普通進行形にできない。

(66) The house {looks/*is looking} empty.

(家はもぬけの殻のようだ)

このことから、(65b)は話者の意図として「本来疲れていないことが望ましいがそうではない」という情報が入っていると考えられるのである。(65c)の例は丁寧さを表す婉曲的な用法であるが、進行形を使うことで(permanent)な要求ではなく(durative)なのだということを意味する。*hope* のような「感情・態度の状態」の述部には *intend* / *wish* / *want* / *like* / *dislike* / *disagree* / *pity* など他人に対して直接要求している内容が多い。これらの意図が(permanent)であると聞き手の側には心理的圧力がかかることになる。しかし、進行形を用いることで、直接要求の意図を語用論的に軽減しているのである。

3.8 まとめ

この章ではグループ I の解釈の多義性が語彙概念構造で説明できることを示した。解釈の数は構造によって決まり、その解釈が可能かどうかは項と<ROOT>要素の関連で決まる。<ROOT>要素に含まれる相的な素性は典型条件の形で語彙登録されてはいるが、主観などの要因に左右される特異要素である。この章で提案した相的素性は(punctual) / (permanent) / (durative) である。そのうち(punctual) は ACT・BECOME と進行形が共起するのを妨げる要素である。(permanent) / (durative)は結果状態の<ROOT>と進行形が共起するのを妨げる要素である。また、MEASURE 型の BECOME と PATH・TERMINUS 型の BECOME では、変項に入る事物自体が変化するかどうか異なるため、結果状態の持続の意味の容認可能性の差に影響が出る。

第 4 章

グループⅡの解釈

この章では第 2 章で言及したグループⅡの解釈、つまり繰り返しを意味する進行形について考察する。第 3 章と同様、第 1 章で提案した語彙概念構造を用いることで構造的に可能な繰り返しの解釈とそうでないものの区別が容易につけられることが分かる。ここではおもに Hoshino(2008)の議論に沿って話を進めるが、同論文執筆後にさらに検討して分かった事実を追記してある。また同論文で用いた語彙意味計算については、本論文で展開している<ROOT>の説明に合わせる形で破棄することにする。

4.1 繰り返し解釈について

進行形に繰り返しの解釈があることは第 2 章ですでに述べた。この解釈について Quirk et al.(1985)、Leech(2004)など多くの文献では「瞬間を表す動詞(momentary verbs)」の場合にこの解釈が成り立つとしている。

- (1) a. He was nodding.
 (彼は何度もうなずいていた)
- b. He was jumping up and down.
 (彼は何度も飛び跳ねていた)
- c. Someone was firing a gun at me.
 (誰かが私目がけて発砲を繰り返していた) (Leech 2004: 24)

「瞬間を表す動詞」には *hiccough, hit, jump, knock, nod, tap, wink* などの動詞が挙げられている。しかし、「瞬間」は Vendler(1967)、Dowty(1979)の分類の「到達」動詞にも用いられている概念であり、たとえ動詞が表す事象が「瞬間」を表していてもこれらの動詞については繰り返しの解釈が成り立たない。

- (2) a. He is dying.
 (彼は死につつある/*彼は繰り返し死んでいる)

- b. The plane is landing.

(飛行機が着陸しそうだ/*飛行機が繰り返し着陸している)

その一方、「瞬間」を表していない動詞であっても期間を表す副詞句や頻度を表す副詞句を伴って繰り返しを表す場合がある。

- (3) a. I am running in the morning these days.

(この頃、朝ランニングしているんです)

- b. I am swimming for fun this summer.

(この夏は気晴らしに水泳しているんです)

- c. I am running only on Sunday.

(日曜にしかランニングしていないんですよ)

- d. She is always dancing.

(彼女はダンスばかりしている)

(3)の例では *these days* や *this summer* のような期間を表す副詞句、*on Sunday* などの周期を表す副詞、*always* などの頻度を表す副詞を伴って繰り返しの解釈が可能になっている。このことから従来言われている説明では繰り返しの解釈を説明することはできないことになる。実際、「瞬間」という概念は繰り返し用法では重要な役割を果たすのだが、「必要十分条件」というわけではない。それは次節以降で説明する。

また、繰り返し用法の中でもいくつか分類がある。

- (4) a. Downstairs, a door was banging. (Quirk et al. 1985:208)

(下の階でドアがバンバン音を立てていた)

- b. John was nodding his head. (Quirk et al. 1985:208)

(ジョンが何度もうなずいていた)

- c. I'm taking dancing lessons this winter. (Leech 2004: 32)

(私はこの冬、ダンスのレッスンを受けている)

- d. Many children are dying of malnutrition every year.

(多くの子供が毎年栄養不良で死んでいる)

次に PATH、TERMINUS 項を取るタイプの動詞を検討してみよう。これらの動詞が表す事象は主体自体に変化は無いが、その主体の移動が TERMINUS に達した時点で完了すると定義される。通例このタイプの動詞も完了が意図されるという点で MEASURE 項のタイプと同様、繰り返しの用法は認められない。

- (8) a. The plane is landing.
(飛行機が着陸しつつある/*飛行機が何度も着陸している)
- b. John is entering the building.
(ジョンが建物に入ろうとしている/*ジョンが何度も建物に入っている)

だが、MEASURE 項のタイプとは異なり、複数回を示す表現とともに用いた場合このタイプは反復の意味を持ちうる場合がある。

- (9) a. The F-14 is (taking off and) landing down again and again.
(1機のF14戦闘機が何度も(離)着陸を繰り返している)
- b. The suspect is entering (and getting out of) the bank again and again.
(容疑者が何度も繰り返して銀行に(出たり)入っている)

MEASURE 項と PATH、TERMINUS 項の違いは次節でも触れるが、項の事物に変化があるかどうかの違いは繰り返しの解釈に大きな影響を与えるようである。このような複数回を表す語句を含む表現については次節で詳しく検討することにする。

では ACT と BECOME の両方を語彙概念構造中に含む語彙的使役動詞の場合を検討してみよう。ACT の部分で反復の解釈が可能な動詞であっても語彙的使役動詞に意味を拡張すると反復の意味ができなくなる例がいくつか確認できる。

- (10) a. Someone is firing (the gun) at me.
(誰かが私目がけて何度も発砲している)
- b. #Someone is firing a bullet at me.
(誰かが私に弾丸を一発撃とうとしている/*繰り返し発砲している)

- c. Someone is firing bullets at me.

(誰かが私に弾丸を繰り返し発砲している)

動詞*fire*の語彙概念構造は[x ACT < FIRE_(punctual) >]である。また、直接目的語が*the gun*の場合も*the gun*自体は発砲後も*the gun*のままであり、変化も移動もないので同じ語彙概念構造である。しかし、射出されるものを直接目的語に取った場合、射出されるものはそれ自体の変化はないが位置が変化するので[[x ACT < FIRE_(punctual) >] CAUSE [BECOME [y < FIRE_(punctual) >]]の構造になる。この際BECOMEは位置の移動なのでPATH、TERMINUS型である。(10b)のように一発だけ撃たれる場合、非顕在のTERMINUS(この場合は砲身の外・または着弾点)に達した時点で完了するので繰り返しの解釈はできなくなる。しかし、(10c)のように複数の名詞（または不定形）を項に取った場合、測定される項であっても限定はされなくなる。つまり完了ではなくなるために再び反復の解釈が可能になっている。これはACTに関わる< ROOT >の相的素性が(punctual)である語彙的使役動詞全般に言えることのようなのである。(11)と(12)はともにMEASURE項を取る動詞だが、同様に分析できる。また(11)の*bread*は不定形の物質名詞だがこれも無冠詞複数名詞の場合と同じ扱いである。

- (11) a. #John is cutting a hole.

(ジョンが穴を{あけている/*繰り返しあけている})

- b. John is cutting bread.

(ジョンがパンを{切っている途中だ/繰り返し切っている})

- (12) a. #John is crushing a walnuts.

(ジョンがクルミを一個{割ろうとしている/*次々割っている})

- b. John is crushing walnuts.

(ジョンがクルミを次々割っている)

興味深いことに PATH、TERMINUS 項タイプの BECOME が含まれる語彙的使役動詞の場合、複数回を表す表現が入ると定型単数であってもやはり反復になる場合もある。

- (13) John is sending the same e-mail again and again.

(ジョンは同じ E メールを何度も何度も送っている)

ここでも項自体に変化が無いという事実が関係していると考えていいだろう。ここまでまとめると、反復用法の場合は本質的に項自体に変化のない[x ACT<ROOT>]の鑄型を共有する動詞(句)は構造的に可能であるといってよい。ただし、その<ROOT>には原則的に「瞬間(punctual)」の素性が入っている必要がある。語彙的使役動詞にも ACT が含まれるので構造的には反復の解釈が可能である。ただし、BECOME が事象を限定する場合には反復用法を妨げる。項の種類によって限定されない場合はその限りではない。

4.3 副詞などの表現を用いる習慣用法(habitual interpretation)

繰り返しを表す用法の中には副詞を用いたり、文脈から推測したりするなどの手段で複数の解釈を表す用法がある。本論文の主張は「構造的に可能なものについて特異要素の意味内容が制限を加える」であり、この副詞によって繰り返しの解釈、すなわち「習慣用法」を与える場合、副詞によって<ROOT>の意味成分に影響を与えているのだと推測する。(3)で示した通り、副詞を用いることでいわゆる瞬間動詞でなくとも繰り返しの解釈が生まれる。前節の結論を元に、この習慣を表す繰り返し用法における副詞と動詞の<ROOT>との関係を推論すると、動詞が本来、<ROOT>に持っていない(punctual)もしくはそれに相当する相的素性が、副詞が入ることで生じる関係であると考えられる。Hoshino(2008)では次のように期間の長さを変えた副詞句を付加することでどのくらいの長さから習慣の用法が出てくるのか考察している。(同じ行為を続ける場合、実際には完了進行を用いる場合が多いが、ここでは比較の意味であえて現在進行形を併記する)

- (14) a. He {is/has been} dancing for thirty minutes.
(彼は30分間踊り続けている) →連続
- b. He {is/has been} dancing for two hours.
(彼は1時間踊り続けている) →連続
- c. He {is/has been} dancing for thirty hours.
(彼は30時間踊り続けている) →(おそらく)連続
- d. He {is/has been} dancing for a week.
(彼は1週間踊り続けている) →(おそらく)習慣
- e. He is dancing for two month.
(彼は2カ月間踊り続けている) →習慣

(14)で示されるように、短い期間では習慣の意味になりにくいことが分かる。また、この期間の長さについても、規則的に決まっているわけではなく、常識や観察に基づく認知的なものであることは以下の例から明白である。

- (15) a. ??My grandfather is breathing these days / for three weeks.
(??祖父は{この頃/3週間}息をしている)
- b. My grandfather is breathing slowly for his health these days / for three weeks.
(祖父は{この頃/3週間}健康のためにゆっくり呼吸している)
- (16) a. ??My brother is standing these days / for three weeks.
(??兄は{この頃/3週間}立っている)
- b. My brother is standing on hands for his health these days / for three weeks.
(兄は{この頃/3週間}健康のために逆立ちしている)
- (17) a. ?It is raining these days.
(?この頃雨が降っている)

動詞 *run* のように人間の活動に関してはどのくらい長い時間実行できるかは常識的に推測できる。たいていの意図的活動は睡眠によって妨げられるのでそれを超える期間が提示されれば続けて行っている行為だとは解釈しないのが普通である。この観察は(15)をみるとはっきり分かる。(15a)のように睡眠中も無意識にできる活動は比較的長い期間とともに用いられても習慣の用法はできないが、意図を表す表現が混在する場合は容易に習慣の解釈が可能になる。また(16a)のように比較的容易な行為も同様である。おそらく(16a)の文は「兄が病気や事故などで普通立てない状況にある」といった特別な文脈が無い限りは使われることはないだろう。動詞 *rain* の進行形はグループⅡの解釈ができないが、期間を表す語句が入ってもこれは変わらない。というのも雨が降っている継続時間は誰も共通理解が無いからである。事実、3日くらいは止まらずに降り続くこともあるであろう。以上のことから次のことが結論として導き出される。習慣用法が成立するためには<*ROOT*>で示される動作が常識的に継続する時間よりも長い期間を表す副詞句がある必要がある。そしてその際はACTに関わる<*ROOT*>内に反復用法の(*punctual*)に相当する相的素性があるものとして解釈される。

では習慣用法について、他の事象構造鋳型でどうなるか確認してみよう。習慣用法も反

復用法同様繰り返しを表す用法であり、基本的な特徴は共通している。まず、相的に時間的終点を持つ BECOME 型の動詞はやはりこの解釈ができない。

- (18) a. *He is dying these days / for three days.
(*彼は{この頃/3 日間}死に続けている)
- b. *The comet is appearing these days / for three days.
(*彗星が{この頃/3 日間}あらわれ続けている)
- c. The Earth is becoming warmer these days / for centuries.
(地球は{この頃/何世紀もの間}温暖化している) ≠繰り返し
- d. His technique is improving these days / for two years.
(彼の技術は{この頃/2 年間}向上している) ≠繰り返し

ただし、移動様態に関わる動詞についてはときにこの例に当てはまらないことがある。

- (19) a. My wife is walking to her office.
(妻は職場まで{歩いているところだ/一時的に徒歩で通勤している})
- b. The ferry is crossing the channel.
(フェリーが海峡を{横断している/暫定的に海峡を往来している})

動詞 *walk*、*cross* は通常、ACT であらわされる動詞であるが、PATH 項、TERMINUS 項を追加することにより終点を持つ動詞に変化する。しかし、この例では PATH、TERMINUS があっても ACT であるかのようにふるまっている。これに関しては一見 PATH や TERMINUS のように見えても相的關係を表さない項があると考えざるを得ない。

事実、ロシア語にはこれに関する興味深い現象がある。ロシア語では移動様態動詞について定体と不定体と呼ばれる異なる形態のセットが存在する。そのどちらもある地点まで何らかの様態で移動することを表すが、定体が 1 回限りの事象を表すのに対し、不定体は繰り返し、または未完了を表す。

- (20) a. Дети идут в школу.
Children go(once) to school
(子供たちは学校へ行くところだ)
- b. Дети ходят в школу.
Children go(repeatedly) to school
(子供たちは学校へ通う)
- (21) a. Девушка бежит в парк.
The daughter run(once) to the park.
(娘は公園へ走っていく)
- b. Девушка всегда бегаёт.
The daughter always run(repeatedly)
(娘はいつも走っている)

また、英語の中でも終点にあたる語句を項に持ちながらも主に繰り返しを意味する *commute* などの移動様態動詞が存在する。これらのことから推測されるのはこれらの移動様態動詞が持つ<ROOT>は英語では多くの場合 ACT の鑄型と経路項・終点項を取るタイプの BECOME の鑄型の双方を選択できるのに対し、ロシア語では定体・不定体のそれぞれの<ROOT>がそれぞれ BECOME・ACT しか選択できないということである。

英語の移動様態動詞が ACT と BECOME の双方を取れることにはさらなる証拠がある。Talmy(1985)の言語類型によれば英語は移動の概念と様態の概念が融合する「様態融合タイプ」の言語であり、スペイン語は移動と経路が融合する「経路融合タイプ」に類別される。例えば英語では下記のように様態を表す動詞はそのまま方向を表す語句とともに移動を表すことができる。

- (22) The bottle floated to the cave.
(ビンが洞窟へ浮かんで行った)

しかし、スペイン語ではこのような表現ができず(23)、必ず様態を表す語句と移動を表す語句とを併用する(24)。

(23) *La botella floto a la cueva.

The bottle floated to the cave

(*ビンが洞窟へと浮かんだ)

(24) La botella entro a la cueva flatando.

The bottle moved-in to the cave floating

(ビンが浮かびながら洞窟へ入って行った)

各訳例が示す通り、日本語もスペイン語同様、様態動詞を移動の概念と融合する際は移動を表す語句と併用する言語である。影山・由本(1997)では「英語は（スペイン語や日本語のような）複合動詞という形態的な手段を持たない代わりに語彙概念構造における意味の合成という方策を利用する(*ibid.* p.151)」という分析をしている。

(25) y MOVE [_{Path} VIA z] + [BECOME [y BE [_{Source} NOT-AT-z]/[GOAL AT-z]]

しかし、なぜこのような分析が許されるのかということについては理論的な裏付けが薄い。一方、本論文では一貫として構造的要素が構造的な可否を表し、特異要素が意味的に制限を加えるという立場をとっている。この立場から考えれば、この現象も「英語では主体自体の変化を伴わない様態移動動詞の<ROOT>はその項がそれ自身の変化を伴わない ACT の鋳型も、同様に項自体の変化を伴わない PATH・TERMINUS の項を取る BECOME の鋳型も容認する」という一言で片づけることができる。つまりスペイン語、日本語が事象構造鋳型の選択制限が強くあるのに対し、英語はその選択制限が弱いということになる。事実、スペイン語の *flotar* も日本語「浮く」も自動詞用法しかないのに対し、英語の *float* は自動詞・他動詞両方の用法がある。この分析方法は第1章で指摘した CAUSE の分析と同様である。

(26) 英語

<FLOAT>

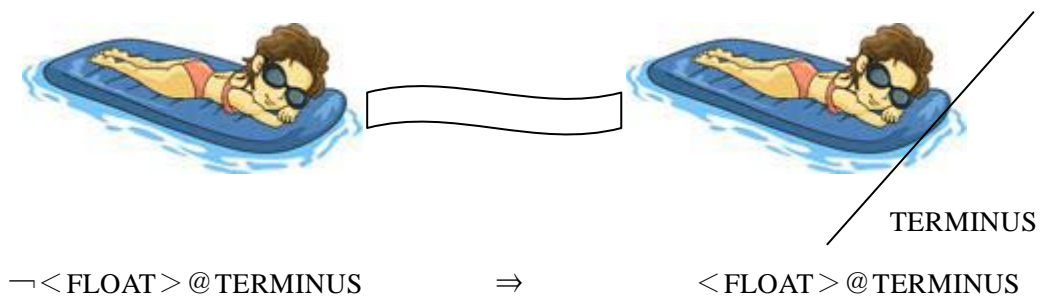


a. [浮かぶ物]

[x ACT<FLOAT>]



[BECOME [x <FLOAT> @TERMINUS]]



(27) スペイン語

<FLOTAR>

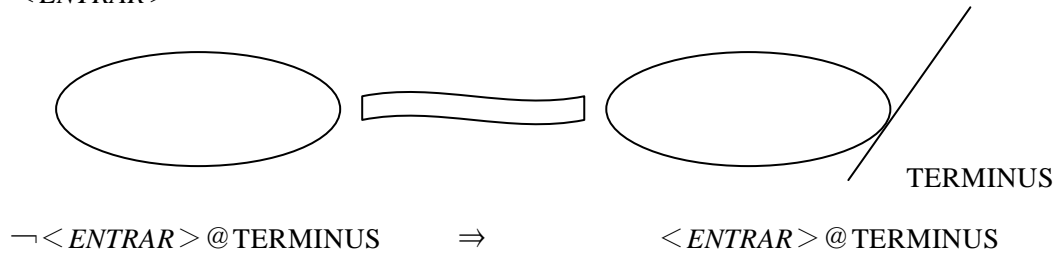


[x ACT<FLOTAR>]



(28) [BECOME [x <ENTRAR>]]

<ENTRAR>



英語の<FLOAT>は ACT の事象構造鋳型以外にも BECOME の事象構造鋳型と図は載せていないが他動詞になる語彙的使役動詞の事象構造鋳型を取ることができるのに対し、(27)の<FLOTAR>は BECOME の事象構造鋳型を取れないために、BECOME の事象を表すためには(28)のような BECOME の事象構造を取る動詞と組み合わせて使うしかない。

このように事象構造鋳型の選択制限による説明を用いると Hoshino(2008)で未解決だった *roll* 動詞の問題が解決する。

- (29) a. Bill rolled down the hill (intentionally). (willful doer)
(ビルは(自分から)丘から転げ落ちた)
- b. Bill rolled down the hill (accidentally). (non-willful doer)
(ビルは(不意に)丘から転げ落ちた)
- c. The ball rolled down the hill. (undergoer)
(ボールが丘を転げ落ちた)

(Jackendoff 1990: 127-129)

roll 動詞には有意思の主語と無意志の主語の両方が可能であることから、Jackendoff(1990)ではこの差を記述するために±vol の素性を語彙概念構造に導入している。Hoshino(2008)ではこの Jackendoff の方式を借用している。しかし、*roll* の<ROOT>は選択制限が少ないタイプで、[x ACT]型同様、[BECOME [x <ROOT>]]も選択できると考えればわざわざこのような素性を使う必要はなくなる。(29a)と(29b)とでは音声列は同一であり、文脈が無ければ区別できない。よってこの二つを区別する要因があるのは構造的要素ではなく、主観や文脈と関連する<ROOT>の中であり、<ROOT>の意味情報によって取りうる構造が選択されているのである。(29a)(29b)と同一の音声列の文が進行形になった場合は必ず有意思

の意味になるが、それはすでに数え上げ(enumeration)の段階で有意味主語を選択し、有意味主語と関連する事象構造類型[x ACT]が選択されたからに他ならない。

(30) Bill is rolling down the hill these days / for two months.

(ビルは{この頃/2ヶ月間}(自分から/??不意に)丘を繰り返し転げ落ちている)

次に語彙的使役動詞の場合を見てみよう。反復用法では項によって限定の解釈が無くなることで反復用法が容認されたが、習慣用法では方向性は同じであるが詳細は若干異なる。反復用法同様この用法も構造的には ACT が必要であり、ACT の<ROOT>内に、副詞の期間によって生じた(punctual)相当の意味が派生するときに成立するという点でも反復用法に類似している。しかし、反復用法では項の種類によって限定がされないときに語彙的使役動詞の反復用法が容認されるのに対し、習慣用法ではそれ以外でも容認される場合がある。まず、反復用法同様、項の種類による限定の可否が習慣用法の可否につながる例を見てみる。

(31) a. Jane is baking cookies these days/this winter.

(ジェーンは{この頃/この冬は}クッキーを焼いている)

b. *Jane is baking a cookie these days/this winter.

(*ジェーンは{この頃/この冬は}クッキーを一枚焼いている)

反復用法同様、BECOME の項として不定形複数を持つ場合は習慣用法が可能であるが、定形もしくは数量詞が付いている場合は習慣用法が許されないことが分かる。

動詞 *bake* では BECOME の項は MEASURE 項であるが、PATH、TERMINUS タイプでは反復動詞同様、副詞が付いていることで定形もしくは数量詞が付いていても習慣用法の解釈が可能になる場合がある。

(32) Mary is pushing her car to the supermarket these days/this winter.

(メアリーは{この頃/この冬は}スーパーまでカートを押して行っている)

反復用法と大きく異なるのは MEASURE 項タイプの BECOME の部分が表す事象が示す

持続時間がある程度長い場合である。

- (33) a. John is writing a long essay these days/this winter.
(ジョンは{この頃/この冬は}長いエッセイを書いている)
- b. John is building a big house these days/this winter.
(ジョンは{この頃/この冬は}大きな家を建てている)

(31b)のクッキーの例で考えると、クッキーが焼きあがるまでに常識的に1時間もかからない。しかもクッキーが無い状態からクッキーが出現するまでの変化は主題増減、つまり MEASURE 項の変化であり、繰り返し不可である。一方、(33a)(33b)の場合、同じようにエッセイや家が無い状態から出現までの主題増減であり繰り返し不可でありながら、完成するまでの時間が副詞で表された期間と同じもしくはそれより長いことが容易に想像できるものである。第3章で言及した<ROOT>内の相的要素が相対的なものであり主観や状況によって変化するという考え方はここでも応用される。つまり語彙的使役動詞が習慣的解釈を持つかどうかは構造上可能であればあとは<ROOT>の選択制限が許す範囲内で主観・観察などに基づく認知的判断が可否を決めるのである。

最後に次のような例について考察してみたい。

- (34) This year the magician is standing on the stage only on Monday.
(今年はその魔術師は月曜日にしかステージに立たない)

ここにあげた *on Monday* や *every day* などの周期を表す副詞句や *frequently*, *always* などの頻度を表す副詞句などが含まれる場合、やはり習慣を表す意味になる。特に頻度の副詞を伴う場合は誇張が含まれ「～してばかりいる」といういらだちやふざけて見下した気持ちが込められた表現となる (Leech 2004: p.34)。これらの表現はそれ自身に繰り返しの意味が含まれているため、期間を表す副詞だけでは習慣用法にならないものでも習慣用法の解釈が可能になる場合がある。

- (35) Mary is baking cookies (every day /?this winter).
(メアリーは(毎日/?この冬)クッキーを焼いている)

この用法についても原則的には繰り返し可能な[x ACT<ROOT>]の鋳型を含む語彙概念構造をしているものが構造的に解釈可能であることは言うまでもない。

4.4 複数発生の場合

最後に複数発生の解釈について検討するが、その前に複数と限定との関係を記述する上で必要な概念について言及しておきたい。

Tenny(1994)は「測定」と「限定(delimitedness)」との関係について次のように言及している

- (36) With incremental-theme verbs like *eat*, the spatially non-delimited quality of the measuring argument can be translated into the temporal non-delimitedness of the event.

(Tenny 1994: p.24)

(*eat* のような主題増減動詞では測定項の持つ空間的非限定性の性質が事象の時間的非限定性に転嫁されうる)

この言及を具体例で確認すると以下のようなになる。

- (37) a. Chuck ate an apple (*for an hour/ in an hour).
(チャックは{*一時間/一時間で}リンゴを一つ食べた)
- b. Chuck ate ice cream (for an hour/ *in an hour).
(チャックは{一時間/*一時間で}食べ放題のアイスを食べた)
- c. Chuck ate apples (for an hour / *in an hour).
(チャックは{一時間/*一時間で}食べ放題のリンゴを食べた) (ibid.)

(37a)では主題増減動詞の項の持つ空間的性質は「一個」を表す不定冠詞 *an* によって限定されている。その結果事象自体も時間的限定を表し、*in an hour* とのみ共起している。一方、(37b)は物質名詞であり、無冠詞で用いられた場合は限定性を持たない。よって事象も時間的限定性を表していない。また、(37c)の無冠詞複数形も同様である。

Jackendoff(1991)も同様に項の限定性と事象の限界性を結びつけた説明を試みている。Jackendoff は限定性(Jackendoff の用語は「有界性(bounded)」)を[±bounded(±b)]と内部構造

(internal structure)を表す[±internal structure(±i)]の二つの素性を想定して説明している。内部構造とは複数の同じ構造を持つ構成素によって構成されているかどうかを表しているの
で、実質、[+i]は複数、[-i]は単数と考えてよい。まず項の限定性を Jackendoff 式に記述
すると以下ようになる(一部、用語に言い換えをしてある)。

- | | | | | |
|------|----|--------|--------|----------------------|
| (38) | a. | +b, -i | 限定的単数 | (数量詞付き単数 an apple) |
| | b. | +b, +i | 限定的複数 | (数量詞付き複数 ten apples) |
| | c. | -b, -i | 非限定的単数 | (無冠詞物質名詞 water) |
| | d. | -b, +i | 非限定的複数 | (無冠詞複数 apples) |

- | | | | | |
|------|----|--------|------|---|
| (39) | a. | +b, -i | e.g. | John ate an apple.
John ran to the store. |
| | b. | +b, +i | e.g. | John ate ten apples.
The light flashed until dawn. |
| | c. | -b, -i | e.g. | John ate custard.
John slept. |
| | d. | -b, +i | e.g. | John ate apples.
The light flashed continually. |

この構成素分析は名詞については明快に区別しているが、事象に関して言えばうまく当てはまっていないところがある。例文をそれぞれ見れば、*John ate...*のような主題増減動詞の直接目的語の位置に(38)で示された構成素を持つ名詞が挿入されている場合、その事象も同じタイプの構成素を持つタイプに分類されている。これは Tenny の観察と同じである。しかし(39a)の *John ran to the store.*は *to the store* が無ければ -b, -i になるし、逆に(39c)の *John slept* は *until dawn* をつけば +b, -i になってしまう。(39b)、(39d)は *until dawn* なら +b、*continually* なら -b という点で(39a),(39c)のセットと対に見えるが、これらの副詞を用いない文、*The light flashed* では一回光が輝くだけなので +b, -i になってしまう。Jackendoff はこの説明のために概念構造に修正を加える解釈規則を設けているが、本題からそれるため詳細は割愛する。ともかく *John ate...* の例と比較すると煩瑣な処理を必要とし、理論的に好ましいとはいえない。だが、名詞句の構成素分解は明快な区分であるので、本論文では名詞

本題に戻り、複数発生について考えてみよう。複数発生は前述の通り、複数の主体がそれぞればらばらに動詞の表す事象を行うことをいう。この場合は単一の主体による繰り返しではないので、主体の変化の有無は問わない。よって反復用法、習慣用法のように ACT を含むという構造的な制約はない。事実、(4d)で上げた典型的な例文は主体の変化を含む事象である。この定義から導き出せる複数発生 の条件は「主体を表す項が複数(+i)であること」である。主体が複数であってもこの解釈ができない場合はこの解釈を妨げる意味要素がどこかにあるのである。実際の例を見てみよう

- 主体が単数の場合(40a)は当然、複数発生の意味はない。主体が複数である(40b)と(40c)は双方複数発生の解釈が可能だが、限定詞*the*のついている(40b)には「ある特定の集団の子供たちがまだ死んでいないが今にも死にそうな状況にある」というグループⅢの解釈がありうるのに対し、(40c)では文脈なしにはその解釈が成り立たちにくい¹。つまり[+b]の素性がある時は複数発生の解釈とは別の解釈を取りうる。そしてときにはその解釈が複数発生の解釈を阻止する場合もある。事実、次のような場合は複数発生の解釈が成立しにくくなる。

- 154 -

これは複数発生といっても2という少ない数字のために進行形の基本的意味「限定的持続」の持続時間を満たすのに十分でないという判断が認知的に行われているためであろう。

主体が複数の事象はなにもBECOMEの事象だけではない。ACT事象でも同様のことが言えそうである。[x ACT < *ROOT*_(punctual) >]の構造を持つ動詞は進行形にしたとき、グループ I の解釈を取らないが、この章で述べたように反復の解釈を持ちうる。また第5章で触れるがグループ III の解釈を持ちうる。それに加えて、複数を表す主語を取る場合はこの複数発生 of 解釈もありうる。

- (42) a. The kid was tripping over while evacuating. [+b, -i]
(その子供は避難中に何度も転んだ/*次々転んだ)
- b. The kids were tripping over while evacuating. [+b, +i]
(その子供たちは避難中に{何度も転んだ/次々転んだ})
- c. Kids were tripping over while evacuating. [-b, +i]
(子供たちは避難中に{何度も転んだ/次々転んだ})
- d. Two kids were tripping over while evacuating. [+b, +i]
(二人の子供が避難中に{何度も転んだ/*次々転んだ})

この場合でも BECOME と同様、[+i]の動詞のみが複数発生 of 解釈を取りうることが示されている。(42b)の場合は「他の子供たちは別だが、その子供たちだけが」という解釈がありうる。そのときは「何度も転んだ」という反復の解釈がありうる。(42c)の場合は文脈に大きく左右されるが、普通は「次々転んだ」である。(42d)は(42b)よりも明らかに反復の意味に解釈される。ここでもやはり[+b]の素性に複数発生 of 解釈を妨げる可能性があることが見て取れる。

語彙的使役動詞の場合もほぼ同様のことが言える。語彙的使役動詞は主体がACTの項になるのでここでもACTの部分[x ACT < *ROOT*_(punctual) >]になる動詞でみてみよう。BECOMEの部分限定されない場合は単なる[x ACT < *ROOT* >]と同じ扱いになるので割愛し、BECOMEの項が[+b]で限定される形で例をあげてみる。まずはMEASURE項を取るBECOMEの例である。

- (43) a. The girl is smashing her mirror. [+b, -i]
 (少女が自分の鏡を{割ろうとしている/*次々割っている})
- b. The girls are smashing their mirrors. [+b, +i]
 (その少女たちは自分たちの鏡を{割ろうとしている/次々割っている})
- c. Girls are smashing their mirrors. [-b, +i]
 (少女たちが自分たちの鏡を{割ろうとしている/次々割っている})
- d. Two girls are smashing their mirrors. [+b, +i]
 (二人の少女が自分たちの鏡を{割ろうとしている/*次々割っている})

(43d)は自分たちの鏡がたくさんあってそれを次々割るという反復の解釈はありうるが、自分が持っている鏡一枚を、という解釈はない。(43)で示された MEASURE 項の分布と同様の分布が PATH、TERMINUS 型でも見られる。

- (44) a. The boy is ripping his badge off the jacket. [+b, -i]
 (その少年はジャケットからバッジを
 {はぎ取ろうとしている/*次々はぎ取っている})
- b. The boys are ripping their badges off the jackets. [+b, +i]
 (その少年たちはジャケットからバッジを
 {はぎ取ろうとしている/次々はぎ取っている})
- c. Boys are ripping their badges off the jackets. [-b, +i]
 (少年たちはジャケットからバッジを
 {はぎ取ろうとしている/次々はぎ取っている})
- d. Two boys are ripping their badges off the jacket. [+b, +i]
 (二人の少年がジャケットからバッジを
 {はぎ取ろうとしている/*次々はぎ取っている})

ここまで、[+b]が複数発生の解釈を阻止しうることについて言及してきた。これ以外にも複数発生の解釈を阻止する要因があるかもしれないが、今回はそれについては言及しない。しかし、この複数発生の解釈が反復用法や習慣用法と異なるメカニズムで処理されていることは間違いない。

4.5 まとめ

第3章同様、グループⅡも語彙概念構造を用いて説明することができることが示された。

語彙概念構造の定義により、同一の行為者が複数回同一の行為を行う反復用法は ACT のプロセスが(punctual)な場合に適用される。ただし、PATH、TERMINUS 型の BECOME を持つ動詞については複数回を表す副詞句があればこの解釈が可能である。

一定の期間を表す副詞句を用いて一時的な習慣を表す習慣用法は反復用法同様、ACT のプロセスが認知的に(punctual)と認められた場合に適用される。具体的には副詞が示す期間の長さとその動詞の示す事象が示す期間の長さから相対的に動詞の示す事象の期間が(punctual)と認識される場合にこの解釈が可能である。

複数の対象が別個に同一の行為を行う複数発生の用法は対象が複数であることが第一前提であるが、限定の要素がその解釈を阻害することがありうる。

第5章

グループⅢの解釈

第5章ではアクチュアリティのない用法であるグループⅢの解釈と第1章で論じた語彙概念構造との関連を指摘する。グループⅢの用法は進行形の数ある意味の中でも、基本的な意味から最も離れた用法である。事実、英語以外にも進行形に相当する表現を持つ言語はいくつかあるが、まだ実現していないことを表すことはまれである。たとえば日本語の「テイル」にはこの用法はない。フランス語の半過去には未完了の意味があり、文脈によっては「もう少しで～するところだった」の意味合いを持つことがあるが、同じロマンス語に属するスペイン語の線過去の場合は別の表現で表すことが普通である。星野(2008b)ではこの特異性を踏まえて、従来言われてきた動詞の分類による説明を廃し、この用法が話者の主観に依存する用法であり、進行形の持つ「限定的持続」の意味は基本的には期待・計画・意思などの言外の成分と結びつくことを示した。つまり進行形の「限定的持続」は動詞と直接結びついていないわけではないことになる。

本章は星野(2008b)について再確認したうえで、「限定的持続」と結びつく「期待・計画・意思」などの意味成分と語彙概念構造中の構造的要素および特異要素<ROOT>との結びつきを言及し、この用法においてもグループⅠ、グループⅡの場合と同様に<ROOT>内の相的素性が意味解釈上大きく影響していることを示す。

5.1 動詞分類による説明の是非

進行形の「未来」用法にもいくつかの変種がある。Quirk et al.(1985)は未来を表す進行形として次のような二つのタイプをあげている。

- (1) a. The train is arriving at platform 4.
「列車が4番ホームに（これから）到着するところだ」
b. I'm stopping the car at this garage.
「（これから）車をガレージに止めるところだ」 (ibid. p.209)
- (2) a. The orchestra is playing a Mozart symphony after this.
「楽団はこの後でモーツアルトの交響曲を演奏する予定だ」

- b. The match is starting at 2.30 tomorrow.

「試合は明日 2 時半に開始する予定だ」

- c. I'm taking the children to the zoo on Saturday.

「土曜日に子供を動物園に連れて行く予定だ」

(*ibid.* p.215)

Quirkらによれば、(1)の進行形で表される意味は「予期的 (anticipatory)」な解釈であり、実際に目前で起こりそうな事象についての用法である。それに対し、(2)の意味は、「現在の準備、計画、プログラムから生じる未来」を表す用法と説明されている¹。この場合は事象が目前で起こる必要はない。ここでは(2)の用法を「予定的」解釈と呼ぶことにする。Quirkらによれば、*I'm leaving.*は、「(すぐに) 出発する」という予期的解釈と「出発する予定がある」という予定的解釈の両方がありうるが、*The old man is dying.*には「その老人は（目前で）死にそうだ」という予期的解釈はあるが、「その老人は死ぬ予定だ」という予定的解釈は普通ではないとある（ただし、この文は第三者の関与を含む特殊な予定的解釈を持ちえてよい。通常、予定的解釈はこのようなあいまいさを避けるために(2a-c)に含まれる *after this, tomorrow, on Saturday* のように未来を表す副詞句を含んでいる。また、予期的用法の場合は特に副詞句を含まなくてもその意味になるとされている。

では進行形のこれらの用法と動詞の意味の間にはどのような関係があるだろうか。Vendler(1967)の相的分類では到達動詞のテストの一つとして進行形が用いられるが、進行形にしたときにこの未来用法ができるものが到達動詞であるとされている。しかし、(3)に示すように、一般的に、未来のある一時点を表わす副詞をいれて予定的解釈を取る進行形を作る場合は活動動詞(3a)や達成動詞(3b)でも容易に共起する傾向がある。

- (3) a. I am running tomorrow.

「明日、走る予定です」

- b. We are building our house next month.

「来月、家を建てる予定です」

¹ 実際には語用論的に話し手や主語の「強い意志」や「命令」を表す未来用法も存在する。

i) She's taking that medicine whether she like it or not!

(嫌でも彼女はその薬を飲むことになっているのだ! =私が飲ませてやる)

この進行形は「予定」や「手配」の語用論的拡大解釈であり、本論文の趣旨では細分化した説明はしない。

この事実から未来用法でも予定的解釈に関しては動詞の分類とは直接関係しないことが予想される。

一方、到達動詞の進行形は多くが予期的解釈になるのも事実である。Quirk et al.(1985)では、非状態動詞で「完結」性があり、「瞬間」的である動詞については主語が動作主であっても非動作主であっても「推移的行為」または「推移的出来事」になるとしている(2.1 参照)。ここでいう「推移的」は「当然起こりうること」への推移であり、「近未来」への推移と同意である。Quirk らの主張を本論文の用語でいいかえれば、「完結」性は時間的終点とほぼ同義であり、BECOME で表される事象である。また「瞬間」は第4章で言及したように<ROOT>内の相素性で、BECOME の場合は頻繁に見受けられるプロセスの描写である。定義こそ違うが、Quirk らの主張は Vendler の分類とほぼ同義といっていいただろう。

だが、予期的解釈の場合でも、条件がそろっていれば到達動詞以外でもこの意味になることがある。(4)の *punt* は活動動詞であるが、実際にフットボールの試合を観戦中ならば次のように言うこともできる。

(4) Gee! That jerk is punting!

「*あーあ、あのうすら馬鹿がパント蹴っているところだ」

「あーあ、あのうすら馬鹿がパント蹴るぞ」

さらに、時間的終点があり、活動を含まない事象を表す到達動詞でも、進行形が予定的解釈にならない場合もある。

(5) The leaves are turning red.

「紅葉していく途中だ」「*もう少しで紅葉する」

Cf. The traffic light is turning red. 「もうすぐ信号が赤になる」

以上のことからわかるように、進行形の未来を表す用法の分析として、Vendler 的な動詞分類で説明することには限界があるといえよう。しかし、同様にこのことはこれまでグループⅠ、グループⅡの分析で見てきた構造的要素と進行形の意味の単純な合成では説明できないことも意味しているのである。

5.2 限定的持続はどこにあるのか

第2章で触れたようにグループⅢの用法にはアクチュアリティがない。実在していない以上、動詞の示す事象自体が「進行中」ではないことがわかる。すなわちグループⅢの用法は進行形の「限定的持続」の意味が動詞の意味自体に直接合成される用法ではなく、動詞の意味以外の意味要素と合成される用法なのである。その点で、未来用法は語彙意味論上の変種というよりは語用論的変種であるといえよう。それでは一体、動詞外のどんな意味が「限定的持続」を持っているのだろうか。前節で、未来の一時点を表す副詞句がつく場合、比較的容易に予定的解釈ができると述べたが、実際にはいくつかの制限があるのだが、実はここに鍵がある。

Leech(2004: p.62)は、進行形の表す未来は他の未来を表す用法と意味内容に差があることを指摘している。

- (6) a. I'm going to take Mary out for dinner this evening
 「メアリーを今晚、夕食に連れて行くつもりだ」
 b. I'm taking Mary for dinner this evening.
 「メアリーを今晚、夕食に連れて行くことになっている」

Leech によれば(6a)の *be going to* は「意図」を表し、(6b)の進行形は「手配された予定(arrangement)」を表しているという。進行形の予定的解釈では「人為的な手配」が必要となるため、*I'm watching TV this evening.* は「何人かのサッカーファンが集合して自分のひいきのチームの試合をテレビで見ようという計画がある」という特別な場面が設定されていない限り容認可能ではなくなる。同様に、人為的に手配できない出来事にも予定的解釈が許されないことになる。

- (7) a. John's getting up at 5 o'clock tomorrow.
 「ジョンは明日、5時に起きる予定だ」
 b. *The sun is rising at 5 o'clock tomorrow.
 「太陽は明日5時に昇る予定だ」

- (8) a. It is going to rain tomorrow.

「明日は雨になりそうだ」

- b. *It is raining tomorrow.

「明日は雨になる予定だ」

さらに、柏野(1999: pp.77-78)によれば、予定的解釈の進行形の出来事を手配するのは一般に文の主語であるが、三人称主語の場合は文の主語以外（話し手か第三者）が手配をしていることが示されるという。

- (9) a. He is dying next week. 「彼は来週、処刑される」

- b. The tickets are going on sale next week. 「切符は来週発売される」

- c. He is being met at the station tonight. 「彼を今晚、駅に迎えに行きます」

これらの事実から言えることは、進行形の未来用法は単に時間的な未来を表しているのではなく、追加の意味を持っていることである。予定的解釈の未来用法の場合は、この追加の意味は「手配された予定」であり、動詞の表す意味内容が「持続的限定」を持つのではなく、ある未来の一時点までの「手配された予定」という追加の意味が「持続的限定」を持っているのである。

予期的解釈の場合は、ある未来の出来事が起こる兆候が目前にあるかどうかが鍵となる。前述の通り大部分の到達動詞は副詞句を伴わずに予期的解釈を持つことができる。しかし、次のように時間以外を表す副詞を伴うと、予期的解釈ではなく予定的解釈になることがある。

- (10) a. The aeroplane is landing.

「飛行機が(まもなく)着陸する」

予期的解釈

- b. The aeroplane is landing at Amsterdam.

「飛行機はアムステルダムに着陸する予定だ」

予定的解釈

(Leech 2004: p.63)

同様のことが(4)の *That jerk is punting*.にもいえる。(4)の説明で、「実際にフットボールの試

合を観戦中なら」と但し書きを入れたが、もし何も背景がないならば、この文は「あのうすら馬鹿はパントを繰り返している」という繰り返しの解釈が成り立ち、「今これから蹴ろうとしている」という解釈は出てこない。これらの事実から言えることは、予期的解釈は目前に起きているものを見て、「今はまだ発生していないが、確実に発生するという予感」がある場合に使われる用法である。この場合も動詞で示されている出来事自体が「限定的持続」を持っているのではなく、この「確実に発生するという予感」が「限定的持続」を持っているといえよう。

未来用法において進行形の持つ基本的な意味が動詞自体の意味成分に直接結びついていないことは、英語の進行形と似た意味を持つ日本語の「～テイル」形ではさらにはっきりした形で観察される。日本語の「～テイル」形は英語の進行形同様、基本的には動作や変化が「持続」しているあることを表し、英語の進行形にはほぼ相当する表現といってよい。しかし、日本語の「テイル」形で未来の事象を表す場合は、動詞に直接「テイル」をつけただけでは不十分であり、必ず「～ことに～」など別の要素をはさまなければならない。

- (11) a. *私は明日、歌っている。
b. 私は明日、歌うことになっている
c. *選手が(これから)スタートしている。
d. 選手が(これから)スタートしようとしている。

未来用法の進行形は、進行形の基本の意味である「限定的持続」が動詞の意味要素に直接結びつくものではなく、「人為的に手配された予定」や「目前の出来事から感じられる予感」などの語彙以外の要素に「限定的持続」を結びつける語用論的な用法であるといえよう。

このことから、どういう場合に進行形が未来用法になるのかを説明するには、単なる動詞分類だけではうまくいかないことがわかる。未来用法で最低限必要とされるものは「持続時間」を持つ「予定」や「予感」などの動詞外の要素の有無と、未来のある一時点である。この一時点は動詞内で示されていることもあれば、副詞で表されることもある。だがこれらの動詞外の要素と未来の一時点がなければ未来用法の解釈は不可能である。既存の「到達動詞の進行形は予期的解釈を表す」という説明は、到達動詞の多くがその<ROOT>の中に「瞬間(punctual)」の相素性を持っているために一見成立しているように見えるだ

けで、実際は「予感」の要素がない場面では使用できない。到達動詞であっても所定の動詞外の要素がなければ未来用法として成立しないのである。逆に、動詞外の要素があっても *The leaves are turning red.* などは動詞内の<*ROOT*>に(punctual)の素性を持たないので仮に状況があったとしても未来用法としては成立しない。このように<*ROOT*>内に(punctual)を持たない動詞はどれも、推移的な変化を表しており、たとえ目前に兆候があったとしても未来用法としては解釈されない。

Vendler の説明では触れられていない、(4) *Gee! That jerk is punting* などの活動動詞（他には *jump, hit, hop* など）の予期的用法についても、これらの動詞が semelfactive 動詞(Engelberg 1999 他) という(punctual)の要素を<*ROOT*>に持つ動詞であることから説明ができる。

予定的解釈の場合、たいてい未来のある時間を表す副詞を含むが、その場合はその副詞が未来の一時点を示している。(10b)の *The aeroplane is landing at Amsterdam.* の場合は、未来を表す副詞句はないが、*land* という動詞が到達動詞であり、その動詞の中に(punctual)を表す一時点が存在しているので未来用法が可能になる。予定的解釈になるのは、予期的解釈に必要な「目前で起きている」という条件が当てはまらないからである。

特異要素<*ROOT*>内の相情報としての(punctual)は ACT と BECOME に関与すると提案してきた。2つの異なる要素に(punctual)が関与することは次の文の多義性からも実証できる。

(12) John is crushing the orange.

- i) 「ジョンは(これから)オレンジをつぶそうとしている」
- ii) 「ジョンがオレンジをつぶしていて、(もうすぐ)完全につぶれる」

動詞 *crush* は語彙的使役動詞であり、(17)や(20)と同様、基本述語 ACT、CAUSE、BECOME からなる語彙概念構造をしている。ではここに (punctual) の素性をつけてみよう。この動詞の<*ROOT*>である<*CRUSH*>がもつ全体としての事象のプロセスはおよそ「行為者が何かに圧力を加える動作をすることである対象がつぶれた状態になる」というものである。ACT に関係する部分では ACT の項である行為者の活動の時間的描写が問題になるが、簡単に潰れるものならば一瞬でつぶすことは可能であり、認知的にこの活動が(punctual)であることはありうる。その一方で、なかなかつぶすことができない場合はこの素性は相殺され、「今つぶす行為を行っているところ」という解釈になるはずである。一方、BECOME

に關係する部分では BECOME の項である対象が潰れた状態になるのは(punctual)な変化である。この事実を反映させて(punctual)の素性を入れて語彙概念構造を表示すると次のようになる。

(13) *crush*:

[[x ACT <CRUSH_(punctual)>] CAUSE [BECOME [y <CRUSH_(punctual)>]]]

(12i)の解釈は ACT の部分に関わる解釈で、ジョンはオレンジにまだ触れていない状況を示している。つまり、オレンジをつぶす活動に入る「瞬間」を基準として予期的解釈が働いているわけである。その一方で、オレンジが硬くてなかなか瞬間でつぶれないような状況を想定してみよう。この場合、ACT の部分の punctual は実際にオレンジをつぶす活動に費やしている持続時間によって相殺されてしまっているため、この「瞬間」を基準には出来ない。よって(12ii)のように、オレンジがつぶれる「瞬間」を表す BECOME の部分の(punctual)を基準とした解釈が成り立つことになるのである。

このように punctual の表示を含む語彙概念構造を用いると、動詞分類では説明しきれない *punt* や *jump* のような動詞も包括的に説明できるし、また、動詞分類では気づかなかった(12)のような多義性がはっきりと筋道立てて説明できることになる。また、定義の上ではっきりしない部分のある動詞分類と比べても、より精緻な表示ができることもこの語彙概念構造の長所である。

ここで簡単に理論を整理してみたい。

【進行形の近未来用法とその成立条件】

進行形の基本的な意味は「限定的持続」であり、「未来用法」は「未来のある時点」に至るまでの「予感」「予定」などが「限定的に持続」していることを示す語用論的拡大用法である。この用法が成立するには以下の条件が課される。

- ① 進行形の未来用法には「瞬間」があらわされている必要がある。
- ② 動詞句の語彙概念構造中に「瞬間(punctual)」の要素があり、かつ、目前にその兆候がある場合、副詞を伴わずに予期的用法になりうる。
- ③ 動詞句の語彙概念構造中に「瞬間」の要素があり、目前に兆候がなく、かつ人為

的な手配による予定ができる場合、予定的用法になりうる。

- ④ 動詞の語彙概念構造中に「瞬間」の要素がなくとも、人為的な手配による予定ができるものについては未来の一時点を表す副詞句を伴うことで予定的用法になりうる。

5.3 グループⅢでの(punctual)素性

これまで英語進行形の近未来を表す用法が<ROOT>内にある(punctual)の素性と関係があることを見てきた。第3章、第4章ともに<ROOT>内の素性は認知的な素性であって、状況や文脈によって本来あるべき(punctual)が相殺されたり、本来はないはずの(punctual)が認定されたりする例を提示してきたが、この章でも同様な事例を紹介する。

Hoshino(2008)では以下の問題が提起されている。動詞 *run* は<ROOT>内に(punctual)を持たないが、項の種類によって予期的用法の解釈が異なる。

- (14) a. He's *running* a marathon (φ / soon / tomorrow).
「彼が、(φ / まもなく / 明日)マラソン走るよ」
b. He's *running* to the beach (*φ / *soon / tomorrow).
「彼が (*φ / *まもなく / 明日) 海岸まで走るよ」

tomorrow は未来の時間を明示する副詞句であり、「走る」行為は人為的に準備可能であるため、(16a)(16b)ともに予定的解釈は可能である。しかし、*a marathon* と共起した場合は予期的も可能でありうるのに対し、*to the beach* と共起した場合はその解釈はない。これは動詞の<ROOT>である<RUN>が原因ではなくむしろ *a marathon* や *to the beach* が持つ意味の広がり注目すべきである。*a marathon* の持つ認知的概念として、我々はそのスタートが一斉同時であるということを知っている。そのスタートは一瞬のことであり、ここに(punctual)な要素を見出すことができる。ゴールの瞬間も瞬間であるが、ゴールに着く前に実際に走っているので、走っているときに *He's running* といった場合は実際に進行しているグループⅠの解釈が優先され、「もうすぐゴールする」という解釈はできない。どうしてもその意味にするのであれば、具体的 *He's finishing the marathon.* とすることであろう。

その一方、*to the beach* は終点のみの情報である。マラソンのような出発時の瞬間は明示されていない。また、マラソンと同様に実際に移動中はグループⅠの解釈が優先されるの

で、「もうすぐ浜辺に着く」解釈は取れない。しかし、もし習慣的に彼が定時に浜辺に向かって走り出すことを話者が知っているとしたらどうだろう。「ああ、彼ならもうすぐ例の練習を始めるよ」という文脈ならばその出発予定時は(punctual)と解釈されてこの解釈も可能になるはずである。

逆に(punctual)があると思われる動詞でもそれがキャンセルされる場合がある。柏野(1999)によれば、動詞 *stop* は普通に進行形にした際にはアクチュアリティは持たないが、*why* 疑問文で用いられる場合に限りアクチュアリティを持つとしている。

(15) Why *is* the bus *stopping* on that corner now?

「いま、どうして曲がり角にバスが止まったの？」(ibid)

stop は止まる一瞬を表しており、(punctual)の素性を持っていると考えてよい。だが(15)はアクチュアリティがあるグループ I の解釈になっている。すなわち、この二つの文では(punctual)が相殺されている。ここで気がつくのは *Why* 疑問詞である。話者は理由が分からないのであり、通常とは違うことが起きていることが分かるだろう。

Goldsmith and Woisetschlaeger(1982)の「構造的/現象的」の区別を用いれば、本来止まる場所で無い場所に止まっていることは「現象的」である。もしその場所に止まることが分かっているなら、次のように発話されるはずである。

(16) Why does the bus stop on that corner?

(どうしてこのバスはあの曲がり角に止まるのだ？(別のところに変えてくれ))

また、*Why* を用いなければ普通に予期的解釈されることになる。

(17) Is the bus stopping on that corner?

(今のあのバス、あの曲がり角に止まりますか？)

以上のようにグループ III でも <ROOT> の相的素性(punctual)は文脈や主観などの認知的要素によって左右され、進行形の解釈に影響を与えうることが示されたことになる。

終章

進行形から見える言語観

6.1 進行形の「限定的持続」

本論文では Tenny(1994)の提案した測定の考え方を演繹し、RH&L(1998)の語彙概念構造を修正した語彙概念構造を提案した。Tenny の相インターフェース仮説(AIH)は極限すればすなわち、項の統語具現とかかわりのある語彙アスペクトは測定だけであるというものである。つまり、進行相は項具現とは直接関係のない意味要素ということになる。実際、本論文で提案した語彙概念構造に従って第2章から第5章まで検証を進めてきたが、認知的な要素である<ROOT>が持つ時間的素性は全て主観や状況といった認知的要素で相殺されたり出現したりするファジーな要素であった。

ここで注目したいのはその時間要素のタイプである。第3章ではグループ I を妨げる時間的素性として外項のとりうるプロセスに関する(punctual)と直接内項のとりうるプロセスに関する(punctual)、そして結果状態の持続や一時的状態の解釈を妨げる<ROOT>内の(結果)状態に関わる(permanent)と(durative)の素性を提案した。そして進行形の持つ基本的意味も限定的持続(durative)であった。

これらの素性に共通しているのはその「持続時間の長さ」である。測定の概念が、明確に終点の決まった客観的なものであるのに対し、持続時間の長さは何を対象として取るかでそのたびに違うものである。Vendler(1967)や金田一(1950)が導入した瞬間の概念は長らく語彙アスペクト研究の中心に据えられてきたものであるが、同時に研究者の悩みの種でもあった。研究の過程で現れる例外や反例は少なからずこの瞬間や持続時間の長さに関わるものである。しかし、今こうして持続時間に関する情報が主観的で認知的な概念であることが明らかになった。この考えを用いれば今後の研究は語彙アスペクトの統語的な側面の研究なのか、認知的な側面の研究なのか区別できるようになるのではないだろうか。

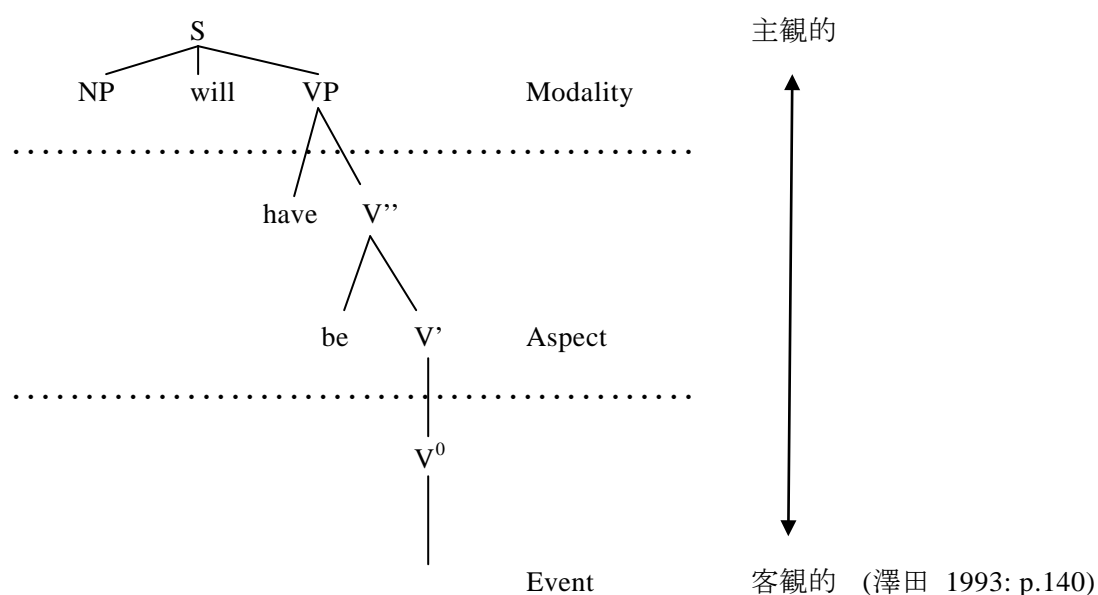
6.2 構造的要素から見える言語進化

余談ではあるがヒトの言語がなぜこのような構造的要素を持つのか考察してみたい。言語能力は確かにヒトしか持たない能力であるが、何らかの方法で情報を伝達する生物は数多く知られている。例えば Lorenz(1983)はコクマルガラスやハイイロガンのような社会生

活をする生物は何かを表現する運動と音声との完全な信号体系を持っている、と記している。有名なミツバチのダンスなどもそのような伝達的手段といってよい。おそらくヒトの言語も生物の歴史に突如、何の前触れもなく現れた能力ではなく、生物が不完全な形で受け継いできた情報伝達能力の基盤の上に成立したものであるといえるだろう。では生物が伝達する情報はどのようなものか考えてみよう。ミツバチがダンスで伝える情報は食料の方向、位置、距離といった静的情報、つまり現在の「状態」である。生物にとってエサがある場所という情報は生存に関わる重要な情報である。よってこのような「状態」の伝達は基本的な能力であるといってよいだろう。常に肉食獣からの脅威にさらされている草食獣の集団ではそれに加えて敵の出現の伝達は同様に生存に関わる重要な情報である。ここで伝えられる情報は敵の出現や敵の脅威が去ったことなどの状況の「変化」、すなわち MEASURE 型の BECOME 事象である。一方、草食動物を獲物とする肉食獣の一団がチームプレイで獲物を狙う場合、仲間に伝える情報は獲物がどのように動いているかという動的な情報が含まれるはずである。この動的情報はもし方向性を示すのであれば PATH、TERMINUS 型の BECOME 事象であり、持続的な行動であれば ACT 事象である。種として植物を食料としてだけでなくチームプレイによる狩りで肉食も行っていたヒトの祖先が BECOME 型と ACT 型の事象の区別を言語に反映していたとしても不思議はない。

澤田(1993)は英語の助動詞の重層性について次のように分析している。

(1)



澤田は英語の助動詞に限らず、日本語の助動詞、日英語主観的助動詞、日英語文副詞類など主観性・客観性の階層と統語的な階層性をリンクさせて議論を進めているが、上の階層ほど主観的であることが分かる。(1)を見れば相を表す *Aspect* の層は事象の客観的な事実関係を表す *Event* の層より上位に来ている。純粋な事実関係を表すものが *ACT* や *BECOME* で組み立てられた構造的な事象構造型であるならば *Aspect* の層以上に関わる部分が <*ROOT*> で示された部分であるといえよう。ヒト以外の生物がどのようなコミュニケーション能力を持つか確たる証拠はないが、ヒトの言語が持つアスペクトを表現できる特徴は単なる事実を伝えるよりも高度な能力なのかもしれない。そしてそれは事実を伝えるだけでなくそこに時間的關係に主観的な「長い・短い」という解釈を加える能力でもある。

とはいえ、主観的な伝達ができるならばそれが高度な言語体系か、といえればそれは否定されるべきである。例えば、明らかに主観を表す法的助動詞については階層的に *Aspect* よりも上に位置しているが、場合によっては動物のコミュニケーションにも含まれているかもしれないのである。というのも種として生存する上で重要な求愛行動やそれに伴う示威行動は別に集団行動をとらない動物にも存在するし、縄張りを守るための威嚇行動も多くの動物にみられる行為である。自らの意思態度を音声などで表明するのもコミュニケーションであるとすれば、むしろ事実を伝える体系よりも普遍的に動物界にみられる形態なのかもしれない。想像の域を出ないが、階層が上である方がより進化した言語とは断言できない。むしろ主観と客観を双方同じ体系の中で表現できうることが高度な言語体系であると考えたい。ヒトの言語の特性はこのような主観と客観、認知的な要素と構造的な要素の二面性からきていると考えるのははたして早計だろうか。

6.3 サピア・ウォーフ仮説との関連

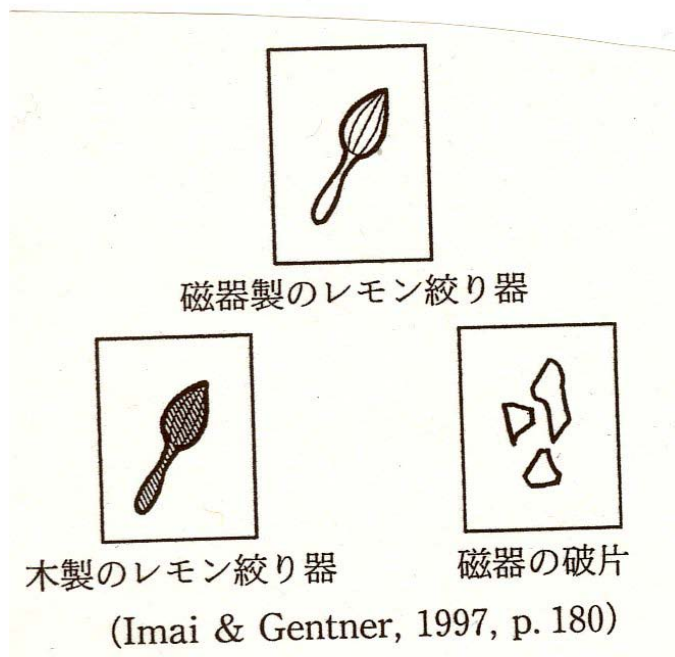
20世紀前半、個別言語内に固有の様々な文化概念が世界観の認知的分類に影響するのではないかという考えが現れた。言語相対性仮説、一般的にはサピア・ウォーフ仮説として知られるこの考え方は、言語能力がヒトにとって普遍的で生得の能力であると主張する生成文法の支持者から批判されてきた(Pinker 1994 など)。このような言語普遍性の考えを支持するようにBerlin and Kay(1969)により色の用語は普遍的意味制約に従うという研究¹がなされるなど、1970年代では言語相対性仮説はほぼ否定されていた。

¹ 例えば色をさす単語が3つしかない言語は決まって白、黒、赤である。言語が持つ色の単語の傾向は普遍的に同じであると考えられている

しかし、80年代以降認知言語の方面から生成文法支持者の極端な普遍主義に対して批判が出るようになっていく。

村端・村端(2008)は日本語話者と英語話者の間に「形」や「素材」で受け取り方が違うという Imai and Gentner(1997)の研究を紹介している。英語は日本語とは異なり物質名詞、抽象名詞、可算名詞、不可算名詞など、名詞が「形」を持つものか（可算名詞）形を持たないものか（不可算名詞・物質名詞・抽象名詞）の区別を必要とする。研究によれば日本語を母語とする英語学習者は、名詞を認知する場合に「形」と「素材」のいずれかを優先するか判断させた実験を行ったときに英語の能力が上がるにしたい「形」に反応する割合が増加したという。たとえば下記の図の場合、磁器製のレモン絞り器にでたらめな名前をつけ、同じ形で異なる物質で出来た物体の刺激候補と同じ物質で出来た異なる形の刺激候補を見せた場合、英語の能力が上がるにしたがって同じ形に反応する割合が増加するというのである。

(2)



もし Tenny(1994)の AIH がヒトの言語共通の性質であるならば、ヒトは生まれながらに共通の事象構造を把握できる能力を持っているとしてほぼ間違いないだろう。そしてその事象構造の把握が共通しているならば、事象構造の把握の違いが原因の認識の差はほとん

どないと思われる。しかし、語彙意味表示中に<ROOT>という主観的かつ認知的な要素が存在するとすれば、個体差や集団間の差の存在を否定できないことを意味する。

言語以外の別の生得的技能で説明してみよう。ヒトは生まれてから短い期間で歩行ができるようになる。しかし、歩行する際に手をどのように振るか、どのような歩幅で歩くか、どのようなリズムで歩くかは個人差がある。ここまでは言語能力と言語運用の区別となんら変わりなく説明が可能である。しかし、明治維新期までは日本人は普通に同じ側の手足が前に出る「ナンバ歩き」をしていたといわれる。一旦習得したナンバ歩きは軍事訓練や学校体育を通じて西洋風に「矯正」されていくが、なかなか浸透には苦労があったという。これなどは個人差というより文化的習慣であり、後天的な文化要素が生得的な行動に付随してその他の行動に影響を与えている例といえる。

本論文で主張されているように語彙に構造的な部分と特異的部分があるとすれば、例えば「歩ける」と同様に構造的な部分はその基本的な機能をつかさどり、ナンバ歩きのようなフォームに関する個人差、文化差のある部分は特異的部分が関係しているといえるのではないだろうか。前述の Imai and Gentner の場合、名詞を認識するという基本的な部分は英語・日本語（のみならずほぼ全ての言語）に共通の構造的要素であるのに対し、「形」に意識があるかどうかはその言語が持つ文化的な「フォーム」であり、後天的かつ特異的な要素である。このフォームにより心理学で言う「構え」が形成されていっても何もおかしくはない。

本論文は近年の多くの認知的なアプローチ同様、言語相対性仮説を否定しない考えを支持する。生成文法の支持者が言うとおり、言語の普遍的な部分は構造にあり、後天的学習が大きく左右する認知、認識に関わる特異的要素の部分については十分、言語が行動に影響を与えると考えてよい。

6.4 最後に

ここまでヒトの言語について、語彙の段階での構造的側面と認知的ファジーな側面について言及してきた。統語論を中心とした普遍文法的な考え方と認知言語学の考え方は一見、相反するように見えるが、実際は相補的な存在であるといえるだろう。また、その二つの要素が直接関わるインターフェースの部分も当然存在するはずである。本論文では触れていないが、おそらく語彙意味以外の部分でもヒトが生得的に持つ要素と、経験や主観に基づいて決定される要素がどちらも必要となる領域はあることだろう。例えば発音やアクセ

ントなども、その可能性はある。ヒトは必ずしも原則的な発音通りに発話するとは限らない。わざと調子っぱずれに発音したり、間延びして発音して見せたりといった行為には何かしら認知的な要素もあることだろう。これからの言語研究では構造的側面はどこなのか、認知的側面はどこなのか、という視点でより分析的に言語を見ていく必要があるのではないだろうか。

あとがき

新潟の県立高等学校で英語を教えるようになって20年が経過し、その節目の年にこの論文を出すのはなにか感慨深いものがある。どうやったら英語をうまく教えることができるのだろう、と考え続け、研究会に参加したり、いろいろな手法を試して発表したり、論文を描いて発表したり、様々な苦労を続けてきた。そして一つ気がついたことがあった。教え方を追い求めるのは大事だが、人それぞれ個性もあれば癖もある。自分がうまくできたやり方を他の人がやってもうまくいくとは限らないし、逆もまた真なり。このことに気づいて以来、教育実習生が来るたびにコメントで「芸風を大事にしてください」ということが多くなった。同僚たちもなぜか私の使う「芸風」という言葉が好きなようだ。英語が苦手（？）な英語の先生のクラスなぜか生徒の英語の成績が高かったり、留学経験があったり学歴が高かったり、申し分のない英語使いの先生のクラスでなぜか英語の成績が振るわなかったり、きっとこんなクラスは日本中どこでもあるんだろう。教育は人なり。まずは人。「芸風」という言葉の裏に見えるのは人柄とか人格とか、そういう部分なのかもしれない。

バブルは崩壊し、不況、就職氷河期などを経て世の中はすっかり競争社会になった。高校現場でも他県でうまくいったやり方だからこうやれ、ああやれ、という部外者の声。上意下達で管理主義的なアプローチがあちこちでとられ、点数を取らせるための指導も当たり前になってきた。授業時間確保、補習授業、課題チェックとどんどん雑用が増える教育現場。「芸風」という言葉はなにか殺伐としがちな気持ちにふと安らぎを与える一言のようだ。

そんなこともあって、現任校の新潟県立新潟南高等学校に転勤してからは指導技術よりも教材作成に興味が移ってきた。誰がどう使ってもらってもかまわないけれど、誰もがよかったと言ってくれる教材。そんな教材が作れたら、後は思う存分芸風を発揮してもらえるではないか。こんな指導してみました、と発表するよりもひょっとしたらこっちの方が貢献度は高いかもしれない。それが大学院に戻る決心をした理由の一つだった。

大学院に入ってから、研究して得られた成果を教材作成に活かし始めた。語彙意味論が一番役に立ちそうな単語テストは週に4回分くらい作るが、同僚からも生徒からも評判がいいようでなによりうれしい。「使い勝手がいいから来年も使わせてくれない？」といわれて今では1年から3年まで全ての学年が私の作った単語テストを使っている。単語テストの範囲になっている単語帳はあちこちで生徒が広げてみるようになった。転勤した当時

ではあり得なかった光景である。その様子を見るたびに、大学院に戻ってよかったな、と実感する。

大学院にもどる5年ほど前から大学時代の指導教員であった今は亡き大石強先生には打診を取っていた。諸般の事情でなかなか県教委の許可が下りなかったがあきらめずに意志を貫いて今でも良かったと思っている。主指導教員として快く受け入れてくださった大石先生には心から感謝している。入学後、大石先生はご体調を崩され、修士の指導はたびたびメールを通じての指導になった。具合が良くない中でも、毎回、20ページ近いレポートに目を通してくださり、いい発見があれば褒めてもらい、論文の読み込みの甘いところがあれば、厳しいコメントで叱咤してもらったことは今でも忘れられない。

亡くなられた大石先生に代わって指導を引き継いでくださった、主指導教員福田一雄先生、副指導教員の秋孝道先生、大竹芳夫先生からは論文指導のみならず各種の研究会でもいろいろお世話になった。この場を借りて感謝申し上げたい。

また、半年間、大学派遣という形で現場に多大なご迷惑をおかけしたことを新潟南高等学校の職員、生徒の皆さんにお詫びしたいと思う。これまで研究が今後の新潟県の高等学校英語教育の発展に生かされるように努力を続けていきたいと考えているところである。

2010年1月

星野 真博

<References>

- Arad, M. (1998) “VP-Structure and the Syntax-Lexicon Interface,” Doctorial Dissertation, University College of London, London.
- Bach, E and R. T. Harms (eds.) (1968) *Universals in Linguistic Theory*, Holt, Rinehart, Winston, NY.
- Baker, C. L. (1978) *Introduction to Generative-Transformational Syntax*, Prentice Hall, Englewood Cliffs, NJ.
- Baker, M. C. (1988) *Incorporation: A Theory of Grammatical Function Changing*, University of Chicago Press, Chicago, IL.
- Beavers, J. (2008) “Scalar Complexity and the Structure of Events,” In Johannes Dölling and Tatjana Heyde-Zybatow (eds.) (2008), 245-65
- Berlin, B. and P. Kay (1969) *Basic Color Terms: Their Universality and Evolution*, University of California Press, Berkley, CA.
- Bradley, H and S. Potter (1968) *The Making of English*, Macmillan, London.(大塚高信(訳) (2008) 『英語の成立・改訂版』成美堂, 東京.)
- Butt, M. and W. Geuder (eds.) (1998) *The Projection of Arguments: Lexical and Syntactic Constraints*, CSLI Publications, Center for the Study of Language and Information, Stanford University, Stanford, CA.
- Carlson, G. (1980) *Reference to Kinds in English*, Garland, NY.
- Chomsky, N. (1965) *Aspects of the Theory of Syntax*, The MIT Press, Cambridge, MA.
- Chomsky, N. (1971) *Problems of Knowledge and Freedom*, Fontana, London.
- Chomsky, N. (1981) *Lectures on Government and Binding*, Foris, Dordrecht.
- Chomsky, N. (1986a) *Knowledge of Language: Its Nature, Origin, and Use*, Praeger, NY.
- Chomsky, N (1986b) *Barriers*, The MIT Press, Cambridge, MA.
- Chomsky, N. (1988) *Language and Problems of Knowledge: The Managua Lectures*, The MIT Press, Cambridge, MA.
- Chomsky, N. (1995) *The Minimalist Program*, The MIT Press, Cambridge, MA.
- Croft, W. (1990) “Possible Verbs and the Structure of Events,” in S. L. Tsohatzidis (ed.), 48-73.

- Croft, W. (1991) *Syntactic Categories and Grammatical Relations*, The University of Chicago Press, Chicago, IL.
- Croft, W. (1994) "The semantics of Subjecthood," in M. Yaguello, ed., 29-75.
- Cruse, D. A. (1973) "Some Thoughts on Agentivity," *Journal of Linguistics* 9, 11-23.
- Dölling, J. And T. Heyde Zybatow (2008) *Event Structures in Linguistic Form and Interpretation*. Mouton de Gruyter, Berlin.
- Dowty, D. R. (1979) *Word Meaning and Montague Grammar*, Reidel, Dordrecht.
- Dowty, D. R. (1991) "Thematic Proto-roles and Argument Selection," *Language* 67, 547-619.
- Engelberg, S. (2000) "The Magic of the Moment: What It Means to Be a Punctual Verbs," *BLS* 25, 109-21, Berkeley Linguistic Society, Berkeley, CA.
- Fillmore, C. (1968) "The Case for Case," in E. Bach and R. T. Harms (eds.)(1968), 1-88.
- Fillmore, C. (1970) "The Grammar of Hitting and Breaking." In R. Jacobs and P. Rosenbaum (eds.) (1970), 120-33.
- 藤井正 (1966) 「「動詞+ている」の意味」『国語研究室』 5, 東京大学(金田一春彦(編)『日本語動詞のアスペクト』(1976)に再録, 97-116).
- Gazzaniga, M. S. (1992) *Nature's Mind: Biological Roots of Thinking, Emotions, Sexuality, Language, and Intelligence*, Basic Books, NY.
- Goldsmith, J. and E. Woiwetschlaeger (1982) "The Logic of the English Progressive," *Linguistic Inquiry*, Volume 13, 79-89.
- Gordon, P. (1986) "Level Ordering in Lexical Development," *Cognition* 21: 73-93.
- Grimshaw, J.(1990) *Argument Structure*, The MIT Press, Cambridge, MA.
- Gruber, J. S. (1965) "Studies in Lexical Relations," Unpublished Ph. D. dissertation, MIT.
- Hale, K. L. and S. J. Kayser (1992) "The Syntactic Character of Thematic Structure," in I. M. Roca, (ed.) (1992), 107-43.
- 原口庄輔・中村捷(編)(1992)『チョムスキー理論辞典』研究社, 東京.
- 畠山雄二・本田謙介・田中江扶 (2008) 「同属目的語構文と「上戸彩はきれいな目をしている」構文」『英語教育』2006年10月号, 45-47, 大修館書店, 東京.
- Hornstein, N. (1990) *As Time Goes By*, The MIT Press, Cambridge, MA.
- Hoshino, M. (2007a) "On the English Progressive," 新潟大学大学院現代社会文化研究科博士課程前期, 修士論文.

- Hoshino, M. (2007b) “A Clue to Figure out Ambiguity of the English Progressive,” 『英文学会誌』 第三十号, 91-120, 新潟大学人文学部.
- Hoshino, M. (2008) “On Repetitive Interpretation of the English Progressive,” 『現代社会文化研究』 第 41 号, 167-195, 新潟大学大学院現代社会文化研究科.
- 星野真博 (2008a) 「英語進行形の近未来を表す用法と『瞬間』」『現代社会文化研究』 第 43 号, 207-224, 新潟大学大学院現代社会文化研究科.
- 星野真博 (2008b) 「動詞の語彙概念構造の相的表示について－「瞬間」の扱いをどうするか－」『現代社会研究科 プロジェクト論集』 第 3 号, 41-60, 新潟大学大学院現代社会研究科.
- 星野真博 (2009a) 「結果残存を表す英語進行形について」『現代社会文化研究科 プロジェクト論集』 第 4 号, 19-37, 新潟大学大学院現代社会文化研究科.
- 星野真博 (2009b) 「語彙的使役動詞の語彙概念構造表示に関する一試案」『欧米の言語・社会・文化』 第 15 号, 93-112, 新潟大学大学院現代社会研究科「ヨーロッパの基層文化」プロジェクト.
- 星野真博・秋孝道 (2006) 「進行形の成立条件に関する覚え書き」『欧米の言語・社会・文化』 第 12 号, 1-22, 新潟大学大学院現代社会文化研究科「ヨーロッパの基層文化」プロジェクト.
- 今井邦彦(編) (1986) 『チョムスキー小事典』 大修館書店, 東京.
- Imai, M and D. Gentner (1997) “A Crosslinguistic Study of Early Word Meaning : Universal Ontology and Linguistic Influence,” *Cognition* 62, 169-200.
- 庵功雄 (2001) 「テイル形、テイタ形の意味の捉え方に関する一試案」『一橋大学留学生センター紀要』 4, 75-94, 東京.
- 伊藤たかね・杉岡洋子 (2002) 『語の仕組みと語形成』 原口庄輔・中島平三・中村捷・川上誓作(編) 英語学モノグラフシリーズ 16, 研究社, 東京.
- 岩本遠億 (2008) 『事象アスペクト論』 開拓社, 東京.
- Jackendoff, R (1972) *Semantic Interpretation in Generative Grammar*, The MIT Press, Cambridge, MA.
- Jackendoff, R. (1983) *Semantics and Cognition*, The MIT Press, Cambridge, MA.
- Jackendoff, R. (1990) *Semantic Structure*, The MIT Press, Cambridge, MA.
- Jackendoff, R. (1991) “Parts and Boundaries,” in B. Levin and S. Pinker (eds.) (1991), 9-45.

- Jackendoff, R. (1996) “The Proper Treatment of Measuring Out, Telicity, and Perhaps Even Quantification in English,” *Natural Language and Linguistic Theory* 14, 305-54.
- Jacobs, R. A. and P. S. Rosenbaum, eds. (1970) *Readings in English Transformational Grammar*, Ginn, Waltham, MA.
- 影山太郎(1996) 『動詞意味論一言語と認知の接点一』柴谷方良・西光義弘・影山太郎(編) 日英語対照研究シリーズ(5), くろしお出版, 東京.
- 影山太郎(編) (2001) 『日英対照 動詞の意味と構文』大修館書店, 東京.
- 影山太郎(編) (2009) 『日英対照 形容詞・副詞の意味と構文』大修館書店, 東京.
- 影山太郎・由本陽子 (1997) 『語形成と概念構造』中右実(編)日英語比較選書 8, 研究社, 東京.
- 柏野健次 (1999) 『テンスとアスペクトの語法』開拓社叢書 9, 開拓社, 東京.
- Katz, J.J. and P. Postal (1964) *An Integrated Theory of Linguistic Descriptions*, The MIT Press, Cambridge, MA.
- Kayne, R. S. (1994) *The Antisymmetry of Syntax*, The MIT Press, Cambridge, MA.
- Kimball, J. P. (1973) *The Formal Theory of Grammar*, Prentice Hall, Englewood Cliffs, NJ.
- 金田一春彦 (1950) 「国語動詞の一分類」『言語研究』15 (金田一春彦(編)『日本語動詞のアスペクト』(1976)に再録)
- 金田一春彦(編) (1976) 『日本語動詞のアスペクト』むぎ書房, 東京.
- 工藤真由美 (1995) 『アスペクト・テンス体系とテキストー現代日本語の時間の表現ー』ひつじ書房, 東京.
- Lakoff, G. (1966) “Stative Adjectives and Verbs in English,” *Mathematical Linguistics and Automatic Translation. Report to the National Science Foundation 17*, The Computation Laboratory of Harvard University, Cambridge, MA.
- Lakoff, G. (1970) *Irregularity in Syntax*, Holt, Rinehart, and Winston, NY.
- Langacker, R. (1991) *Foundations of Cognitive Grammar, Vol.2: Descriptive Application*, Stanford University Press, Stanford, CA.
- Larson, R. (1988) “On the Double Objects Construction,” *Linguistic Inquiry* 19, 335-91.
- Leech, G. and J. Svartvik (1994) *A Communicative Grammar of English 2nd Edition*, Longman, London.
- Leech, G. (2004) *Meanings and the English Verbs Third Edition*, Longman, London.

- Levin, B. (1993) *English Verb Classes and Alternations – A Preliminary Investigation*, The University of Chicago Press, Chicago, IL.
- Levin, B. and S. Pinker (eds.) (1991) *Lexical and Conceptual Semantics*, Blackwell, Cambridge, MA.
- Levin, B. and M. Rappaport Hovav (1995) *Unaccusativity: At the Syntax-Lexical Semantics Interface*, The MIT Press, Cambridge, MA.
- Levin, B. and M. Rappaport Hovav (2005) *Argument Realization*, Cambridge University Press, Cambridge.
- Lorenz, K. (1983) *Er Redete mit Vieh, den Vögeln und den Fischen*, Deutscher Taschenbuch, Verlag, Munich.(日 高敏隆(訳)『ソロモンの指環—動物行動学入門—』(1998), 早川書房, 東京.)
- 町田健 (2006) 『チョムスキー入門 生成文法の謎を解く』 光文社, 東京.
- 丸田忠雄 (1998) 『使役動詞のアナトミー 語彙的使役動詞の語彙概念構造』松柏社, 東京.
- 丸田忠雄・須賀一好(編) (2000) 『日英語の自他の交替』 ひつじ書房, 東京.
- McCawley, J. D. (1968) “Lexical Insertion in a Transformational Grammar without Deep Structure,” *CLS* 4, 71-80, Chicago Linguistic Society, Chicago, IL.
- 森岡健二 (1951) 『国立国語研究所年報 2』 国立国語研究所.
- 村端佳子・村端五郎 (2008) 「英語(L2)の学習は日本語(L1)の語彙辞書を買える！ —マルチコンピテンス研究が示唆するもの—」『英語教育』 Vol.56 No.11, 14-17, 大修館, 東京.
- 中村捷 (2003) 『意味論—動的意味論』 開拓社, 東京.
- 西森マリー (2009) 「今月の時事英語 若者ことば編 be Michael Jacksoned out ★アメリカを塗りつぶしたスーパースター」『英語教育』 2009 年 9 月号, p.40, 大修館, 東京.
- O’driscoll, J. (1988) *Penguin Basic English Grammar*, Penguin Books, London.
- 奥田靖男 (1977) 「アスペクトの研究をめぐって—金田一的段階—」『宮城教育大学国語国文』 8.
- 大石強 (1988) 『形態論』 開拓社, 東京.
- 大石強 (2008) 「使役・起動交替の条件」金子義明・高橋大厚・小川芳樹・菊地朗・島越郎(編)『言語研究の現在 形式と意味のインターフェース』 183-93, 開拓社, 東京.
- 小野尚之 (2000) 「動詞クラスモデルと自他交替」丸田忠雄・須賀一好(編)『日英語の自他

交替』, 1-32.

Perlmutter, D. M. (1978) "Impersonal Passives and the Unaccusative Hypothesis," *Proceedings of the Fourth Annual Meeting of the Berkeley Linguistic Society*, 157-89, Berkley Linguistic Society, University of California, Berkley, LA.

Pesetsky, D. (1995) *Zero Syntax*, The MIT Press, Cambridge, MA.

Pinker, S. (1994) *The Language Instinct*. William Morrow, NY.

Pullum, G. K. (1996) "Learnability, Hyperlearning, and Poverty of Stimulus," *Proceedings of the 22nd Annual Meeting: General Session and Parasession on the Role of Learnability in Grammatical Theory*, J. Johnson, M. L. Juge, and J. L. Moxley(eds.) 498-513, Berkley Linguistic Society, Berkley, CA.

(<http://users.ecs.soton.ac.uk/karnad/Papers/Py104/pullum.learn.html>)

Pullum, G. K. and B. C. Scholz (2002) "Empirical Assessment of Stimulus Poverty Arguments," *The Linguistic Review* 19, 9-50.

Pustejovsky, J. (1991) "The Syntax of Event Structure," *Cognition* 41, 47-81.

Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech and J. Svartvik (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*, Longman, London.

Radford, A. (2004) *Minimalist Syntax: Exploring the Structure of English*, Cambridge University Press, Cambridge.

Rappaport Hovav, M. and B. Levin (1996) "Two Types of Derived Accomplishments," in M. Butt and T. H. King (eds.) (1996), *The Proceedings of the First LFG Workshop*, 375-88, Grenoble.

Rappaport Hovav, M. and B. Levin (1998) "Building Verb Meanings," in M. Butt and W. Geuder (eds.) (1998), 97-134.

Ritter, E. and S. T. Rosen (1996) "Strong and Weak Predicate: Reducing the Lexical Burden," *Linguistic Analysis* 26. 29-62.

Ritter, E. and S. T. Rosen (1998) "Delimiting Events in Syntax," In M. Butt & W. Geuder (eds.) (1998), 135-64.

Roca, I. M. (ed.) (1992) *Thematic Structure: Its Role in Grammar*, Foris, Berlin.

澤田治美 (1993) 『視点と主観性 ―日英語助動詞の分析―』 ひつじ書房, 東京.

Shibatani, M. and S. A. Thompson (eds.) (1996) *Grammatical Constructions*, Clarendon Press,

- Oxford.
- Smith, C. S. (1991) *The Parameter of Aspect*, Kluwer, Dordrecht.
- Stowell, T. (1981) "Origins of Phrase Structure," Unpublished Ph. D. Dissertation, MIT.
- Swan, M. (2005) *Practical English Usage Third Edition*, Longman, London.
- Talmy, L. (1985) "Force Dynamics in Language and Thought," *Papers from the Parasession on Causatives and Agentivity at the Twenty-First Regional Meeting*, 293-337, Chicago Linguistic Society, Chicago, IL.
- Tenny, C. (1994) *Aspectual Roles and the Syntax-Semantics Interface*, Kluwer, Dordrecht.
- Tsohatzidis, S. L. (ed.) (1990) *Meanings and Prototypes: Studies in Linguistic Categorization*, Routledge, London.
- Tsunoda, T. (1985) "Remarks on Transitivity," *Journal of Linguistics* 21, 385-96.
- Van Vallin, R. D., Jr. and D. P. Wilkins (1996) "The Case for 'Effector': Case Roles, Agents, and Agency Revisited," in M. Shibatani and S. A. Thompson (eds.) (1996), 289-322.
- Van Voost, J. G. (1992) "The Aspectual Semantics of Psychological Verbs," *Linguistics and Philosophy* 15, 65-92.
- Vendler, Z. (1967) *Linguistics in Philosophy*, Cornell University Press, Ithaca, NY.
- Verspoor, C.M. (1997) *Contextually-dependent Lexical Semantics*, Ph.D. dissertation, University of Edinburgh.
- 王怡人 (2005) 「現代中国語の結果複合動詞形成一語彙的事象構造の立場から一」『現代社会文化研究』第 32 号, 177-194, 新潟大学大学院現代社会文化研究科.
- Williams, E. (1981) "Argument Structure and Morphology," *The Linguistic Review* 1, 81-114.
- Yaguello, M. (ed.)(1994) *Subjecthood and Subjectivity: The Status of the Subject in Linguistic Theory*, Ophrys, Paris.
- 安井稔(編) (1975) 『新言語学辞典 改訂増補版』研究社, 東京.
- 米山三明・加賀信広 (2001) 『語の意味と意味役割』原口庄輔・中島平三・中村捷・川上誓作(編) 英語学モノグラフシリーズ 1, 研究社, 東京.
- Zechmeister, E. B., A. M. Chronis, W. L. Cull, C. A. D'Anna, and N.A. Healy (1995) "Growth of a Functionally Imported Lexicon," *Journal of Reading Behavior* 27(2), 201-212.

索引

あ

ACT 51

アクチュアリティ 98, 99

アスペクト 31-37

アメリカ英語 21

イギリス英語 21

イタリア語 12, 13, 15

ヴェトナム語 7

APS 明細図式 5

か

Katz-Postal 仮説 29

間接内項 42, 50-83

間接内項に関する終点制約(TS) 42

完了(telic) 2, 10, 15, 32, 37

グループ I 85, 99, 101-135

グループ II 85, 99, 137-157

グループ III 85, 99, 159-168

言語運用 1, 15

言語能力 1, 5-6, 15

経路項(PATH) 43, 46

経路目的語動詞 37, 39-40, 58

限定 32, 37, 40

限定的持続(limited duration) 95-96, 110,
113, 122, 124-127, 144, 155, 159, 162-167

CAUSE 51, 68-78

語彙概念構造 1-3, 23, 25, 31, 35, 45-84,
104-111, 120-121, 126-127, 135, 137,

141-142, 147, 149, 152, 157, 159, 165-167,
169

語彙分解 29-32, 45

さ

サピア・ウォーフ仮説 171-173

使役連鎖 11-12

刺激の貧困 5

事象構造 32-37

事象構造鋳型 79-81

θ 理論(θ -theory) 25-29

習慣用法 139, 143-152

終点項(TERMINUS) 41-43

主題関係 25-27

主題増減動詞 37-40, 60

主題役割 25-29, 43, 45

主題役割付与統一性仮説(UTAH) 27, 43

状態変化動詞 37-40, 70, 77

瞬間(punctual) 107-113, 139-157, 164-168,
169

スペイン語 15, 44, 146-149

生成意味論(Generative Semantics) 29

Semelfactive 動詞 36, 108

相インターフェイス仮説(AIH) 43,

相構造 37, 45-46, 50-52, 69, 79

測定 2, 11, 37-45, 76-80, 96, 142, 152, 169

測定項(MEASURE) 11, 15, 43, 46, 152,

た

中国語 12, 80-81

直接内項 42, 50-84

直接内項に関する測定制約(MOC) 42

ドイツ語 10, 13, 16

統率束縛理論 25-29

は

反復用法 139-142

BECOME 50-51, 54-61

非対格(unaccusative) 12-14

非能格(unergative) 12-14

不完了(atelic) 2, 10, 15, 32, 36, 37

複数発生 139, 152-157

普遍的配列仮説(UAH) 27, 43

プラトンの問題(Plato's Problem) 1-6

フランス語 7, 13, 15, 44, 59

ベルファスト方言 13-14

ま

右主要部の規則 7

ミニマリスト・プログラム 8, 29, 45, 82

や

予期的解釈 160-168

予定的解釈 160-168

ら

ラインラント方言 16

<ROOT> 61-67

ロシア語 10, 57-58